

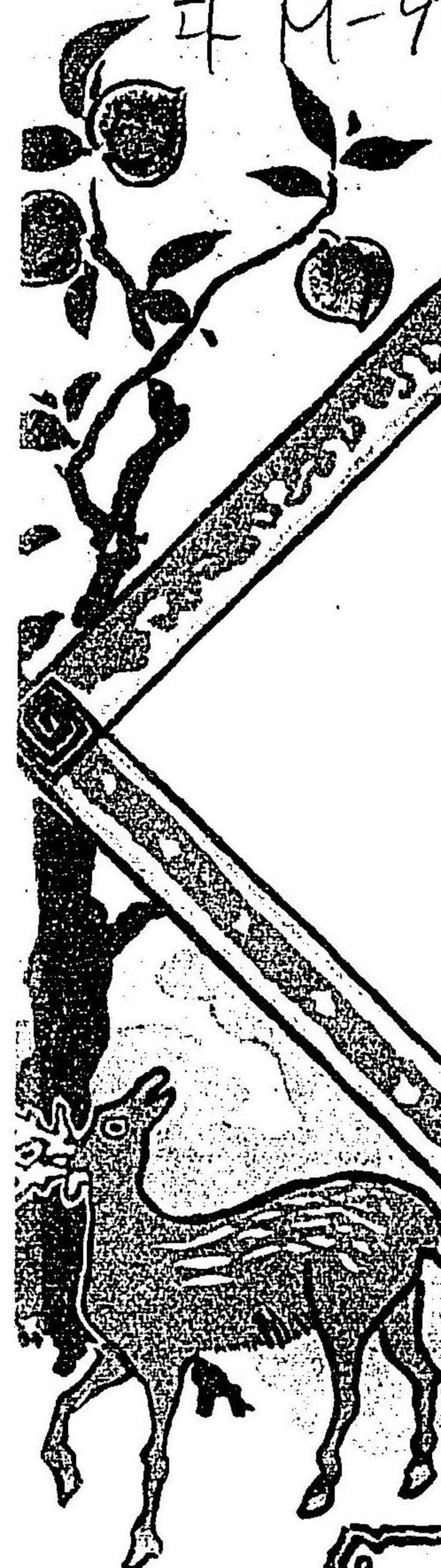
4 M-90

420.24

R 92Kr

柳宗元

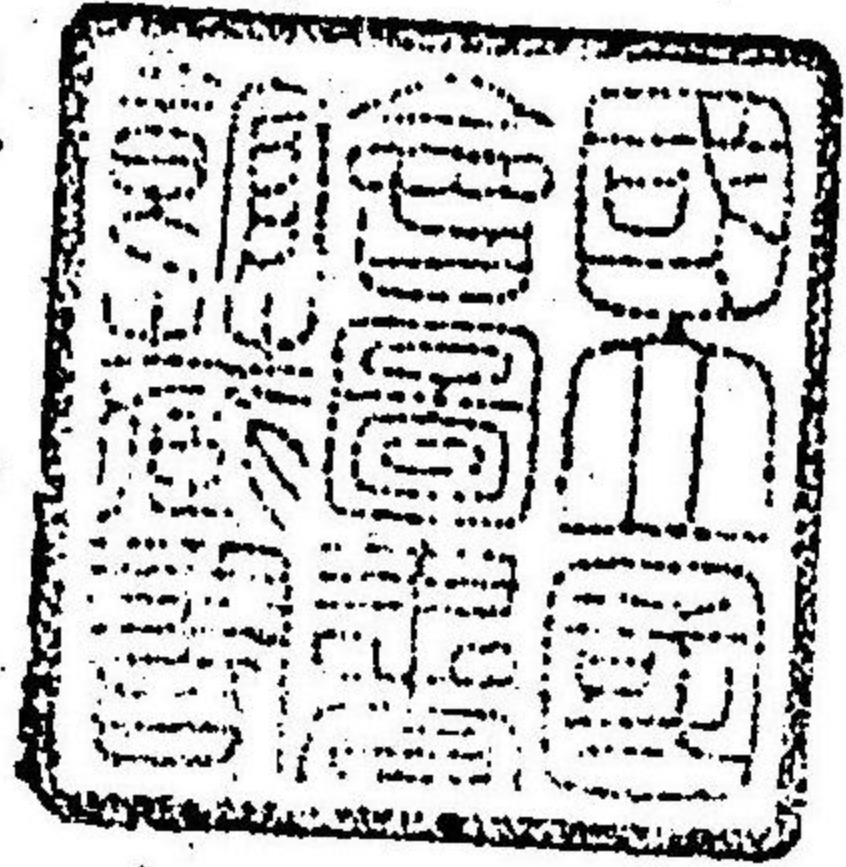
文學士久保天隨著述
東西文豪評傳 第一篇



京東
新聲社發兌

10

柳宗元



920.24
R92Kn

33672

柳宗元の首に書す

絶代聰明の雋才たる柳子厚が支那文學史上に於ける位置如何に至りては、今此に叙記するの要あるべからず。何となれば、この一卷の書冊は、専ら斯事を究明せむか爲に、撰述したれば也。然れども、便宜上之を概括して、試に一言せむか。蓋し唐三百年の文章をして、坦夷明白、日月に掲げ、渾渾灑灑、浸すて江海の如く、三代に同しく、兩漢に駕せしめし。所以の者、韓昌黎の外に、柳州ありしが爲ならむのみと。この數語、以て足れりと爲すべし。而して古へ韓を注せし者、五百家と稱せられ、柳は僅に數家を出でず、其行はれさりしや容易に推知すべく、余輩亦大に惑なき能はざる也。歐陽廬陵の如き、宋代の名賢、固より言を知ると稱せらる。而かも猶ほ道ふ韓柳並列すべからず。其道夏夷の如く然りと。他の紛紛

たる拘儒輩雷同を事とする者は知るべきのみ。是れ、豈に子厚が
黨人の名籍磨滅せざるに由るか。噫、亦た宛なり。往歲、余五城^一に在
りしとき、初めて柳集を讀み、時に纒^一歎して息む能はざらむと、
自ら其後身に非ざる無きかを疑ひぬ。狂か、愚か、余固より知らず、
唯た余を起してかくの如くならしむる者、何ぞ其れ一段の宿縁
なりと謂はむや。

年少早く既に意を浮世に得き、而かも一片稜^一爽の氣未だ銷磨せ
ず、猶ほ且つ幾分の俠を負ふ。闇幽顯微は至竟吾曹本來の宿志の
み。余柳集に枕藉すること已に久しく、かつて其傳を撰述せむこ
とを期せしが、但た機を得ざりしを以ての故に、荏苒^一に幾周
星頃ろ東西文豪評傳刊行の擧あるに際し、その囑付を空うする
を得き、乃ち之を以て應じ、仍てこの卷を成すに至りぬ。

この書始めて稿を起す、實に二月上旬澣に在り。幾もなくして他事

に拘累せられ、僅に十數葉を塗抹せしのみ、久しく捨て、顧みず。東
坡句あり、曰く、因病得閒殊不惡。余こゝに寧ろ病まむことを望
みしと雖も、不才の身徒に頑健長しへに藥爐と親む期なかりき。
而して促す者愈よ逼り、宿諾を果さざるを以て責むるに至りて
は、鞭箠の苦より甚しき者あり、辭謝の言殆んど盡くるに及び、決
然閒を偷みて復た筆を執る。家貧にして名山なく、學淺くして腹
笥に乏し、盜を見て索を絢ふ、忙且つ急なるかな。章を爲して纒に
終れば、直に版に上す。檢覈未だ精ならず、紀述未だ備はらず。之を
顯はさむと欲し、却て其累を作さむを怕る。余が西施に唐突し、千
年以前の才人に孤負するの罪、固より淺からず。燈膏盞を易ふる
こと十夜稿全く成り、一讀自ら省みて、忸怩す。嗟乎、之を以て大方
の教を乞はむとす、愧を知らざるの誚、固より逃るべきに非ず。望
外の幸は、姑らく笑て之を措け。

すでに柳を傳す、韓亦た論なかる可らぎ。その之を成すは、當さに
 數月の後、池塘春草、夢正に消えて、梧葉秋聲を報する候に在るべ
 し。若し夫れ、騎馬千言の才に至りては、余自ら僭して任する者に
 非ざらねども、惟ふ今の世に在りて、行施頗る急時に倒逆に陥る、
 我の如き者、何ぞ反て彼の慎重自ら持するに過ぎ、遂に爲すこと
 無くして止む者に勝らすといはむや。

明治三十三年四月

著者識

柳宗元年譜

唐 代宗大曆八年、柳宗元生る。字は子厚。

此歲吐蕃入寇、瀛州をして拒いて之を却けしむ。文壇雙星の二なる韓愈退之、生れて己に六歳。

大曆九年、朱泚入朝す。

大曆十年、

大曆十一年、年四歳、京城廬田中に居る、父侍御

鎮吳に在り、家に書なく、太夫人古賦十四首を教え、皆之を誦傳す。

大曆十二年、元載を誅す。

大曆十三年、

大曆十四年、田悅、承嗣に繼ぎ、李希烈又節度使となる、

德宗建中元年、崔祐甫、同平章事となる。

建中二年、郭子儀卒す、盧杞同平章事となる。

建中三年、李希烈、朱滔、王武俊皆反す。

建中四年、朱泚反す、段秀實之を討ち克たすして、死す。卒

天の國

興元元年、李希烈僭號、李懷光反す、帝梁州に奔る。李晟等京城を復し、車駕還幸。

貞元元年、年十三歳、劉禹錫曰く、子厚始め童子を以て、身元の初に奇名あり、と。

貞元二年、

貞元三年、

貞元四年、

貞元五年、年十七歳、進士を求む。

貞元六年、

貞元七年、年十九歳、禮部郎中弘農楊憑の女を娶る。夫人、年十五。

貞元八年、年廿歳、父鎮召し還さる。

貞元九年、年廿一歳、進士の第に登る。是歲五月十七日、父鎮親和里の第に卒す。年五十五。

貞元十年、

貞元十一年、前年、陸贄相を罷められ、忠州別駕となる。陽城
之を諫め、又左遷さる。

貞元十二年、年廿四歳、博士宏詞科を求む。

貞元十三年、

貞元十四年、年廿六歳、博學宏詞科に中てられ、
集賢殿正字となる。

陽城道州刺史となる。吳少融反す。

貞元十五年、年廿七歳、是歳八月一日夫人楊氏卒

す、年廿三。子厚爲に墓誌を撰す。

貞元十六年、

貞元十七年、年廿九歳、藍田尉に調せらる。

貞元十八年、

貞元十九年、年卅一歳、子厚監察御史裏行となり、

十二月、監察使を進領す。

韓愈貶せられて、陽山令となる。

貞元廿年

順宗永貞元年、年卅三歳、禮部員外郎に擢てらる、

八月憲宗即位、二王の黨敗れ、八司馬貶謫し、子
厚は永州司馬に遷る。途に湘江を経て、「屈原を
吊ふ文」あり。

憲宗元和元年、年卅四歳、子厚永州に在り、是歳

五月十五日、太夫人盧氏零陵佛寺に卒す。子厚

懲咎賦あり。

劉闢反す。

元和二年、年卅五歳、元克己來謫す。

白居易、翰林學士となる。

元座三年、年卅六歳、吳武陵來謫す。

元和四年、年卅七歳、是歳九月廿八日始めて西山

を得て宴遊し、尋いで鉅錡譚諸勝に遊び、並に

記あり。

元和五年、年卅八歳、蕭翰林俛に與ふる書あり。

元和六年、年卅九歳庶女死す、年十歳といふ。

元和七年、年四十歳、袁家渴、石渠、石澗、小石

元和十二年、淮西平ぎ、元濟斬らる。

元和十三年、年四十六歳、平淮夷雅二篇を上る。

元和十四年、年四十七歳、十一月八日、柳州に卒す。

舅弟盧遵、明年七月十日を以て長安に歸葬す。

正月、韓愈佛骨を論し、潮州に左遷さる。

(柳州の年譜、人の善く知れるは、齊腰拙堂
が自ら撰びて、續文話第三卷に掲載せる者を
推すべし。拙堂曰く、「昌黎諸公昔年譜あり、

柳獨り有る無し、余かつて、其全集及び新舊
唐書に據り、略は其年月を次し、以て攷察に
便にす。」と。又曰く、「余既に柳州の爲に年譜

を造る、後宋の文安禮柳文年譜の後序を見る
而かも譜は闕けて傳らず。或人謂ふ、明清間
の人蓋し嘗て補作す、亦た其名を記せず、
と。余以爲へらく、果して或人の言の如くな
れば、他日之を得て、以て異同を校するも、
亦た是れ考據の一樂、また必ずしも徒勞と爲

城山等の記あり、又閔己賦を作る。

元和八年、

元和九年、年四十二歳、去年の春永州火災多く、

日夜數十發、少尙ほ五六發、子厚爲に文を作り

畢方を逐ふ、次いて州刺史崔能の爲に、湘源二

妃廟の碑を作り、又段太尉逸事狀を撰ひ、進め

て史館に送る、なほ四山賦あり。

元和十年、年四十三歳、永州より召されて京師に

至る、途上の詩十數首あり。三月出されて柳州

刺史となり、劉禹錫と衡陽に別を賦す。六月廿

七日任に到り、城樓に登て詩あり、七月従父弟

宗直死す。

吳元濟反す。

元和十一年、年四十四歳、二月榕葉落盡、詩あり。

三月、井を城北隍上に造る、是歳周六生る。吳

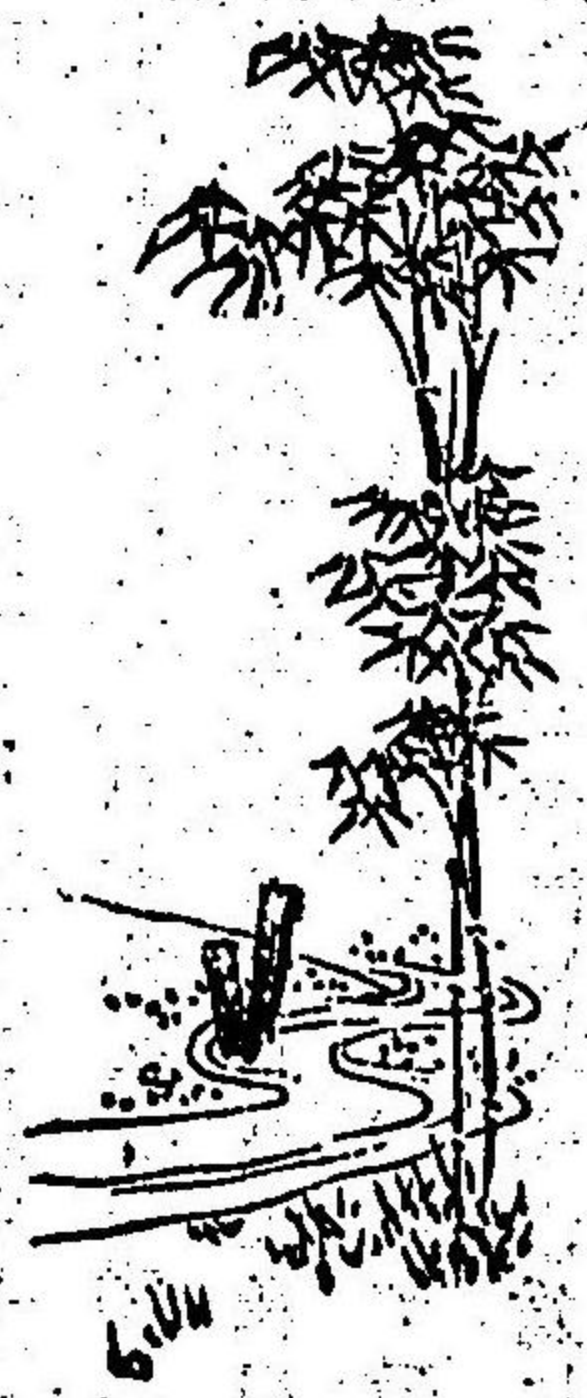
武陵、裴度孟簡に勸め子厚を用ひしめむとす、

而かも得ず。

さす、故に背て刪らす」と。然れども今の粵
 雅堂叢書第十四集の中に、韓柳年譜あり、其
 第一卷を柳州年譜となす。陳景雲の序に曰く
 「柳集久しく逸し、年譜獨り其節を存す。廣陵
 の馬君嶰谷、江を涉て韓譜を購ひ、後未た久
 しからずして、復た宋槧の柳集殘帙を收む、
 其中の年譜完好、諸本無き所たり、因て韓譜
 と同じく梓す」と。而して後序は、即ち文安
 禮の筆せし者たり。是に於てか知る、拙堂の
 云々せしは、斷して此書なるべきを。而して
 之を拙堂の撰製に比するに、全く相似て、特
 に軒題を加ふべき者なし。今この兩譜を并せ
 簡明を主として、繁を除き要を存し、之を卷
 首に掲げ、以て讀者の披覽に便すとす。(ふ)

目次

第一	宗元の時勢	一頁
第二	宗元の少時	十二頁
第三	宗元の仕進	三十二頁
第四	三王の敗と八司馬の貶謫	四十二頁
第五	永州の司馬	七十頁
第六	京師の例召と劉禹錫との關係	九十七頁
第七	柳州の刺史	百九頁
第八	宗元の本領	百廿四頁
第九	宗元の文	百卅七頁
第十	宗元の詩	百五二頁



さす、故に背て刪らす」と。然れども今の粵雅堂叢書第十四集の中に、韓柳年譜あり、其第一卷を柳州年譜となす。陳景雲の序に曰く「柳集久しく逸し、年譜獨り其節を存す。廣陵の馬君嶸谷、江を涉て韓譜を購ひ、後未た久しからずして、復た宋槧の柳集殘帙を收む、其中の年譜完好、諸本無き所たり、因て韓譜と同じく梓す」と。而して後序は、即ち文安禮の筆せし者なり。是に於てか知る、拙堂の云々せしは、斷して此書なるべきを。而して之を拙堂の撰製に比するに、全く相似て、特に軒睡を加ふべき者なし。今この兩譜を并せ簡明を主として、繁を除き要を存し、之を卷首に掲げ、以て讀者の披覽に便すとす。(一)

目次

第一	宗元と時勢	一頁
第二	宗元の少時	十二頁
第三	宗元の仕進	三十二頁
第四	二王の敗と八司馬の貶謫	四十二頁
第五	永州の司馬	七十頁
第六	京師の例召と劉禹錫との關係	九十七頁
第七	柳州の刺史	百九頁
第八	宗元の本領	百廿四頁
第九	宗元の文	百卅七頁
第十	宗元の詩	百五十一頁



柳宗元 東西文豪評傳 第一編

久保 天 隨 著

第一 宗元と時勢

柳 宗 元

文は八代の衰を経たる後韓柳に至りて始めて古に復するを得たり中山の劉夢得禹錫かつて柳文に倣して曰く文章時と高上す三代の文戰國に至りて病めり秦漢を歴て復た起る漢の文列國に至りて病めり唐興て復た起る夫れ政疣して上裂け三光五嶽の氣分れ大音完からず故に必ず後に大に振ふ初め貞元中上方に文章に嚮ひ昭回の光下萬物を飾る天下の文士争ふて長ずる所を執り時と與に奮ふ粲然として繁星天に麗り芒寒く色正じきか如し人望て敬するもの五行のみ河東の柳子厚は斯れ人望て敬するもの歟是れ登に我が柳宗元を稱揚して九鼎大呂の重きを爲さしむる者に非ずや蓋し是より先時は李杜の二人に由りて建安以來綺麗珍とするに足らざる陋風を一洗したりき而して支那固有の思想を以てするまで

もなく、詩は寧ろ粧飾的の者にして、文は常に實用的の者あり、然るを有唐の時代に於て却て先づ詩の進境を見しもの頗る怪しむべきに似たりと雖も、六朝以來漸を以て發達し來りし美術的好尚の一時に煥發せしところ、便ち然りといはれ足らひのみ、若し尙ほ之を疑ふ者あらば宜しく去て傍證を繪畫音樂の發達に求むべきなり、詩は實にかくの如し、文章の之と伴はざりしもの、其弊更に甚しく待つ所甚た大なりしか爲ならずといはむや。

且つ夫れ唐は實に支那文學の絶頂時代なり、但し、然かくいふを得る者は、李杜の外更に韓柳ありしに由らず、いはならず、是に於てか余は今姑らく柳に就て觀る所あらむとするなり、而して韓と柳と詩文粗は兼達すと雖も、その不朽なるものは文あるか爲にして、詩に於ては未だ必ずしも第一流を庶幾すべきにあらず、是は特に柳に於て然る者にして、余は、そのこまでも、文章家として標榜すべき者たるを信す、されは余は本篇に入るに先ち、唐朝以前に於ける文章の變遷に就いて概觀する所なく、むはあらざるなり。

東漢以後、文章の衰は、全く之を四六文の盛行に歸すべし、四六文とは何ぞ、其語を四六にし、其辭を偶儷にし、其聲を諧協するもの、乃ち一に駢體と稱するもの、是なり。

夫れ、四六駢儷の文たるや、之を修辭上より見れば、固より捨つべきに非ず、問ま之を用ふれば、春川溶溶として、數片の落紅を浮べたるか如く、優に風神を具へて、情致楚楚、文に於て頗る章を爲し、其妙殆んと言ふべからず、こゝに支那人が早く修辭上に多少の觀念を有せしは、固より否定すべからざる事實にして、四六文の由て來るところ、亦た頗る遠しといふべきのみ。

陳繹曾は文章歐冶の中に記して曰く、四六の興る、その來るや尙し、典謨誓命より已に潤色を加へ、以て宣讀に便す、讀者をして聲牙の患なく、聽者をして信屈の疑なからしむるのみと、言簡なかと雖も、四六が必然的に一種の美辭たるべき旨を、道ひ盡し、以て加ふる、莫きが如し、劉勰は文心雕龍に於て説をなして曰く、造化の形を賦するや、支體必ず雙神理用をなし、事孤立せず、夫れ心は文辭を生し、百慮を運裁し、高下相須る、自然に對をなすと、是れ四六を以て、人性自然の發出となすものなり、四六の價值實に此の如し、然れども思へ、濃粧は却て醜となり易く、多寶は毫も珍とするに足らざるを、故に四六も一步を踏過して、濫用過巧に近づくに至れば、文氣をして淫柔、軟弱に流れしむること、言を俟たず、古文に之を用ひて、絶えて其弊を見ざるは、その頗る自然に出て、矩を踰はざるが故のみ。

四六の古文に見ゆるもの、其例一にして足らず、昔者堯舜に告げて曰く、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終、と、老子に曰く、玄牝之門、是謂之天地之根、綿綿若存、用之不勤、と、易の文言に曰く、或躍在淵、乾道乃革、飛龍在天、乃位乎天德、亢龍有悔、與時偕極、乾元用九、乃見天則、と、文に約を押す、是れ其聲を諧協する第一手段に過ぎざるのみ、昔の洪範に曰く、無偏無陂、遵王之義、無有作好、遵王之道、無有作惡、遵王之路、無偏無黨、王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平、無反無側、王道正直、會其有極、歸其有極、と、老子に曰く、天無以清、將恐裂、地無以寧、將恐發、神無以靈、將恐歇、谷無以盈、將恐竭、と、是れ辭を偶儷にし、兼ねて聲を諧協したる者、而して易の文言、元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也、君子體仁足以長人、嘉會足以合禮、利物足以和義、貞固足以幹事、といふ如きに至りては、約を押さずして其聲自ら諧協、巧を加へずして其辭自ら偶儷、文言の名、蓋し其實を得たりと謂ふに足れり。

三代の時、民風簡朴、質文に勝る、しかも、その辭章を爲るや、既に幾分の工夫を着く、是に於てか、余輩は劉勰の説の、必ずしも言を河漢にする者に非ざるを知了しぬ、猶ほ他に、韋陶、漢、洪範の如き、皆然らざるなく、その然る所以、一は實際的、必要に出で、記誦に便せむ、か爲にせむ、ありしが、上述の言は、到底之を否定するを得ず、而して一

たひ、春秋戰國の際、三代の遺藎、一時に爆發せし時代に入りては、文と想と共に一段の進境を見るに至りぬ、その言を立て、道を傳へ、自己の見解を、容易に、一般に普及せむとするもの、文を草する心を、以て、筆墨を弄し、辭を出すの心を、以て、口舌を試む、微言婉辭の續出したる、秋毫も怪しむに足らざるなり、文言、老子、左氏、孟子、列子、莊子、以下、周末百家の文、皆然らざるは、なく、未だ駢四儷六の確然たる形式を樹立するに至らずと雖も、工緻の觀染を加へて、文を彩らむと欲せし痕迹は、掩蔽すべからず、荀子の文の方にして雅なる如き、便ちその一例たるを得む、加之戰國策士の辯を弄するや、又然るものあり、蘇秦、肥義の言を筆記したる戰國策中の文の如き、明に之を證す、但し、その緊切精工を、務めながらも、淫靡纖柔の僻路に入らざりし、所推して、妙となすべく、或は全く四六の文調を爲して、猶ほ且つ然るものさへあるなり。

氣力の邁往と、規度の宏壯とを以て、特色となせる、子史の文にして、隱約の中、四六の搖動を見るや、實に此の如し、而して更にこの趨向を明示するものは、詩經と楚辭とにあり、兩者元と韻文なれば、修辭の工夫細緻なるものある固より宜なり、詩は大序に所謂、情中に動いて言に形はるゝもの、人を以てすれば、無智の婦幼、漁樵に過ぎず、時を以てすれば、文武以還、孔子の前にあり、而して既に對偶の美辭、指摘すべき者、頗

々相繼ぐにあらすや楚辭は屈宋以下の辭賦を蒐め人は南方の優秀を以てし時は北詩に後れたるもの辭章の巧賦に文人の祖たるに足れり二書に就いて其例を擧げむとするも煩に堪へざれば敢てせず讀者は唯だ先秦時代偶儷の工を無す歳を逐ふて愈よ進みたるを記清すれば足らむ。

さなきだに四六は人性自然の發出にして文章の粧飾に供せられしものを時は漢代に入り辭賦が貴族的文學として標置されしに方りては愈よ文章を犯し來り爰に文章は明に辭賦化し去られたり李斯の文は秦時に在りて既に暗流の源頭に立つものにして逐客を諫むる書の如き大に厥辭を放て盛に華辭を綴綴し仍て古人の風漸く衰ふと稱せらる。下て賈誼相如枚乘鄒陽揚雄等漢代の文人輩唯だ一人の史遷を除いて文盡く辭賦の趣致を存せり賈誼の過秦論枚乘の七發より以下鄒陽の獄中の書枚乘の吳王を諫むる書王褒の聖主賢臣を得る頌の如きに至りては到る處故事を疊み來り駸駸として偶句漸く多からむとするのみならず更に進で四六對偶の奕奕たるを覺ゆるものあり然れども一般にいふときは西漢の文たるや氣格猶は古に近きものあり眼識ある士の鑑識する所常に其然るをいへり東漢以降は固よりいふに足らず班固は命世の文豪時に史遷の墨を摩する者なきに非ず

と雖もその作る所燕然山を封する銘の如き短幅の中四六對偶の指摘すべきもの一にして止まず正にその漸を啓くもの遂に人意を滿すに足らざるなり。

班孟堅の後文章なし蔡邕は曠世の逸才と稱せられ其文華麗然れども強いて儷句を用ひたる跡は徒に醜となすべし是より後魏の陳思王曹植の如き専ら偶儷の文を作り却て拙劣を免れざるものあり而かも推して當代第一の文人と稱せらる他は知るべきのみ。

寶鼎南に遷りて後文氣の陵夷日に甚しく晋に入りて陸機潘岳の豐饒て之を摸擬彷彿せしより天下浮華して止まず四六の濁流は遂に六朝三百年を一貫して長く大江の南北に溢れし餘勢遠く唐宋の汀岸を盪するに至りぬ顧ふに西漢以上間ま四六あるものは自然の文調に出で秦漢の四六は尙ほ僅に華詞を拈出するに過ぎず文の體裁に因て然り其強いて奇巧を凝らし遍ねく諸般の文體に及はしたるは全く魏晋以降にあり今夫れ萬綠叢中の紅一點點綴の妙人を惱すは其多きを須ゆべからず然れども紫の朱を奪ふに至りては固より惡むべきのみ蓋し江左偏安の後淫靡浮華の風俗は自から延いてこの艶儷佻冶の文體を生じ出でたるなり。

之を要するに四六は辭賦と文章との化學的抱合に成りたる者にして一種の律語

柳

なり少くとも美文の一體なり。余は必ずしも之を却くるを欲せず、嘗に之を却けるのみならず、支那に於て初めて見るを得べき整雅秀美の體形たるを否定せず、余輩が六朝文章の衰をいふは、この律語の濫用をいふのみ。四六文は可なり、唯だ夫れ外形の内容に協はずるもの、その醜いふべからず、花ありて實なきもの、牡丹の一事を成さずして、只だ空枝たる如き、固より取るに足らず。四六文を以て美文の題目ならざる者、叙記議論にまで適用せむとするは、愚見に非ずして、何ぞ而してこれに自在なる散文の一體が常に之を揮毫すべき餘地を存するに於ておや。

宗

四六瀟漫の間にありて、簡略に入らず、濫靡に失せず、優に西漢以上の氣格を存する者、二三其人なきに非ず。諸葛亮、陳壽、杜預、陶淵明の如き、文質に勝る間に在りて、亭然として、文質彬々の妙を具へ、宛として、時粧群中、古衣冠の人を見るの趣あり。古文一縷の命脈は、断えむと欲して、未だ断えず。陳の末、姚察、達、學洽、聞の稱あり、その命を受けて、梁史を撰するや、専ら散文、單行を用ひ、勁氣、鋭筆、曲折、明暢の趣を盡し、断然四六を却けて、六朝、魏、元の陋習を一掃したる、而して明に四六の非を鳴らしたる者、宇文泰及び其臣蘇綽となす。

元

周主宇文泰、性朴素、を好み、虚飾を尙はず、恒に風俗に反し、古に復するを以て志とな

宗

せり。その丞相たりしとき、干戈騒擾の中にありて、獨り善く儒術を尊崇したりしが、位に即くに及で、時文の綺麗浮華を患ひ、その弊を改革せむと欲し、蘇綽をして書の大誥に倣ふて、詔勅を作らしめ、畢く群臣を會し、文筆皆此に依るべきを命じたり。其文、太だ森嚴、其語亦た一々時弊に中る。四六はこの時、明に一頓の衝撞を受けぬ。隋の時、李錡といふ者あり、かつて上書して諫奏す、其中に曰く、魏の三祖、更に文辭を尙ひ、君臣の道を忽にし、彫蟲の小藝を好む。下の上に從ふや、同影響あり。競うて文章を購せ、遂に風俗を成し、江左齊梁、事弊彌甚しく、貴賤賢愚、唯だ吟詠を努め、遂に復た理を

元

遺し、異を存し、虚を尋ね、微を逐ふ、一韵此奇を競ひ、一字の巧を争ひ、連篇累牘、月露の形出でず、積案盈箱、唯が是れ風雲の狀、世俗此を以て相高くす。その自家未だ四文を脱出せざるところ、當時文章の大勢を推知すべく、又一方に於て四六が多少有識の士、厭忌せらるゝに至らむとする傾向を見るに足るべし。

時

さはいへ、一般世間の好尙は居然として、この醜體の文詞を棄つるに及はざりき。唐代創業の英主太宗が、自ら筆を下して、晋書陸機の論贊を草したる如き、乃ち以て徵すべく、王楊盧駱より以下、蘇廻、張九齡、陸贄に至るまで、一代の雋才、若くは稀世の名相たるもの、その爲るところ尙は大抵四六駢儷の文のみ。文壇は頗りに輕佻の徒の

勢

跳梁に仕せて、竊かに命世の英傑の輩出するを待てりき。

十

是に於てか、韓柳は出でぬ、然れども、二人亦た文王を待たずして、起りしものに非ず。この大勢を作る爲に、業已に多少の多驕者ありしことを忘るべからず、今之を細観するに、唐代の文章、韓柳の前凡る三變せり。その最も初に出で、陳隋以來、陳隋の陋習を脱したるもの、陳子昂あり、始めて風雅を以て浮侈を革め、自ら古の作者を追ふと稱す。子昂は則天武后の時の人、韓柳二氏、又之を知る。故に退之が薦士時には、國朝盛文章、子昂始高踏といひ、孟東野を送る序にも、首に子昂を以て鳴るものとなせり。子厚も亦た揚評事文集後序に記して、唐興て以來、この選を稱して、恚らざる者、梓潼の陳拾遺ありと稱せり。而して陳振孫が子昂首として、八代の衰を起せりといひ、宋祁が唐の興るや文章、徐庾の餘風を受け、天下祖尙す、子昂始て雅正に變すといへるあり。是れ唐初文體の一變と爲すを得ざらむや、之に繼くものは、張說、玄宗の初年に、出づ、其文未だ全く超出せずと雖も、宏茂を以て波瀾を廣むと稱せらる。是れその第二變なり。天寶以還は、元結尤も毅然として、排偶綺縟の習を變せり。晁公武謂へらく、其文古鐘磬の如く、俗耳に諧はずと、高似孫又曰く、その文章奇古にして、踏襲せずと、又獨孤及あり、趙翼の勝れる處、先秦西漢の風ありと稱す。なほ他に蕭穎士、李華、梁

柳

宗

元

宗 元 時 勢

蕭等あり、是れ第三變なり。蓋し武德貞觀より以來、すでにこの三變を経て、文章始めて古に近く、自然の風氣は、遂に韓柳二人を胚胎するに至れり。

古文の復興は、かくの如くして、前に已に陳元獨孤の數輩あり、彫を斲て、璞となすの功、固より争ふべからず、而して之に繼くもの、世獨り韓愈を擧ぐるは、何の故ら、退之才と氣と、共に豪雋壯麗、向ふ所前なしと雖も、獨力空拳、施す所なからむのみ、之と時を同うして、摧陷廓清の大功を擔ふべきもの、柳子厚の在るあり。韓と柳とは、工力固より相若き、一時の瑜亮、而かも、壘、旂、相和す、二人の生前に於て、深く相知り、且つ厚く相許したりき。二子の力を合せて、一意に浮巧を却けし、かは、文壇の大勢は、茲に初めて、その根抵より動き來り、東漢以降、八百年の潮流は、正にその方向を轉換せむとするに至りぬ。嗟乎、何者の狂癡子、敢て柳を以て韓に如かすといふ。

蓋し莫古文の復興は、一大事業なり、區々數人の手によりて完成され得べきにあらざ、之を以て、韓柳二氏に遂けられなれ、なれ、思惟するは、猶ほ大早計といふべきのみ。五代殘唐を経て、宋に入り、迷夢未だ醒めやらす、滔々たる駢儷の文尙は、世の尊重を博するを得て、揚億、劉筠、王禹稱、徐鉉、范仲淹、皆然らざるは、なく、其間柳開、穆清、尹師魯、蘇子美の古文を唱道するありしのみ、歐陽公一たび起り、場屋古文を取るに及で、蘇氏三

十一

家曾南豐王安石の出づるあり、轡を列ね、鶴を並べて、其勢天下を風靡し、古文は一千
 年を経て、始めて真正の復興を見たりき、然らば、韓柳二氏は、改革の中堅にして、猶ほ
 後世を待つことありしは、争ふべからず、而かも支那文學史上に於て、特殊有数の位
 置を占め得るに至りては、固より論なかるべきなり、是に於てか、余は敢て謂ふ、韓柳
 二氏は時勢の爲に出でしと雖も、更に改革を大にし、舊潮を一轉せしめしは、端的又
 自ら時勢を作りし者なりと。

こゝに柳子厚が一生は知命に及ばず、才の敏と情の深とを以て、當代に容れられず、
 風風被に在り、雞雉翔舞し、轆轤沈淪の中に、短夢を断送したるは、實に千秋の恨事、余
 うの文を讀む毎に、未だ嘗て卷を掩ふて長太息せざるは、あらざるなり、余はその傳
 記を以て多趣なりもどて、筆を執りしには、非ず、唯だ不世出の俊才か、生前に薄倖に
 して、死後尙は不幸の嘆あるを、憐み、百代の後にありて、一腔の同情を寄せ來り、九原
 若し作すべく、むば、幸に我衷を諒し、聊か安んずる所あらじ、めむと欲して、乃ち然る
 のみ。

第二 宗元の少時

柳 宗 元

有唐の天下は、太宗貞觀の美政に依て、その基礎を固くしたりしが、次いで、哲婦傾城、
 叱鷄司晨の禍を絶えず、前に則天武氏あり、後に太平公主あり、玄宗に至りて、能く之
 を匡救し、開元天寶の間は、再び太平の榮華を極むるを得たりき、然れども、玄宗の人
 となり、天資絶倫の英主に非ざりければ、後年に及んては、輔弼その人を得ず、上下奢
 靡を恣にして、復た天下治亂の何者たるを解せず、是に於てか、内に揚國忠の驕淫あ
 り、外に安祿山の專横あり、二人相容れざるの極は、端なくも大亂を醸すに、至り、漁陽
 の鼓、一たび地を動かして來るとき、潼關の戰、骨山よりも高く、天子都を出て、翠華
 搖々西南に幸し、玉環の妖血人の掃ふべき馬塊の慘禍を見るに、いたりぬ、すでにし
 て、天子蜀に入り、太子位に靈武に即き、明年軍を鳳翔に移し、その年兩京を復するを
 得て、上皇亦た京師に還るに至りき。

然れども、當時亂賊全く滅び盡したりといふに非ず、安祿山はすでに至徳二載を以
 て、その子慶緒の殺すところなりしが、餘黨の凶熾、未だ衰えざる者あり、乾元元年、郭
 子儀以下の九節度兵を合せて之を討ちしも、猶ほ下らず、その明年、賊將史思明、兵を
 引いて慶緒を救ふに方りてや、さしもの九節度の兵も、一旦鄴に潰えて、復た振はず、
 而して思明は却て慶緒を殺し、范陽に還りて、僭號し、仍は大燕皇帝と稱したりき、李

宗 元 の 少 時

柳

光弼の郭子儀に代りて朔方節度使兵馬元帥となるや、號令嚴整、一たひ施せば士卒堅固、旗幟精明、皆變すと稱せられ、史思明と戦て屢之を敗るを得たり。上元二年、思明はその子朝義の殺すところとなり、後二代宗の位に即くに及び、内は奸臣李輔國を誅し、大に紀綱を正うせむを計り、外は大に兵を黜し、雍王适を以て天下兵馬元帥となし、諸將及回統の援兵を率ひ、史朝義を討し、大に之を敗り、賊將李懷仙朝義を斬て以て降るに及び、所謂安史の亂も、一先その局を結ぶを得たりき。

宗

撥亂反正の大業、全く既に成りしと雖も、唐の社稷が再び牢固となる能はざりし者他の故なし、この亂の間に於て依然たるもの朝廷の不振あればなり、是れ宰相の專權と宦官の驕横とを指す者にして、英主の出て、之を救ふなき間は、如何ともする能はず、又この亂に次いて起りたる者は、藩鎮の禍と外寇の恐怖となりき、蓋し皆唐朝の實力なきを看破したるか爲に出でたるものにして、その由て來るところ頗る尙しく又頗る深きものあり、容易に之を救ふ能はず、肅代以後、唐の社稷の存在は、猶ほ朽木の儘に立つ如く、腐魚の外、貌じばらく鮮なる如きのみ。

元

代宗の廣徳元年閏正月、史朝義の降將薛嵩を以て相衛邢沼貝磁六州の節度使となし、田承嗣を以て魏博德滑瀛五州の都防禦使となし、李懷仙は故地に仍て幽州盧龍

宗 元 の 少 時

の節度使となり、又た張志忠を以て成徳軍に鎮せしめ、姓名を賜ふて李實臣といひき。時に河北の諸州皆已に降る、嵩等僕固懷恩を迎へて、馬首に拜し、軍を行き自ら效さむを乞ふ、懷恩亦た賊平いて寵褒へむことを恐れ、故に奏して嵩等を留め、河北を分帥せしめ、自ら黨援をなす。朝廷亦た兵革を厭苦し、苟くも無事を冀ひければ、因て以て之に授けぬ。河朔の敢て朝命に抗する、實に濫觴を此に開けり。同年吐蕃の入寇あり、代宗陝州に走り、胡騎奔騰、長安に入る、幸にして關内の副元帥郭子儀の力能く之を撃て走らしめたるに因り、車駕僅に京に還るを得たりき。次いで僕固懷恩又叛をなし、永泰元年に及び、回統吐蕃を誘ふて入寇す。乃ち郭子儀を召して、涇陽に屯せしめしが、懷恩道に死し、二虜長を争ふて睦からず。子儀人をして回統に説かしめ、共に吐蕃を撃ち、大に之を敗り、翻て一時の偷安をなすを得たりき。外部の紛亂かくの如くして、内部の腐敗は更に甚しきものあり、代宗即位の初め、李輔國を誅し、その翌年宦者程元振を流したりしが、大曆五年三月に於て、又宦者魚朝恩を誅したり、これ恰も杜甫が舟行荆楚を下り、竟に旅寓に卒せし歳に當る。後三年を經て、大曆八年に至り、わが將に傳せむとする、薄伴の文士は、その呱呱の聲を擧げて、初めて世に出でたるなりき。

柳

柳宗元字は子厚、自ら河東の解人と稱す、然れども是れ其生の由て出づる所を指す者にして、猶ほ韓氏か昌黎を稱し、崔氏か博陵を稱し、李氏か隴西を稱し、黃皇を稱する類のみ、子厚の生れしは却て長安に在りしこと疑なきか如し、之を子厚か、賈山人の南遊を送る序に徵するに、吾京師に長する三十三年とあり、而して子厚か永州の貶謫、正にその三十三歳に當るに由て見れば、其前はすべて京師に在りしなるべく、生の其處にありしや、實に争ふべからずと爲す、又その、獨孤申叔か親に侍し河東に往くを送る序を見るに、曰く、河東は吾土なり、家世遷徙して能く緒に就くなし、聞く其間に大河條山あり、氣關左を蓋ふと、文士往々臨望して、坐ながら勝概を得たり、吾固より翹翹として雲を凌げ、奮都を奮懐する、日に以て甚しと、之に由て此を視れば、嘗に河東に生れざりしのみならず、又未だ嘗て其地を踏まざりしを知るに足るべし、猶ほ子厚か作に係る故弘農令柳府君墳前石表辭を按するに、曰く、少陵原は柳氏の大墓なり、唐の貞元十九年、某月日、孤某その先府君及び夫人の喪を奉して、その位に附す新墓に由て南若干歩なるを、高祖王父蘭州府君諱は某字は某の墓といふと、こは其族某の爲に撰びたる者にして、その蘭州府君といふ者は、實に子厚か五世の祖柳楷のことを指し、なり、按するに、少陵原は唐の萬年縣に在り、詩聖杜甫が嘗て

宗元

取て其號となせし地にして、長安の西南四十里といふ、蓋し宣帝の陵は杜陵にあり、許后は杜陵の南園に葬る、即ち今の所謂少陵にして、相去ること五里といふ、先塋大を以て盡く其地に在り、柳氏が長安に家せし已に久しきに亘れるを知るべし、

宗元の少時

柳氏は名族なり、子厚又しばし其門地の尊貴を記せり、曰く、柳氏は皇帝后稷より周魯に降る、字を以て族に命し、地に因て氏を受く、載せて左氏内外傳及び太史公の書にありと、又曰く、柳氏の先は黃帝より周魯を経たり、その著はれたるもの無駭あり、字を以て展氏となす、禽に至り、采を食むを以て柳姓となせり、と、今按するに、魯の孝公の子、字は子展、諡して夷伯といふ、子展の孫無駭、王父の字を以て、氏となす、無駭禽を生む、禽は季魯の士師となり、邑を柳下に食み、諡して恵といふ、即ち世に謂ふところ、柳下恵是なり、その子孫遂に柳を以て姓となす、魯の滅するや、柳氏楚に入り、楚の亡ぶるや、乃ち晋の解縣に遷る、地は秦の河東郡を置きし所、故に世世河東の解人たり、

漢魏の間、柳氏特に聞ゆる者あらず、景猷といふもの、晋の侍中たり、二子あり、長を耆といひ、汝南の太守たり、少を純といひ、平陽の太守たり、耆は猶ほ河東に居る、即ち子厚の遠祖たり、耆の子恭、後に趙に仕へ、河東の太守となる、恭か曾孫緝、宋州の別駕、宋に

柳 仕へて安郡の守たり。緝か子僧習、豫州の刺史裴叔業と共に、州に據て魏に歸し、揚州の太中正となる。僧習か子慶、字は更興、拓跋魏の侍中左僕射となり、平齊公に封せらる。是れ子厚が七世祖なり。慶が四子、機、弘、且、肅といふ。且、字は匡德、周の中書侍郎となり、濟陰公に封せられしが、後、隋に仕へて黃門侍郎たり。その子措、隋のとき、濟房、蘭、廓の四州に刺史たり。措か子爽、字は子燕、唐の永徽三年三月を以て、中書令となり、大に顯はる。後、褚遂良、韓瑗と俱に罪を武后に得て、高宗の朝に死せり。爽か子は子厚、の高祖、諱は子夏、徐州の長史たり。曾祖諱は從裕、滄州清池令、祖は察躬、湖州德清令たり。子厚の父鎮、字は某、の行事は之を子厚か自ら撰べる。先侍御府君神道表に就て見るべし。鎮、學術あり、天寶の末、高第す。亂に遇ひて、後、母を奉して、河南濟陰縣の王屋山に隠れ、間行して食を求め、深處以て業を修め、避暑賦を作り、群從弟子を合せ、春秋及び易を講し、衍衍として倦むことなく、以てその愛を忘れ、後、吳に移れり。亂の平く及び、三老五更、議籍田書を作り、齋沐して以て獻せしか、用ひられず。然れども擢られて、右衛府兵曹參軍となり、郭子儀を朔方府に佐けて、左金吾衛倉曹參軍を授けられ、節度推官となり、専ら書奏を掌り、太理評事に進みぬ。後、晋州の録事參軍となりしが、その守と善からざりしを以て、轉して長安主簿と爲りぬ。已にして父の喪に居

柳 宗 元

宗 元 の 少 時

り、哀過くるありて、禮除えず、服除いて後、太常博士となる。曰く、尊老孤弱、吳に在り、願くは宣城令とならむと、三たび辭して後、徙て宣城と爲るを得たり。子厚の生まれしは、正にこの前後にありしと覺む。鎮が再び吳に赴きし後、はその母涿郡の盧氏と共に、留りて京師に在り、子厚に二姉あり、その長するや、一は崔簡に適き、一は裴瑾に適く、而してこの時、未だ笄に及ばず。一戸四口、蕭寂の狀、想見するに堪へたり。柳氏、舉世名あり、その族中、高位に上りしもの、亦た少からず。子厚の父の如き、頗る學術文章ありきといへば、子厚は確にその遺傳を得たるなり、而して子厚か後年にいたり、捉撈して文壇に馳驅し、八代の表を挽回するに於て、偉蹟ありと稱せられたる。韓愈退之は、實に太曆三年を以て生れ、この時、すでに六歳の齡に達したりき。子厚が幼時に就ては、知るべきこと多からず。その四歳の時、母と共に京城の西なる田廬の中に在り。時に父鎮、吳に赴きて、家に書冊なく、母盧氏之に古賦十四首を教え、皆之を諷傳したりと傳ふる一事あるのみ。盧氏は賢婦人なり、詩禮圖史及び翦製、繡結に至るまで、達せざるなく、之を其二女に授け、長するに及て、皆名婦となりぬといふを見れば、その愛兒を教育するに就て、決して忽にせざりしを見るに足るへし。子厚も子厚が四歳の時は、恰も太曆十二年に當り、韓愈は、其兄會が魚朝恩に次いて權を

柳

專にしたる宰相元載の爲に坐して官を貶せられたりため遠く嶺南の行に隨ひ幾も
なくして會の卒するに及びその嫂の爲に鞠養せられたり唐代の二大文豪の幼
時はかくの如くして略は相似たりといふべく均しく欠乏艱苦の中に、かよはき婦
人の手に長育せられしなき、而して當時長安屢兵亂に苦しみに、拘はらず柳
氏の母子が孤寂の中に終に流離飢餓の患に溺することなかりしは、亦た幸といふ
べきのみ。

宗

是より先代宗御宇の末に於ては藩鎮の禍漸く來らむとする者の如く、太曆三年幽
州の將朱希彩節度使李懷仙を殺し、因て鎮を領せしことあり、その七年朱滔なるも
の希彩を殺して取て代りしが、十四年淮西將軍李希烈、又節度使を逐ふて之を領せ
り、かくの如くして朝威愈も行はれず、德宗の位に即くに及ては、常袞欺罔を以て貶
せられ、崔祐甫、同平章事となりぬ、祐甫の時望を收めむとするや、未だ二百日ならず
して官を除する者八百人に至る。上曰く、人卿か用ふるところ多く親故に涉るを諍
る、何の故るやと對へて曰く、臣陛下の爲に人を擇ふ、敢て慎ますは、あらず、親に非
ず、故に非ざるものは、何を以てその才行を請して之を用むと、時に淄青の李正己、上
の威名を畏れ、表して錢三十萬緡を獻せり、崔祐甫請ふて使を遣り、淄青の將士を慰

元

宗 元 の 少 時

勞せしめ、因て以て之に賜ひ、正己漸服す、天下以爲へらく、太平庶幾くは望むべしと、
賊に德宗は、その初に於て勵精治を求め、不次に人を用ふることさへに爲したり、然
れども、その盧杞を悦びて任用するにいたりては、又言ふに足るものあらず、建中二
年、楊炎盧杞同平章事たり、未だ幾ならずして、炎罷め、杞獨り任す、杞、藍面鬼色頗る口
辨あり、奸邪の性、天下服せず、その翌年、汾陽王郭子儀の卒するや、唐は正に軍國の重
鎮を失ひたり、之に次て平盧の李正己卒し、子納自ら鎮を領するあり、諸鎮いよく、
朝命を受けず、朱滔、田悅、王武俊、李納等、先後皆反し、三年、四人自ら王と稱し、同年、又李
希烈の反あり、
建中四年、李希烈襄城に寇す、詔して涇原等の道兵を發して、之を救はしむ、涇原の節
度使姚令言、兵に將として京師を過く、師を犒ふに、惟た糲食菜餼あるのみ、衆怒て亂
をなし、城に入り、上出奔す、亂兵乃ち太尉朱泚を奉して主とばなしたり、時に司農卿
段秀實、泚を誅せむと謀りしも、克たず、泚が衆を召して、帝と稱せむとを議するや、秀
實其面に唾し、大に罵り、笏を以て泚の額を撃ち、血地に濺く、泚之を殺し、遂に太秦皇
帝と僭號したりき、是より先、術士桑道茂といふ者あり、奏していふ、數年の後、宮を離
るゝ厄あらむ奉天に天子の氣あり、宜しく、その城を高大にし、以て非常に備ふべし。

柳 宗 元

と。上之に従ひしが是に於て遂に奉天に奔りぬ。朱泚奉天を攻圍すること經月。城中資糧俱に盡く。帝健歩を遣り、城を出て、賊を覗はするに、其人懇ろに苦寒を以て辭となし、跪き奏して、一襦袴を乞ふ。帝之か爲に尋求すれども、獲す。竟に惘然として、之を遣りぬ。時に供御、糲米二斛あるのみ。賊の休息する毎に、夜、人を城外に縋し、蕪菁根を采て、之を進めぬ。帝卿相將吏を召し、謂て曰く、朕不徳を以て、自ら危厄に陥る、固より其れ宜なり。公輩罪無し、宜しく早く降り、以て室家を救ふべし。群臣頓首して、涕を流し、死力を盡さむことを期し、將士困急すと雖も、銳氣未だ衰へず。既にして、李晟兵を率ひて、來り、援け、軍城、泚を撃て、之を敗り、さしもの奉天の圍漸くにして、解けはてぬ。李懷光又難に赴き、泚の兵を敗り、奉天に至りて、帝に謁し、入て、盧杞の惡を白せむとせしむ。杞之を隔て、入て見るを得せしめず。乃ち表を上り、杞の惡を暴す。衆論亦た喧騰、連りに杞を咎む。是に於て、か上、已むを得ずして、杞を貶し、新州の司馬たらしめぬ。

興元元年、大赦す。陸贄上に勸め、已を罪し、以て天下に謝せしむ。奉天より下すところの書、詔驕將悍卒も之を聞て、感激涕を揮はさるはなく、王武俊、田悅、李納以上表して、罪を謝し、皆王號を去りぬ。然れども、朱泚未だ滅ひず。藩鎮の向背未だ定まらざるも。

宗 元 の 少 時

のあり。果然、李希烈は大楚皇帝を僭號し、李懷光亦た叛し、魏博の田緒は田悅を殺して自ら軍府を領し、上復た梁州に奔るの止むを得ざるに至れり。已にして李晟長安を克復し、朱泚走り、其將之を斬て、以て降りぬ。晟、露布行在に至らしめて曰く、臣、已に宮禁を肅清し、寢園に祇謁す、鐘簾移らす、廟貌故の如し。と、上之を覽て、泣て曰く、天、李晟を生じ、以て社稷の爲にす。朕の爲にするに非ざるなり。と。是に於て、稜氣漸く銷え、天日再び明にして、車駕乃ち長安に還幸するを得たりき。

この二亂の間に於て、子厚か父鎮は常に外にあり。宣城令より轉して、閔鄉令となり、政績皆最たる故を以て、京に召されて、殿中侍御史に遷りぬ。後、一たひは鄂岳沔縣團練判官となりしが、又召されて京に在りき。蓋し、この歲月の如き、今改めて推考するに、由なしと雖も、恰も車駕入京の時にもあるべく、子厚か十一二歳の頃ならむと思惟せらる。天涯萬里、父子別居せしこと、既に年あり。將來の文豪は、こゝに初めて慈父の膝下に於て、教を受くるを得るに至りき。而して、子厚は専ら家塾に學て、遂に大學の門に入りしことなかりき。

方を刈りて園となす、常度未だ替らず。鎮の剛直なるや、當時猜疑の日にありて、大に世に容れられず。幾もなくして、宰相竇參の中づる所となり、夔州の司馬に貶せられ

柳 宗 元

さうのこゝにいたりし所以瑣少の事柄に過ぎざりしとはいへ二人は固より氷炭相容れず、蕭牆器を同うするを得ず、况んや彼れ天子の宰相人を生かすべく、人を殺すべき權勢と位地と兼ね有するに於ておや、鎮の貶謫固より宜なり、子厚之を記して曰く、會ま宰相憲府と比周し、正士を誣陷し、以て私譽を校す、登聞鼓を擧て、上に聞するものあり、上先君に命し、三司を総へて、以て聽理せしむ、至れば之を平反す、相たるもの敢て威を恃て、以て欲を濟せず、長たるもの敢て私懷を以て、間を請はず、群宥宥を獲て、邪黨目を側て、封章密に獻じ、命を天子に歸し、遂に敢て言ふなく、年を逾へて、卒に中つるに、他事を以てして、貶せられぬと、今うの事實の真相を尋釋するに、貞元四年、陝觀察使盧岳の卒するや、岳の妻、賞を分て、妾子に及ばず、妾之を訴ふ、御史中丞盧佖、妾か罪を重くせむとす、侍御史穆贄聽かず、佖、贄參と共に、贄か金を受くるを誣ひ、捕へて獄に送る、弟贄、冤狀を上る、鎮時に殿中侍御史たり、詔して、鎮と刑部員外郎李觀、大理卿楊瑒とを擧けて、三司となし、覆治するに之なし、然れども、遂に贄を出して、郴州の刺史となしぬ、贄參これより、鎮を衞み、後一年ならずして、かくは遠裔の地に貶せられたるなりき。

鎮の襲州に之くや、子厚復た隨はず、時は貞元五年にして、子厚正に十七歳の齡に達

宗 元 の 少 時

せり、是より先、子厚は、すでに童子を以て世に奇名あり、この歲始めて進士を求めたり、然らば、その父の遠行に伴はざりし者、その故自ら知るべく、父は、はし。ば。し。盛。り。て。子。は。將。に。光。ら。む。と。せ。り。

居ること三年、貞元八年四月にいたり、宰相贄參、罪を得て却けられ、鎮は召し還され、復た侍御史を拜しぬ、うの制書にいふ、正を守るを心となし、惡を疾て懼れずと、鎮之を捧け、涕を流して曰く、吾唯だ一子あるのみ、愛甚し、謫居するや、藍田に至り、訣るゝに、臨て曰く、吾か目に涕なし、今にして衣の濡ふことを知らざるなり、抑も我に當るあるおやと、仍て、喜露の歌を作り、さといふ。

その翌、貞元九年、子厚年二十一、初めて進士の第を得たり、德宗有司に問ふて曰く、朝士の子たるを以て、冒進することなきを得、ひやと、有司以て、聞ゆ、上曰く、是故に奸臣贄參に抗するものか、吾うの子の爲に、舉を求めざりしを知る、と、かくの如くして、子厚の父は、其子の前途、春海の如きものあるをこの世の見、收めとして、同年五月十七日、親仁里の第に終へぬ、享年五十七、子厚の悲嘆、知るべきなり。

子厚に先君歸附誌あり、又先君石表陰先友記あり、前者の情と文と、共に切なるは、固より、觀るべく、後者の奇創亦た、以て稱するに足る者なきに、非ず、劉辰翁曰く、この記

柳 宗 元

は、遁ち孔子七十弟子傳體を用ひたるなりと、蘇東坡曰く、子厚、その先友六十七人を、その墓碑の陰に記す、之を傳に致ふるに、卓然として名を知らるるもの、蓋し二十人、是に於てか、韓愈、か、鎮を稱して、與に游ふところ、は、皆當世の名人といひ、い、い、この、眞なるを知り、すべし、且つや、子厚は幼年より父と別居し、その教を受けしは、成童の後、數年に過ぎざるを見れば、子厚、然かく文學經術に於て、素地あるを致せしもの、の、先友に負ふところなしといふを得ず、子厚の才、名、早く世に彰はれし所以の、の、少にして、精敏、通達せざるなく、其父に、速へるとき、少年と雖も、能く進士の第を取、り、嶄然として、頭角を見せしに、由り、鸞鳳の卵を出つる、其聲す、で、に、他、に、異、に、して、珠玉の、璞に、在るとき、早く、光氣の、天に、騰る、ある如き者、本來の、美質、乃ち、然り、き、と、は、いへ、その、柳氏、子あり、といひ、て、推重、奨勵を、加へし者、又た、何、予、是、等、知名の、士に、非、さ、り、き、といふ、を得、む、や、然らば、この一記は、多少感謝の意に出てし者なるべく、余か、次に引抄するもの、亦た、全く無益の業に非ざるべし。

先君石表陰先友記

袁。高。河南人、以給事中敢諫爭、貞直忠蹇、舉無與比、能使所居官大、再贈至禮部尙書、美。公。輔。爲內學士、以奇策取相位、好諫諍、免後、以罪貶爲復州刺史、

宗 元 の 少 時

齊。映。南陽人、爲相、以文敏顯用、
 嚴。郢。河南人、剛厲好殺、號忠能、爲京兆河南尹、御史大夫、善舉職、爲邪險擄扇、以貶死、
 元。全。柔。河南人、氣象甚偉、好以德報怨、恢然者也、爲大官、有土地、入爲太子賓客、
 杜。黃。裳。京兆人、弘大人也、善言體要爲相、有禮仍不佞、以謀克蜀、加司空、出爲河中節度、
 劉。公。濟。河間人、寬厚碩大、與物無忤、爲渭北節度、入爲工部尙書卒、
 楊。氏。兄弟者、弘農人、皆孝友、有文章、憑由江南西道、入爲散騎常侍、擬以兵部郎中卒、
 以大理評事卒、最善文、
 穆。氏。兄弟者、河南人、皆強毅仁孝、贊爲御史中丞、捍倭倖得貶、後至宣池、歛處置使卒、
 爲尙書郎、以侍御使內供奉卒、最善文、
 皇。甫。政。河南人、有威儀、由浙東廉使、爲太子賓客、
 裴。樞。同郡人、爲御史、天子以隱罪誅吏、樞頓首願白其狀、以故、後爲尙書郎、
 李。舟。隴西人、有文學、俊辯高志氣、以尙書郎使危疑反側者、再不辱命、其道大顯、被讒、
 出爲刺史、廢、
 李。邕。江夏人、果檢自負、嶽然善爲官、爲御史中丞、京兆尹、鳳翔節度、
 梁。肅。安定人、最能爲人、以補闕、修史、侍皇太子、卒、贈禮部郎中、

陳○京○泗○上○人○姑○為○諫○官○數○諫○諍○有○內○行○文○多○詰○訓○為○給○事○中○上○方○以○為○相○會○感○疾○自○刃○廢○

瘋○卒○韓○會○昌○黎○人○善○清○言○有○文○章○名○最○高○然○以○故○多○謗○至○起○居○郎○貶○官○卒○弟○愈○文○益○奇○

許○孟○容○吳○人○讀○書○為○文○口○辯○為○給○事○中○嘗○論○事○由○太○常○少○卿○為○刑○部○侍○郎○

李○觀○隴○西○人○行○義○甚○修○至○刑○部○郎○中○卒○故○與○先○君○為○三○司○者○也○其○大○理○者○曰○楊○瑒○瑒○無○可○

言○猶○以○獄○直○為○御○史○宇○文○邈○河○南○人○有○文○體○慤○人○也○為○御○史○中○丞○齷齪○自○守○然○以○直○免○官○復○為○刺○史○

袁○滋○陳○郡○人○善○篆○書○文○敏○不○就○為○相○出○使○辱○命○貶○為○刺○史○復○為○義○成○軍○節○度○卒○

盧○群○范○陽○人○雜○博○多○所○許○與○使○反○側○之○地○天○子○以○為○任○事○為○義○成○軍○節○度○卒○

崔○損○清○河○人○畏○慎○為○相○無○所○發○明○然○不○害○物○天○子○獨○愛○幸○以○損○為○長○者○

鄭○餘○慶○滎○陽○人○再○為○相○始○天○下○皆○以○為○長○者○及○為○大○官○名○益○少○今○為○尚○書○河○南○尹○無○恙○

鄭○利○用○餘○慶○從○父○兄○也○真○長○者○由○大○理○少○卿○為○御○史○中○丞○復○由○中○丞○為○大○理○少○卿○

李○益○隴○西○姑○臧○人○風○流○有○文○詞○少○有○僻○疾○以○故○不○得○用○年○老○常○望○仕○非○其○志○復○為○尚○書○郎○

王○紆○其○弟○紹○太○原○人○紹○得○幸○德○宗○為○尚○書○在○宰○相○之○右○今○為○從○泗○節○度○紆○有○學○術○魯○直○為○

尚書郎

路○泌○河○南○人○以○尚○書○郎○使○西○戎○留○戎○中○度○今○已○八○十○餘○既○和○戎○十○五○年○不○得○歸○無○為○言○者○

虞○當○會○稽○人○為○郭○尙○父○從○事○修○沔○州○刺○史○

賈○弇○長○樂○人○善○士○也○為○校○書○郎○卒○弟○全○為○御○史○中○丞○

趙○需○天○水○人○嗶嗶○儒○士○也○有○名○至○兵○部○郎○中○卒○張○式○南○陽○人○

張○莒○常○山○人○張○惟○險○宣○城○當○塗○人○皆○善○言○譎○式○至○河○南○尹○莒○至○鄧○州○刺○史○惟○險○和○州○刺○史○

奚○陟○江○都○人○柔○敏○至○吏○部○侍○郎○世○謂○陟○善○官○然○其○智○足○以○自○處○也○

盧○景○亮○涿○人○有○志○義○多○所○激○發○為○諫○官○奏○書○如○水○赴○壑○坐○貶○廢○弄○甚○久○至○順○宗○時○為○尚○書○

郎○升○中○書○舍○人○卒○楊○於○陵○弘○農○人○善○吏○敏○秀○者○也○為○中○書○舍○人○京○兆○尹○

張○因○某○人○舉○詔○策○為○長○安○尉○願○去○官○為○道○士○甚○有○名○以○其○弟○回○封○州○曰○吾○老○矣○必○死○回○也○

哭○而○行○遂○死○封○州○

高○郢○渤○海○人○有○文○章○規○矩○自○立○者○不○干○貴○幸○以○太○常○為○相○罷○居○尚○書○

唐○次○北○海○人○有○文○章○學○行○義○甚○高○以○尚○書○郎○出○為○刺○史○屏○弄○永○貞○中○召○以○為○中○書○舍○人○道○

病○去○長○安○七○十○里○死○傳○舍○

苗種上黨人有學術峭直以諫議大夫漏泄省中語貶萬州卒

柳氏兄弟者先君族兄弟也最大并字伯存及文學至御史病替茲癘次中庸中行皆名有文咸爲官早死

柳登柳冕者族子也自其父芳與冕並居集賢書府冕文學益健頗躁自吏部郎中出爲

刺史至福建廉使卒登晚仕至尙書郎秘書少監

薛丹同郡人至尙書郎

呂牧由尙書郎刺澤州卒

瞿楓清河人至檢校郎官子群爲右補闕贈給事中

房啓河南人善清言由萬年令爲容州經略于申河南人至尙書郎

常仲孺河南人今爲諫議大夫

蘇辨武功人好聚書至三萬卷與先君通書以戶部侍郎貶復爲刺史

權寬博陵人善言名理爲御史尙書郎

鄭元均梁陽人強抗少所推讓然以此怨困不得仕

辛輝隴西人

韓衡昌黎人善士

柳 宗 元

陳○樂○甫○梓○潼○人○高○志○氣○

薛○伯○高○同○郡○人○好○讀○書○號○爲○長○者○後○至○尙○書○卒○

張○宣○力○清○河○人○儒○善○後○表○其○名○去○力○但○爲○宣○自○元○均○至○宣○力○皆○沒○無○顯○仕○者○

孤○宗○元○曰○先○君○之○所○與○友○凡○天○下○善○士○舉○集○焉○信○讓○而○大○顯○道○博○無○雜○今○之○世○言○交○者○以○

爲○端○敢○悉○書○所○尤○厚○者○附○茲○石○以○銘○于○背○如○右○

前記の諸人、その過半は、書史に見えて、大抵その、行事を詳載し得べし然れども、今費せず、蓋し子厚かその先友を父の墓碑に附記したる意、其父を著はさむと欲するに在り、固より悪からず、要するに其人皆天下の偉人善士たる以上、姓名官爵を列ね、因て若しあらばその所長のみを附記して可なり、昔人かつて子厚か文中、時に從て之を譏病せし者あるを傷む、亦た其理なく、むば、あらず、子厚の、僑邁の、質却て、敦篤の、風を、欠くこと、かさか、是れ、余か、子厚の、爲に、惜むと、ころなり、

嗣て復た當時國家の、狀勢を、概觀せむに、貞元元年、馬燭及び諸軍、河中を平け、叛將李懷光は、縊死し、其二年には、淮西の將陳仙奇、李希烈を殺して、以て降り、吳少誠又仙奇を殺せしかば、朝廷少誠をして、鎮を領せしめぬ、その三年吐蕃長安を犯さんとしたりしが得ず、李泌同平章事となりしが、三歳ならずして卒し、その八年には、陸贄之に任

宗 元 の 少 時

いたり、賢は唐代有数の人物なりと雖も、徳宗の黜愚之を用ひて終へず、十年裴延齡の奸邪を論するに坐して罷められ、太子賓客となり、その明年貶せられて忠州の別駕となりぬ。賢奉天より以來力を宣ふること最も多く、事に隨て論諫し、百奏を、割切にす。帝却て其言を盡せしを、追仇し、仍てこの事あり。是に於てか諫議大夫陽城諸諫臣を率ひ、關を守りて延齡か奸邪賢か無罪を論す。時に延齡を以て相となさむとす。城曰く、脱し延齡を以て相となさば、當に白麻を取て之を壞るべしと、庭に慟哭して、之を阻み、因て國子司業に貶せられたり。これ子厚か進士登第の後二年のことなり。其後徳宗の世宰相の遞代するの幾回なるを知らず。進退頗る輕易而して、終に一人の國家の重きに任するなく、偷安姑息、是れ事とす。順宗の時、狎臣一時の權勢を弄せし者、朝廷の紀綱振はさりしが、故にして、この頃よりして、正に其端を啓けり。

第三 宗元の仕進

富貴の家に讀書の種子なく、貧賤の境に英才の士を出すは古今常に然るどころ、子厚の少時は上述の如くして、大半一家困乏の中にありしと雖も、幸にして其身は長く京師に在りて攻學怠らず、父の故を以て、頗る早く盛名を當代に爲すを得たり。

宗元の仕進

而してその韓愈との交際は、何の時に始まりしやを知らざれども、愈の傳を按ずるに、貞元二年歳十九にして、初て京師に至り、八年進士の第に登り、九年に博學宏詞に試みられたりとあれば、蓋し此間に在しなるべく、文壇の二大改革者は、夙に交を締せしに似たり。兪んや愈の兄たる韓會は、先友記にも見えたる如く、子厚の父の親朋たりきといふに於て、おや子厚は尙ほ他に當時の有力者と頗る相知れり。子厚少にして、聰警衆に絶ち、尤も西漢詩騷に精しく、その筆を下し、思を搦ふるや、古を伴となし、精裁密綴、瑤として、珠貝の如し。之をその後年、族弟宗直の爲めに撰へる西漢文類の序に徴するに、その趨向する所亦た知るに難からず。蓋し早歳に於ては、専ら西漢を規獲し、善くその精嚴工篤の筆致を傳へしと雖も、低枝を折りて、未だ高花に及ばず。先秦の文は深く悟入する所なかりし者の如し、故を以て、その作る所、時として、徒らに字句の彫琢と局面の敷張とを主とするに至り、絶えて超詣、嚮邁、一道の生氣、人の眉宇を射る底の趣を認むるを得ず。但し當時に行はれきといふ、四六常套の狹なる模倣より脱出せしものはあり。是れ他日大に名を爲すを得たる所以の素地にして、子厚の文の特殊なるは、實にその後年、貶謫の窮境に於て、刻苦して、拓開したる清新なる一路にありといふて可なり。

元 宗 柳

こゝに熟ら子厚か人となりを冥想摸索するに才に敏にして情に篤く其神經質に
近しと見ゆる性質は絶えて虚飾僞張を爲すの餘地なく喜怒哀樂を感ずるの深き
自ら之を抑遏する能はず故を以て時に碧落の上を窮めて冷然自ら善とし時に黄
泉の底に陥りて黯然出づる所を知らざるに至る唯た其壯年神駒未だ霜蹄に蹶か
ざる時紛々たる浮世の行路の難を解知せざりし間に於ては才は寧ろ矜尙に流れ
情は寧ろ放肆となりて誠に韓愈のいひけむ如く頗る人たるに勇にして自ら貴重
願籍せず功業立るに就るべしと謂へりしに似たり故を以てその人に遇ふや決し
て謙讓抑屈することなす野心中に燃えて客氣外に盛に直に他を推到せされ
ば止まさらむとし實際に於て僥倖廉悍議論今古に證據し經史百家に出入し卓厲
風發率ねその坐人を屈し名聲大に振ひしものあり是を以て一時皆慕ふて之と交
り諸公人を要し争ふて我が門下に出てしめむし口を交へて之を薦譽しければ隆
なるもの愈よ隆に彰なるもの愈よ彰その得意想見するに堪へたるものありしや
必せり

貞元九年歳二十一を以て進士の第に上りたる後三年を経て博士宏詞科を求め二
年にして博學宏詞に中り集賢殿正字を授けられたり已に清職を得たりし後は青

進 仕 の 元 宗

冥一路翹を奮ふて飛翔すべく閭閻の九門固より通し難きに非ず絶代の抱負君を
堯舜の上致し利澤人に施し名聲時に昭ならむこと期して待つべく衣冠の身揚
場として日に盛省に出入したりき
昔人いふ少年高科に上るは一の不幸なりと是れろの徳器を大成する能はざるか
爲にいひしものなるべけれど又之れを單に世途閱歷の上より見て常にろの然る
を覺えずむばあらず子厚後年揚誨之に與ふる書中にこの間を記して曰く時に舐
罵詈辱に遭ひ之か面を爲されば之か背を爲し積むこと八九年目にろの形を摧
きその氣を劬かむことを思ふ甚た自ら折挫すと雖も然れども已に狂疎たるを得
たりきと嗚呼士の盛譽を得るもの常にかくの如きのみ無知の小豎無能の俗吏人
の名を思むもの固より其人に乏しからず構陷唯だ謀るろの賤しきこと妾よりも
甚し燃ゆるが如き少年の空想は端なくもこゝに浮世の風に醒めはてぬ子厚たる
ものとの間すでに多少の不幸と怨憤なきを得むや是に於てか我を用ゆる者あら
ばその何人たるを問はず唯だ之に附攀し仕進位を上はし其意を快うせむと欲せ
し者なきにあらず他日二王に依托せしは乃ちこの故にして其人と爲り進むを求
むるに急なるを以てのみ

若し夫れ、子厚か早歲の作に係る文章を知らむとならば、大學諸生に與ふる書に若く者なし。貞元十四年九月、諫議大夫陽城陸贄のことに坐して貶せられ、國子司業より更に左遷せられて道州の刺史となる。大學の諸生、闕に詣て之を留めむを請ふ者あり。子厚仍て諸生に書を送り、その古道に合ふを稱して、その志を勉勵しぬ。この文たるや、頗る儻潔の趣を具へ、意氣激昂して、その發越甚だ俊なる者あり之を讀む者乃ち子厚か文筆自ら天に得る所あるを知るべし。而して當代學徒の陋習鄙俗に憤慨するところ、生氣凜々、秋霜烈日よりも烈しく、之を我邦の現時に比照するに、相合ふもの無しといはず。古今東西の撰を一にする以上は、長へに無用の文辭たらず、千歲猶は新なるの感あり。仍て原文の首尾を全くして左に引抄し、讀者と共に仔細にその文と意とを觀翫せむ。

二十六日、集賢殿正字柳宗元、敬致尺牘、大學諸生、始朝廷用諫議大夫陽公爲司業、諸生陶煦、醇懿、燦爛、太洽、于茲四祀而已。詔書出爲道州、僕時通籍光範門、就職書府、聞之、恒然不喜、非爲諸生成戚也、乃僕亦失其師表、而莫所矜式焉。既而署吏有傳致詔草者、僕得觀之、蓋主上知陽公甚熟、嘉美顯寵、勤至備厚、乃知欲煩陽公宣風裔土、覃布美化于黎獻也、遂寬然少喜、如獲恩惠于天子休命、然而退自感悼、幸生明聖不諱之代、不能

布露所蓄、論列大體、聞下執事、冀少見採取、而還陽公之南也。翌日、退自書府、就于車司馬門外、聞之於抱關、掌管者道諸生愛慕、陽公德教、不忍其去、頓首西闕下、懇悃至願、乞留如故者、百數十人、輒用撫手、喜甚、震并、不寧、不意古道復形于今、僕嘗識李元禮、嵇叔夜、傳觀其言、大學生徒、仰闕赴訴者、僕聞訖、于百年、不可親聞、乃今日而聞視之、誠諸生之賜、甚見盛於戲、始僕少時、嘗有意遊大學、受師說、植志持身焉、當時說者咸曰、太學生衆、爲朋曹、侮老慢賢、有墮窳、敗業、而利口食者、有崇飾惡言、而肆圖訟者、有凌傲長上、而肆罵有司者、其退然而自克、特殊於衆人者、無幾耳、僕聞之、恟駭、恒悛、哀痛、其聖人之門、而衆爲是嗜嗜也、遂退託鄉閭、家塾、攷勵志業、過大學之門、而不敢踰、顧尙何能仰視其學徒哉、今乃奮志厲義、出乎千百年之表、何聞見之乖刺、歟、豈說者之過也、將亦時異人異、無嚮時之桀、害者邪、其無乃陽公之漸、濟導訓、明效所致乎、夫如是、排聖人遺教、居天子大學、可無愧矣、於戲、公有博學恢弘之德、能并容善僞來者、不拒、曩聞有狂惑、小生依託門下、或乃飛文陳惡、醜行無賴、而論者以爲言、謂陽公過於納汙、無人師之道、是大不然、仲尼吾黨、狂狷、南郭、獻譏、曾參、從七十二人、敢禍負芻、孟軻、館齊、從者、竊履、彼一聖兩賢、人繼爲大儒、然猶不免如之何、其拒人也、愈扁之門、不拒病夫、繩墨之例、不拒狂材、師儒之席、不拒曲士、理固然、且陽公之在干朝、四方聞風、仰而尊之、貪冒苟進、邪薄之夫、庶

得少沮其志不遂其惡雖微師尹之位而人實瞻焉與其宣風一方厚化一州其功之遠近又可量哉諸生之言非獨已也於國體實甚宜願諸生勿得私之想復再上故少佐筆端耳勗此良志俾為史者有以記述努力多賀柳宗元白

是より先貞元七年子厚十九歳にして禮部郎中たりし弘農揚潁の一女を娶りぬ時
に歳十五夫より弱きこと四歳といふこの夫人幼より笄に及ふまで故ありて外族
に依り撫愛視遇する所以のもの殆んど厚に過ぎたり夫人小心敬順寵に居て益す
畏れ終に驕盈の色なく親黨之を難としたりき子の甫めて五歳なりしとき母の忌
に屬し僧を仁祠に飯するや就て其故を問ふ婢傳以て告げれば號泣して食はず
後是日に及ふ毎に必ず追追涕慕し終身の戚を抱きたりといふ親に厚き之情之を
天稟に得たり子の子厚に嫁するに及んでや姑に事へて敬養の道を備へ夫黨に睦
しく肅雍の美を致し中饋を主とし慈母を佐くるとき懐傷の義宗門に表たりき子
厚の母盧氏曰く吾新婦を得たりしより一孝女を増せりと子厚の二姉崔裴二氏に
之きしもの又之れを視ること兄弟も皆ならず故に三族の好他門に異なり然れど
もこの好夫人素と足疾を被るを以て長く行くこと能はず三歳ならずして孕みし
も育せず子の疾沈綿増すこと日に甚からむとす既にして謁醫求藥の便を以て永

柳 宗 元

宗 元 の 仕 進

寧里の私第に來歸したりしが貞元十五年八月一日を以て溘然として長逝しぬ時
に年二十三といふ嗟乎瓊華人間の一現のみ人は玉よりも美にして命は雲よ
りも薄し短夢一場僅に八年臺上風飛て愁思を引き鏡中懲滅して孤懐いたづらに
寂たり往事凄冷情の忘れ難き處觸緒の多きに堪へざるべし故扇塵封して遺釧空
しく存せり子の秋風水の如く虚幌に吹き入るの夜に方りてや重泉渺茫即くべか
らず寂寞空房點瀟遙にして燈影寒く唯た涙痕の雨を兼ねて芭蕉葉上に澗くとあ
りしならむのみ子厚の哀を爲す其れ如何や乃ちその墓誌中に記して曰く嗚呼
痛しいかな夫人の柔順淑茂を以てせば宜しく上壽に延ぶべく端明惠和宜しく貴
位に齒すべく生なからにして孝愛の本を知れるは宜しく餘慶を承くべし是の三
者皆その應を虚くす天問ふべけむやと泣血の餘に出でたるもの宜なり至情の人
を動かすものあるや而して是れ子厚が人世の悲哀痛戚を感じたる第一の出來事
たりき

貞元十九年子厚藍田の尉となり居ること三年其間全く俗吏と周旋するの止むを
得ざるに至れり然れども是れ官途仕進の歷程自ら然る者とすれば猶ほ且つ自ら
安すべし子厚たるもの唯だ蟻屈の日徒らに長きに堪へざるものなきを得べけむ

柳 宗 元

や前に引きたる揚海之に與ふる書中に曰ふ且暮に大官の堂下に走躡して卒伍を
 刑つことなし曹に居るときは俗吏前に満ち更に買賣に説て臈縮を商算す又二年
 此を爲して去ること能はざるを度り益す老子が其光を和げ其塵を同うするを學
 び自ら以て得たりと爲すと雖も然れども已に號して輕薄の人たるを得たりと蓋
 し聞く官に居るもの、恐るゝところ官長の噴のみ故を以て巧言令色百方計を畫
 し媚を容れ唯たその意に順適して逆ふなく戻るなきを勉む清廉潔白の士何を以
 て之を爲すを得む雋傑俊邁の人何を以て之を學ぶを得む孤鴻の海上より來る池
 濱は敢て顧るべきに非ず冥冥に飛で弋者の幕する所となるなかるべきのみ子厚
 自ら稱して和光同塵といふと雖も決して其宜しきを得たるものには非ず今夫れ
 性は強ゆべからずの愚とろの煩とに堪へずして之を強ゆるもの醜自ら掩ふべ
 からず是に於てか輕薄ならざるもの却て輕薄人の誦を受くるに至る嗚呼男子苟
 くも半文の錢あらば誓て小吏となる勿れ牛後に甘ずるは些の血性ある者の爲す
 所に非されはなり。

十九年、歳三十一にして、初めて監察御史となり、その十二月、監察使を進領し、仍て監
 祭使監祀あり、その末に曰く、舊と監察御史の長を以て、是職に居る、貞元十九年十二

宗 元 の 仕 進

月、御史缺くる者多く、予か班、三人の下にあり、進て領す、と蓋しこの歳十一月、監察御
 史崔遠、故事式に違ふを以て、崔州に流され、十二月、韓愈、李方叔、皆罪を得たるか故に
 しかいふのみ、こゝに翻て韓愈の傳を按するに、前に貞元九年、博學宏詞に擢てられ
 たる後、十二年、董晉が宣武節度使となるに會し、表して觀察推官に署せられ、晉の卒
 するや、喪に従つて出て、四日ならずして、汴軍の亂に會し、去て武寧節度使張建封に
 依り、府の推官に辟し、十七年、京師に出て、四門博士に調せられ、十九年に監察御史
 に遷りたるなり、然らば、正に子厚と同職にあり、昔日の親交、愈よ密となりし者あり
 しを知るべし、而してその罪を得たりといふは、上疏して宮市を極論したるに由り、
 陽山令に貶せられたるを指すものなり、こゝに子厚は、むしる韓愈の後輩なりしと
 雖も、喜愛地を換へて、今は却て得意の地位にあり、表面上他を推して登りたる看な
 きにあらす。
 龍泥中に蟠して未だ雲あらざるるとき、窮潤の極は、積瀝の笑を奈何ともするなから
 じ、子厚の同職に在ること、既に二年、遂に汲引の惠を垂るゝ者あらず、是に於てか、德
 宗の治世、漸く終り、貞元二十年、順宗の位に、即くや、二王に依りて、専ら顯要の位地に
 居らむことを計れり。

第四 二王の敗と八司馬の貶謫

柳 宗 元

人の進むに急にして早く自ら青雲の上致さむと欲する者常に以爲へらく、誦は卑賤より大なるはなく、悲は窮困より甚しきはなし、久しく卑賤の位窮困の地に處り、世を非り利を惡みて、自ら無爲に託するは、此れ士の情に非ざるなりと、而して遂に蘭は芳を以て自ら焼け、香は明を以て自ら焚け、翠は羽を以て身を殃じ、蚌は珠を以て破るに想到せざるなり、故を以て、一朝他の妬を受け、禍を蒙るに至りては、悔恨百回じかも復た及ばざらむとするなり、余こゝに子厚の事を記し、又この種の感を抑遏する能はず、今つらく子房か貶謫の由来を尋ぬるに、蓋し固よりその罪に非ず、唯だ當時の權臣、二王に親善たりし故を以て、遂にその黨與と看做され、薰蕕器を同らし、共に坐して却けられしに出づるか、如しされば余は記述の順序よりして、筆を轉じ、二王の事蹟を尋搜し、兼て子厚が之と如何なる關係を有せしかを探究せむとはするなり。

二王の敗と八司馬の貶謫

して計多く、自ら書を讀で、治道を知れりといひ、常に太子の爲に、民間の疾苦をいふ。太子嘗て諸侍讀並に叔文と政を論して、宮市の事に至る。太子曰く、寡人方に之を極言せむと欲すと、衆皆稱賛す。獨り叔文言ふところなし。既にして退くや、太子獨り叔文を留め謂て曰く、向に君奚ろ獨り言なかりしか、豈に意あるが爲か、と。叔文曰く、叔文幸を太子に蒙る、見る所あらば、敢て以て聞せずむば、あらず。太子の職たるや、當に膳に侍し、安を問ふべく、宜しく外事を言ふべからず。陛下位に在ること久し、もし太子の人心を收むるを疑はば、何を以て自ら解かむと、太子大に驚き、泣て曰く、先生にあらずむば、寡人にて此を知ることを無けむと、遂に大に愛幸せられき。叔文王伾と兩人相依附し、又むば、太子の爲に、某は將となすべく、某は相とすなべし、幸くは異時登極の日、便ち之を用ひよ、などいひ、仍て密かに、韋執誼以下の十數輩、當時名ありて未だ位を得ず、僥倖して速に進まむとする者、陸質、呂温、李厚、險、韓曄、韓泰、陳諫、劉禹錫等と結ひ、定めて死友となしぬ。凌準、程异等、又その黨に因て進み、交遊の蹤跡、詭秘にして、その端を知る者有る莫しと稱す。而して、柳子厚も亦た其一人として、數へられ、才識あるを以て、特に其黨の推獎、尊敬を得たりき。時は恰も、德宗の末年に際し、帝頗る政に怠りしかば、この一輩の徒は、羽翼已に成りて、復た移易し難きものあり、隠

然るの勢力を張り、滿廷の朝士之と争ふものあらざるもの、藩鎮侯伯亦た陰に賂遺を行ひ交を請ひしものありきといふ。

柳 宗 元

こゝに順宗即位の前一年、貞元十九年、補闕張正買なるもの疏して他事を諫め、召し見らるゝを得たり。正買は王仲舒、劉伯芻、裴愷、常仲孺、呂洞と相善く、數ば遊止せし者なり。召し見らるゝを得るや、諸の往來する者皆往て之を賀す。偶々之と善からざる者あり、叔文と執誼とに告げて曰く、正買の疎は君か朋黨の事を論するに似たり、宜しく少しく誠しむべしと、叔文先づ之を信す。執誼かつて翰林學士たり、父死して官を罷め、この時散官たり、然れども時々召し入れて、外事を問はる。執誼乃ち叔文の言を容れ、因て成季等が朋黨聚遊、度なきをいひ、皆之を罷付しぬ。人其由を知る者なし。何ぞ圖らむ、是れ叔文等が勢力を張皇せむとする第一手段ならむことを、而してその他を責めしは恰も是れ自ら以て相當る者にあらざるなきか。

朋黨比周、勢すでに成れり。唯た待つものは時のみ、機のみ。貞元二十年九月に至り、太子偶々風疾を得、因て言ふこと能はず。一年にして、醫藥効なし、已にして、德宗病大漸す。伍乃ち先づ入り、叔文を召し、翰林に坐して事を行はしめ、また叔文の意を以て、宦者李忠言に言ひ、詔と稱して行ひ下し、外の者は毫も知るところあらず。蓋し二人狎

二王の敗と八司馬の貶謫

客の親を以て、天子の病に乘じ、一朝手に唾して、國柄を取らむと欲せしなりき。

德宗已に崩し、太子位に即く、之を順宗となす。永貞元年正月、朝廷の重官黜けられし者多し。是に於て、檢校司空平章事杜佑を以て冢宰を攝し、山陵使を兼し、中丞武元衡を副使となし、宗正卿李紆を按行山陵地使となし、刑部侍郎鄭雲逵を鹵簿使となし、又中書侍郎平章事高郢に命し、哀冊の文を撰せしめ、禮部侍郎權德輿をして、冊の文を撰せしめ、太常卿許孟容をして、讖文を撰せしめぬ。かくの如き推選任用は、一として二王の手に出でざるはなく、而かも尙ほ數月の間は、専ら内部に於て、確固たる根據を造る爲に力を費せしと覺し、しが、特に外部に顯はれし行爲の數ふべき者は、さのみ見當らず、事を謀るの詭秘當に然るべきのみ。

翌年二月、翰林、陰陽、星卜、醫相、覆碁の諸待詔三十二人を罷む。蓋し叔文たるもの、元と碁を以て待詔しければ、こゝに於てか見るべく、同月吏部侍郎韋執誼に詔して、守左丞、同中書門下平章等たらしめ、紫を賜ふに至らしめ、當時叔文は、聲望未だ甚だ隆ならず、さるものあり、容易に他を服する能はず、而して執誼は己と交好きものなるを以ての故に、遂に特用して相となせしまでのことのみ、之を要するに、執誼は二王の

黨に利用されしに外ならざるなり。

柳

宗

元

叔文一輩が外部に對するは略は上に記するか如し。而して内部宮掖の間に於て、如何にして連絡を通し勢力を張りしかを尋ねむに、上の寢疾すでに久しく、復た庶政を親らせず、唯深居し籠帷を施し、閹宦李忠言、美人牛昭容、左右に侍し、百官上議する毎に、帷中よりその奏を可とするのみ。故に王伾は依然帝の側に侍し、常に上に諭し、教へて意を叔文に屬せしめたり。是に於て宮中の諸黃門、稍々之を知るにいたりぬ。叔文すでに王伾に因り、伾は李忠言に因り、忠言は牛昭容に因り、轉た相結搆し、事の翰林の下さるゝや、叔文その可否を定めて、中書に宣し、執誼をして、外に承奏せしめ、子厚を初として、韓泰、劉禹錫、陳諫、凌準、韓曄等と唱和し、管といひ、葛といひ、伊といひ、召といひ、凡そ其黨、偶然自得し、天下人なしと謂へり。而して當時二王の權勢ありしは、更に言はず。之に次ぐものは、實に子厚と劉禹錫との二人にして、日に叔文の爲に引かれ、禁中に入りて、圖議したりといふ。京師の人士、敢て指名せず。道路目を以てし、時に二王、劉柳の稱ありきと傳ふ。

記して此に至り、余筆を投して、私かに謂へらく、子厚の學と才とを以てして、區々たる狎客と相伍し、殊にその驅使を甘するに至りては、殆んど言ふに足らざるなりと。

二王の敗と八司馬の貶謫

士たるもの常にその出所に於て考慮せざるべからず。昔者、商鞅、變人景監に依り、趙良猶ほ之を醜とせしに非ずや。子厚たるもの豈に之を知らざらむや。而して子厚の爲せし所は、殆むと貪位貪名の謂議を免るゝ能はざらむとす。嗚呼、人を誤るものは、厄氣に流れし少年の氣銳に非ざるか。路を急ぐものは、躓き易く、而かもその躓く所は、泰山に非ずして、蟻垤のみ人にして、苟くも永久の念慮あらは、宜しく自ら檢束し、前程に確然たる光明を認め、一條の進路遅々として、而かも誤らざるを要すべきなり。

子厚は、この時に於て、位を進め、除せられて、禮部員外郎に遷りぬ。當時作りし文は大、概朝儀の頽狀に係り、生氣に乏しくして、取るに足らず。當時の子厚は、唯だ一個の野心家にして、未だ文人たらさざりしなり。而して二王は、表而上未だ特に任用せられず、故に幾もなくして、制して曰く、殿中丞皇太子侍書翰林待詔王伾は、左常侍を守り、前の翰林待詔に依るべく、蘇州の司功王叔文は、起居舍人翰林學士たるべしと。是れ自ら己を推舉せしものたるや、疑を容れず。次いで三月にいたり、王伾また翰林學士となり、同月又詔して曰く、朕新に元臣に委して、重務を綜盤せしめ、爰に貳職を求むるに、固より能臣に在り。起居舍人王叔文は、精識瓌才、徒寡くして、欲少く、質直にして、隱

柳

宗

元

すことなく沈深にして謀あり。その忠や君に致すの大分を盡し、その言や政を爲すの要道に達し、凡そ詢討することの皆大猷に合す。宜しく前勞に繼て、新命を付光し、度支鹽鐵副使たるべく、前の翰林學士に依り、本官の賜は故の如し。と初め叔文既に内外の政を專にし、その黨と謀て曰く、度支を判するときは國賦手に在り、以て厚く諸の用事人に結び、兵士の心を取り、以てその權を固くすべし。但し驟かに重職ならしめば、人心服せず。杜佑の雅より會計の名あるを籍れば、位重くして、務自ら全く制し易し。故に先づ佑をその名とし、檢校司徒平章事に兼ねるに、充度支并諸道鹽鐵轉運使を以てせしめ、而して己れ上記の如く其副となり、澄まじ、以て之を專らにせむとしたるなりき。二王の權、すでに重く、大に朝廷の重職を進退し、益す其勢を盛にせむとす。是に於てか、戸部尙書判度支王紹は兵部尙書となり、吏部郎中李暉は御史となり、中丞武元衡は左庶子となりぬ。初め叔文が黨數人、貞元の末に己に御史となりて、臺に在り。元衡が中丞たるに及び、その人を誨として、之を待つや、鹵莽皆憾むところあり。而して叔文も、亦た元衡が風憲にあるを以て、己に附かしめむと欲し、その黨をして勝ふに權利を以てせしむ。而して元衡之が爲に動かす、叔文怒り、故に授くる所ありしものといふ。蓋し武元衡は其人と爲りや、大に觀るべく、後、憲宗の朝に於て

二王の敗と入司馬の貶謫

多少の功績ありしもの、此人にして猶ほ然り、他は言ふに足らず。滿廷の朝士は、概ね驕威の生草の莖を折らざるか、如く優柔た、他に順適せむことを求め、二王の一輩は、獨り狹狹の牙を磨するか、如く觸るゝ者は、直に死せむとし、天を驚するの勢、殆ど易に近くべからざるありき。

叔文の志を得るや、王伾、李忠言等と専ら事を斷し、すでに韋執誼を用ひて相となし、その常に交結するところ、相次いで、拔擢し、一日數人を除するに、至り、日夜群聚す。伾は書を以て幸せらるゝと雖も、寢陋吳語、上の褻狎する所たり。而して叔文は頗る事に任して自ら許し、微しく文義を知り、事を言ふを好むを以て、上も稍敬するところあり。伾の如く出入阻なき能はず。時に上の疾久しく癒せず、内外皆上の早く太子の位を定めむことを欲す。叔文常に黙して議を發せず。そのかくならざるを欲するの念は、問はずして明なり。

當時、叔文の權勢、その官の卑きに比して、頗る盛なるものありしは、之を鄭珣、退官の事に徴して、知るべし。一日、珣瑜諸相と中書に會食せしことあり。省中の故事、丞相食するに方りては、百寮敢て謁見するものなし。是日、叔文中書に至り、丞相執誼と事を計らむと欲し、直省をして執誼に通せしむ。直省舊事を以て告ぐ、叔文直省を叱

五十
 ず。直省懼れて入り執誼に白す。執誼逡巡懇服し、竟に起て叔文を迎へ、その間に就て、
 語ること良久し。宰相杜佑、高郢、珣瑜皆筋を停めて以て待つ。報するものあり、云ふ、叔
 文飯を索め、宰相己に之を與へ、同じく闇中に餐す。と、佑等心にその不可を知る。雖
 も、叔文執誼を畏懼して、敢て言を出さず。珣瑜獨り歎して曰く、吾れ豈に復たこの位
 に居るべし、ひや、と。左右を顧み、馬を取て徑ちに歸り、遂に起たず。是より先き左僕射
 賈耽、王叔文の黨事を用ふるを惡み、疾を以て第に歸り、屢骸骨を乞ふ。二相は皆天下
 の重望、相次いで歸臥す。叔文執誼等、益願忌するところなく、百僚皆懼れて出づる所
 をさへ知らざりき。

五月、右金吾大將軍范希朝を以て檢校右僕射兼右神策京西諸城諸行營兵馬節度使
 となせり。叔文、兵柄を専らにせしむ。希朝が年老、舊將たるを以て、故に用ひて、將
 帥となし、その名を主とせしめ、尋いて、その黨韓泰を以て行軍司馬となし、その事を
 專にし、乃ち度支郎中より轉じて守兵部郎中兼中丞、充左右神策京西都柵行營兵馬
 節度行軍司馬たらしめ、紫を賜ひ、又た改めて檢校兵部郎中となし、ぬ。而して叔文が
 他の相容れざるものを退くること猶ほ止まず。尙ほ書左丞韓臯を以て鄂岳觀察武
 昌軍節度使となせし如き是れなり。初め臯自ら前輩舊人の累りに重任を更ふるに

際し、頗る簡倨を以て、自から高うし叔文の黨を嫉み、人に謂て曰く、吾れ新貴人に事
 ふる能はず。と。臯の従弟曄、叔文に幸せらるる以て、叔文に告げければ、遂に外に出せる
 なりき。同月、遂に王叔文を以て戸部侍郎となし、職は故の如くして、紫を賜ひぬ。叔文
 前に依て翰林學士を帯ひむとす。宦者俱文珍等、その權を專にするを惡み、翰林の職
 を削り去らしむ。叔文制書を見て、大に驚き人に謂て曰く、叔文日時、此に至て公事を
 商量す。若し此院の職事を得ざれば、即ち因て至ると無けむ。と。王伾即ち諾して請ひ
 しも允されず。再ひ奏して即ち得たり。又その歸登と同日に紫を賜ふに方り、登は内
 より、珍笏を出して賜はりしも、叔文は然らず。己に文珍等の惡む所となり、仍て斯の
 如しといふ。二王の黨、此に由て初めて懼るゝ所あり。蓋し閣豎の勢力は常に相敵す
 る能はざればなり。

初め叔文の内に入るや、陰に密命を構へ、機形見はれず、因て口を騰して善惡し、之を
 進退す。人未たその本を窺はず、信して奇才となしぬ。その兩使を司り、利柄外朝に齒
 せらるゝに及で、愚智同しく曰く、城狐山鬼、必ず夜號す。窟居し禍福を以てすれば、人
 亦た神として之を畏る。一旦豈出で馳すれば、能なきや必せりと。蓋し叔文その器に
 非ず、又其行ふ所急なるを免れさればなり。

時に侍御史に賀群といふ者あり、王叔文の黨子厚、馬錫以下皆之を憚る、群之に付かす。その黨議して群か官を選さむとす。韋執誼之れを止む。群嘗て王叔文に謁す。叔文榻を徹して進ましむ。群之れを揖して曰く、夫れ事知るべからざる者あり。叔文曰く、如何。群曰く、去年李實恩に伐り、貴を恃み、一時に傾動す。此時公道傍に送巡す。即ち江南の一吏のみ。今公正に實の形勢に居る。又安んそ。路傍公の如き者あるを慮らざるを得ひや。と。叔文其言を異とせしと雖も、竟に之を用ひず。而して是れ實に他日の讒をなしたるものなりき。

柳

宗

元

叔文すでに宦者と相容れず、而して執誼とも又長く兩立する能はず。羊士諤の事便ち其端を啓さし者として見るべし。士諤は元と宣州の巡官たり、性頗る傾軋、その公事を以て京に至るや、叔文か事を用ひて朋黨相煽くに遇ひ、頗る平なる能はず。公にその非を言ふ。叔文之を聞て怒り、詔を下して之を斬らむと欲せしも、執誼可かず。之を杖殺せしめむとしたるも、執誼又た以て不可となせり。乃ち遂に貶して汀州寧化縣尉となしぬ。是に由て叔文始めて、大に執誼を惡み、二人の間を往來する者皆懼るゝに至りき。是より先、劉闢、劍南節度副使たり、韋臬の意を將て劍南三川を都領せむことを求め、叔文に謁て曰く、太尉某をして、微賊を公に致さしむ。若し某に三川を與

二王の敗と八司馬の貶の請

へなば、當さに死を以て相助くべく、某を用ひされば、亦た當さに以て相酬ゆるあるべし。と。叔文仍て亦た將に之を斬らむとす。而して執誼固く執て可かず。闢尙は京師に遊て、未だ去らざりしが、士諤の事を聞くに及で、遂に逃れ歸りきといふ。
二王の勢力は、今や正に其絶頂に達せり。而かも徳望ありて然るに非ざるもの何ぞ長く之を保つを得む。是より先、廣陵王純を立て、皇太子となせる如き、叔文輩の聞くを惡みし所たり。已にして西川節度使南康王韋臬等、表を上り、皇太子の監國を請ふ。その表に曰く、陛下哀、毀疾を成す。請ふ假りに太子をして親ら庶政を監せしめ、皇躬痊癒するを俟ちて、復た春宮に歸らしめむ。と。又太子に牋を上りて曰く、聖上亮陰、政を臣下に委するを言はす。而して付する所、人に非ず。王叔文、王伾、李忠言の徒、輒ち重任に當り、紀綱を墮紊し、心腹を樹置す。恐らくは家邦を危くせむ。願くは殿下、即日奏聞し、群小を斥逐し、政をして人主に出てしめば、四方安を獲む。と。俄にして荆南の裴均、河東の嚴綬、上る所の牋表相繼て至り、意臬と同じく、中外皆倚て以て援となす。是に於てか、上の意漸く決する所あり。七月に至り、遂に詔して曰く、軍國の政事は宜しく、權に皇太子をして勾當せしむべし。百辟群后、中外の庶僚、心を輔翼に悉くして、以て理に底り、朕か意を宣布し、咸く知聞せしめよ。と。順宗初め、二王を信して、政を托せし

に一旦翻然こゝに至りしもの頗る怪しむべきに似たりと雖も、その事情の真相を探究すれば、又職として二王が事を爲すに急なりしが故ならむ。蓋し上四月にいたりて疾益甚しく、時に扶けられて殿に座するも群臣望拜するのみ、未だ嘗て進見せし者あらず。天下の事専ら叔文に斷し、朋黨喧譁、榮辱進退、進次に生じ、惟たるの欲する所、程度に拘はらず。既にして内外に厭毒せられし知り、その播敗せられむを慮り、即ち兵權を得て、自ら固くせむことを謀りし形跡あり。是に於てか、人情益す疑懼し、その爲すところを測らず、唯だ止むを得ずして朝夕伺候するのみ。而して中官劉光奇、俱文珍、薛盈珍、尙解玉等は皆先朝任使の舊人、心を同うして怨猜し、屢以て上に啓しければ、翻て叔文を惡むに至りしなり。八月、上遂に位を皇太子に譲り、興慶宮に居り、天下皆喜ぶ。韓愈か東方半明の古詩は、蓋しこの間の消息を傳へしものといふ。東方半明、大星沒、獨有太白配殘月。嗟爾殘月勿相疑。同光共影須與期。殘月暉暉。太白聯聯。雞三號。更五點。

事かくの如くして、叔文獨り憂色あり、常に杜甫が諸葛亮の廟に題せし七律の末句を吟し、出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟といひ、因て歔歔流涕す、聞く者竊に之を笑ひさとしふ。

叔文は位に在り、雖も已に實權なし、乃ち敢て再舉を圖り、乾坤を一賭し、斃れて後止まむとするに、至る是に於てか、兩使事を判すと雖も、未だ嘗て簿書を以て意と爲さず、日にその黨を引き、人を屏け、切切として細語し、宦者の兵を奪て、以て四海の命を制せむことを謀り、既に范希朝、韓泰をして京西諸城鎮行營兵馬を總統せしめぬ。而して中人尙ほ悟らず、邊上の諸將各狀を以て中尉を辭し、且つ方さに希朝に屬せしと云に會し、中人始めて兵柄の叔文の爲に奪はれしを悟りぬ。乃ち大に怒て曰く、その謀に従へば吾か屬必するの手に死せむと密にその使をして歸て諸將に告げしめて曰く、兵を以て人に屬する無かれと。希朝の奉天に至るや、諸將至るものあらず、韓泰之を白するに及で、叔文計出つるところなく、唯た奈何奈何といふのみ。嗟呼、大事是に於てか、漸く將に去らむす。

時に叔文の母病て死しぬ。然れども匿して發せず。一日酒饌を翰林院に置き、諸學士及び内官李忠言、俱文珍、劉光奇と宴し、金を袖にし、以て餉し、因て揚言して曰く、天子適て兔を苑中に射る、鞍に跨り飛ぶ如くせよ、敢て異議するものは斬らむと。飲に中し、叔文諸人に白して曰く、叔文の母、疾病せり、比來心を盡し力を盡せ、國家の事の爲に好惡を避けざるもの、以て聖人の重知に報ひむと欲するなり。若し一たひこの

柳

宗

元

職を去らば、百勝斯に至らむ。誰か肯て叔文を助けて一言する者ぞ。望むらくは諸君懐を開て察せられよ。と。又曰く、羊士驪、誼文を非毀す。之を杖殺せむと欲するに、章執誼讎にして遂げず。叔文平生劊闘を知らず。乃ち執臬の意を以て三川を領せむを求め、關門を排して相干し。叔文の手を執らむと欲す。豈に凶人に非ずや。叔文已に掃木場將をして之を斬らむとせしに、章執誼苦執して可かず。毎に念ふ。この兩賊を失ふ、人をして快からざらしむ。と。又自ら判度使以來、利を興し、害を除きたるを陳して、己か功をなす。俱文珍、語に隨て之を折き、叔文以て對ふるなし。左右竊かに語て曰く、母死して已に腐す。此を留めて、何を明日を爲さむとす。乃ち歸て喪を發しぬ。叔文の爲せし所頗る無謀。嗤ふべきに似たり。と雖も、この一喝は最後の示威的運動に外ならず。人の猶ほ己を畏れて、大事を恢復すべきかを檢せむとせしものなるへし。然れども、人心已に去り、復た歸向する者なく。黨人謀盡きて爲すべきなきに至り。自棄。又密慮熟計を凝らすことなかりき。

たゞ王任のみ、宮中に出入せしを以て、自ら起て、猶ほ頽瀾を既倒に廻さむとす。王任の始め、叔文等と權を弄するや、門に車馬填溢すると尤も盛なりきと稱せらる。珍玩賂遺、歲時絶えず。室中に無門の大櫃をつくり、唯だ一竅を開き、以て物を受くるに足ら

二王の敗と八司馬の貶

しめ、中に金寶を藏し、その妻或は上に寝臥す。當時の權勢、想ふべきなり。而して叔文すでに喪に居り、事漸く爲すべからざるに至らむとしければ、王任は懲りず。まに、日に中人并に杜佑に詣り、叔文を起して相と爲し、且つ北軍を總へしめむと請ひ、又た威遠軍使を以て平量事たらしめむと請ひしも、共に得ず。その黨愛憎して自ら保せず。任の日に至り、翰林の中に座し、疏三たび上りしも、報せず。夜に至り、忽ち叫て曰く、休風の中に。と。明日遂に興して歸り、復た出てさりき。事の此に至りし者、史にその精細を傳へざるを以て、事實の真相、知り易からざる者あり。と雖も、儻しくは是れ亦た闡豎輩に妨げられしに非ざるか。是に於てか、禮部侍郎權德輿は、戸部侍郎となり、倉部郎中判度支陳諫は、河中少尹となり、二王の黨は始めて將に去られむとす。るに至りき。

おもはす。筆を岐路に馳せて、以上専ら二王專權の事蹟を叙せり。而して子厚が之と如何なる關係を有せしかば、讀者又略ぼ之を推知し得可からむ。但し、子厚たる者、好しや。當時に二王劉柳と並稱されし程の事ありといふも、余は特にその規畫せし事蹟を尋ぬる能はず。因て記述する所あるを得ざるなり。

二王の專權、一時の耳目を聳動せしや。疑を容れず。况んやその太子冊立に關して、頗

柳

宗

元

る聞くを悦ばさりきといへば、滿廷の朝士、誰か之に對して快き者あらむ。昨は福の門たりし者、今や怨の府となりぬ。富貴榮華もどより恃むべからず。醜雲覆雨たゞ、嗟嘆すべきのみ。唯だ順宗在位の間、に於ては、さすがに猶ほ空位に坐するを得たりし。も國璽一たび太子の手に移るに及ては、果然罪禍を被り、賢群が當年の言の驗あるを悟るに至りぬ。これ憲宗即位の次月、即ち永貞元年九月のことなりき。是に於て王任を以て開州司馬となし、王叔文を以て渝州司馬となしぬ。而して帝の怒猶ほ霽れさりし者ありしと覺しく、任は後幾もなくして遷所に病死したりしが、叔文は尋いて死を賜はるに至り、之と時を同うして、黨人の貶謫せられし者、凡そ八人、子厚も初は猶ほ邵州刺史に遷されしが、翌月に及ひて再ひ位を貶せられ、僅に永州司馬員外置同正員たるを得たりき。諸人皆かくの如くして再貶せられ、韓曄は饒州司馬となり、陳諫は台州司馬となり、凌準は連州司馬となり、韓泰は虔州司馬となり、劉禹錫は朗州司馬となり、程昇は郴州司馬となりぬ。叔文を除いて他の八人之を八司馬といふ。二王劉柳の一輩は、かくの如くして全く敗れぬ。

ここに附記すべきは、八司馬に關する一異説なり。韓愈が撰に係る順宗實錄に據れば、韋執誼は崖州司馬に貶せらるるとあり。舊唐書之を取り、柳集の注を作れる蔣之翹

二王の敗と八司馬の貶

も亦た之に従ひぬ。若しかくの如くなれば、執誼は宜しく八司馬の中に加へ、王任を除き、其數に合はすへきなり。而して王任の開州司馬たりしことは、實錄と新舊兩唐書と皆同しく、當時司馬となりし者、叔文の外にすべて九人ありか。もふに必ずしも八司馬の稱あらざりしなるへし。但し新唐書には、執誼を以て崖州司馬參軍に貶せられきと爲し、その數乃ち合ふ。且つ夫れ新書の撰述は、最も後代に在り、考證亦た據る所なしといふを得ず。是れ余が姑く之に従ふ所以なり。

二王の敗は、主として中人、内官と相容れ、さりしに由ると、雖も、韋執誼との不和も、亦たその一大原因たるを失はざるに似たり。蓋し叔文の性は、寧ろ剛急なるに反して、執誼は頗る柔緩なり、かゝる氣質上の差異は、遂に二人をして長く事を俱にするを得ざらしめしか如し。余はすでに叔文の事を詳記しければ、ここに復た執誼の人を爲りを附載し、事實の本末を備ふを得む。執誼は元と杜黃裳の子の婿にして同じく相位に在り、故に最も後れて貶せられしなりき。初め執誼は進士對策の高等なりしを以て、驟かにして拾遺に遷り、年二十餘にして翰林に入りぬ。蓋し、その性、頗る貪婪、詭賊なりと雖も、巧惠便辟を以て、德宗に幸せられ、かくは異數の寵遇を得たるなり。さるの從祖兄夏卿、吏部侍郎たりしとき、執誼は翰林學士たり、財を受けて、人の爲に

科第を求む夏卿應せず。乃ち懐中の金を探り出し、以て夏卿か袖に内る。夏卿驚て曰く、吾と卿と先人の徳に頼り、名位を致して幸にす。遂に達す。豈にかくの如く自ら毀壞すべし。既にして叔文の爲に引用せられ、初めより敢て相負かず。公議に迫り、已むを得ずして、時々異同あれば、輒ち人をして叔文に謝せしめて、いふ敢て約に負いて異同を爲すに非ず。蓋し兄か事を爲さむと欲するのみと、而して叔文之を信せず。遂は仇怨を成しぬ。然れども、叔文の敗るゝや、執誼亦た自ら形勢を失ふて、禍の將に至らむとするを知り、尙ほ相たりと雖も、常に自得せず。長く奄奄として、氣なく、人行の聲を聞けば、輒ち惶悸して色を失ひ、以て敗死のときに至るまで、纒に四十餘日のみ。執誼卑より母を諱むところあり。嶺南州縣の名をいはず。郎官たりしとき、かつて同舍郎と職方にいたり。圖を見る。嶺南の圖にいたる毎に、命して之を去らしめ、目を閉して視す。相を拜するに至り、遠て坐するところの北堂に一圖あり。就て省みず。七八日にして、試に就て之を觀れば、乃ち益州の圖なり。以て不祥となし。甚だ之を無み。擲て口より出すこと能はず。貶せらるゝに至り、果して益州を得たり。執誼貶せられて二年、病んで海上に死せり。

二王の黨す。でに却げらる。而かも叔文の最も賢重せしは李景險にして、最も奇才と爲し、は呂温なりき。叔文の事を用ひし、初に方り。景險は母の喪を持して、東都にあり。呂温は吐蕃に使し、叔文が敗れし後、半歳にして方に歸り來りぬ。故に二人は、幸に貶謫の慘禍を免れしとは、いへ。遂に再び任用せられず。輒ち坎壈の中に、その殘生を消遣したり。嗚呼、二王が當代の才人輩を誤りし者、何ぞ其れ甚しき。而して伍と叔文と執誼と皆す。でに死し。二星霜の後に至り、所謂永貞の餘黨、能く健なるもの、指を屈すれば、唯だ子厚以下七司馬のありしのみ。

韓愈が永貞行一篇は、劉禹錫の貶謫の次に江陵に邂逅して作りし者と稱せらる。その然るや否や、深く究むるを要せず。雖も、微言婉辭、劉柳諸賢が人の爲に誤られしを惜むの意は、昭昭として見るべく、善くこの間の消息を傳へて、毫も諱むところあらず。並記して、以て、參攷に資するを得む。

君不見太皇亮陰未出令。小人乘時偷國柄。北軍百萬虎與貔。天子自將非他師。一朝乘印付私黨。慷慨朝士何能爲。狐鳴烏噪爭署置。賜賚跳跟相嫵媚。夜作詔書朝拜官。超資越序曾無難。公然白日受賄賂。火齊磊落堆金盤。元臣故老不敢語。盡臥涕泣何汎瀾。蓋賢三公誰復惜。侯景九錫行可歎。國家功高德且厚。天位未許庸夫干。嗣皇卓犖信英主。

文如太宗武高祖。膺圖受禪。登明堂。共流幽州。絳死羽。四門肅穆。贈俊登。數君匪親。豈其
朋郎官。清要爲世稱。荒郡迫野。嗟可矜。湖波連天。日相騰。蠻俗生枝。瘴瀟蒸。江氣嶺。祲昏
若凝。一蛇兩頭。見未曾。怪鳥鳴喚。令人憎。蟲蟲群飛。夜撲燈。雄虺毒螫。墮股肢。食中置藥
肝心崩。左右使令。詐難憑。慎勿浪信。常兢兢。吾嘗同僚。情可勝。具書目。見非妄。微嗟爾。既
徃宜爲懲。

柳

宗

元

この詩昌黎集中に於て傑製と稱せらる。前幅は天昏くして地暗く、中間は日出で、
氷消ゆる概あり。閑して後幅に至れば、又凄風苦雨の如く、文の情に生するや、變幻窮
らず。而かもろの叙事の法あるは、又大に觀るべく、殊に數君匪親。豈其朋をいひ、吾嘗
同僚。情可勝といへる如き、坦夷義を尙ひ、朋友を待つに始終あるを知るべく、亦た以
て劉柳諸公の爲に、冤を雪くに、足るといふべきのみ。一篇の詩の作徒爾ならず。
嗚呼二王才の俊あるに非ず、徳の高きあるに非ず、必ずしも社稷に禍し、邦家を亂る
の大野心あるにも非ず。唯だ小人の劣情として、富貴を願ひ、勢利を冀ふの情を禁せ
ず、畫策頗る觀るべきものありしとはいへ、徒らに中外の耳目を驚かし、心魂を震え
しめ、遂に之を心服せしむる能はず。朝士之に屈從せし者、寧ろ力勝たず、智若かた
るか故ならずして、唯だ姑らく之を畏れしか爲のみ。幾もなくして、朋黨早く潰裂せ

二王の敗と八司馬の貶謫

むとするの兆あり、長く之を統率提轄するを得ず、加ふるに、太子の監國事料られさ
るに起り、遂に全く敗れて、政を專にしたるは、僅に入開月、未だその本懐を達するに
及ばざりしや、明なり、叔文の徒もどより、道ふに足らず、然れども他の八司馬の輩に
いたりては、濟々たる多士、廟堂瑚璉の器たるべきもの、固よりその人に乏しからず。
この輩何か故に身を誤りて、こゝに至りしか、是れ大に疑ふべきなり。
余は前にしばし、子厚の人と爲りを論じて、其此に至れる經路を叙せり。之を一言
すれば、子厚たる者、未だ必ずしも叔文を視て、肝膽相照し、意氣相投し、初めて以て與
したるに非ず。唯だ偶然の機會よりして、相知るに至り、舟中流に横はりし時、一鉅千
金、音ならざるの趣ありしに過ぎず。其結托して死友と爲し、深く機密に與かりきと
いふか如き、抽象的言辭は、遂に真相を究め難く、事實の然りし者ありしや否や、容易
に首肯すべからざるに似たり。子厚もどより、滔天の罪過あるものに非ず、又事を同
うしたる、呂溫、韓泰、劉禹錫の諸人の如き、亦た皆一時の才俊、何ぞこの事ありと謂は
む、たもふに、宦者輩その己に便ならざるを惡み、指して黨となし、之を天子に讒し、連
坐して貶謫せしめしに過ぎざるべきのみ。但し事のこゝに至るその跡の指さるべ
き者ありしか爲にして、劉柳輩その自ら愼謹ならざりし罪を逃るを得ず。かくの如

柳

きは必ずしも胡致堂、丁南湖の云々するを待て始めて之を知らざるなり。その事固より憐むべし。而して後世察せず。乃ち子厚等を以て不義に與して刑法に罹ると爲す。攻むる者絶えず。噫、亦た冤といふべきのみ。尙ほ頼ひに宋の名賢范文正公か之を昭雪を爲すあり。僅に以て慰むべしと爲すなり。その言に曰く、劉禹錫、柳宗元、呂温等、王叔文の黨に坐廢せられて、用ひられず。數君子の述作を覽るに、體意精密、道に涉ること淺に非ず。如し叔文にして狂甚しからば、義必ず交らず。叔文藝を以て東宮に進み、人望まふより輕し。然れども、傳に稱す。書を知り、好て理を論し、太子の爲めに信せらる。順宗の位に即くや、禹錫等を引いて事を禁中に決し、議して中人の兵權を罷め、俱文珍か輩に悟ひ、又章梠か私請を絶ち、劉闢を斬らむと欲す。その意、忠に非ざるか。梠之を囑ひ、會を順宗病篤く、梠等太子の意を揣りて、監國を請ひ、叔文を誅さむとす。憲宗梠の謀を納れ、内禪を行ふ。故に當朝の左右之を黨人と謂ふ者、豈に復た雪かれむや。唐書、蕪駸成敗に、因て之を書し、裁正する所なし。孟子曰く、盡く書を信せば、書なきに如かずと。吾れ夫子ののち後、一毫を以て人の業を廢せざるを聞くなり。范氏の言たるや、や、播摩應測の餘に出てたる跡ありと雖も、亦た必ず此くの如くならざりしとは謂はず。清の乾隆帝、かつてこの説に本つき、亦た力めて其冤を辨しぬ。

宗

元

今煩を恐れて抄録せず。嗚呼、大賢前に昭雪して、人主後に滌洗す。子厚たるもの復た遺憾なきに庶幾からむか。

子厚すでに罪を憲宗に獲たり。故に敢て顯かに自ら辨せず。然れども、後年親朋告ぐる所、自ら善く心事を寫し出したる。玲瓏、自白の言なきに非ず。その許京兆、孟容に寄せし書中に謂ふ所、大に以て見るべしと爲すなり。曰く、宗元早歳罪を負ふ者と親善なり。始は其能を奇なりとし、以て大に仁義を立て、教化を裨くべしと謂へり。過て自ら料らず。懃懃として勉勵し、唯た中正信義を以て志となし、以て堯舜孔子の道を興し、元元を利安するを以て務となし、愚陋力め、強むべからざるを知らず。その素意かくの如きなり。未路、孤危、阨塞、艱、凡を事、壅隔して、貴近に恨、忤、狂、踈、膠、戾、不測の幸を踏む。群言沸騰して、鬼神交も怒り、加ふるに、素と卑賤にして、暴に起ち、事を領するを以てす。人の信せざる所なり。利を射て、進を求むる者、門に填ち、戸を排き、百に一を得ず。一旦意を快うして、更に怨讎を致す。此を以て、大罪の外、詆訶、萬端、旁午、構煽して、盡く敵讐となり、心を協せて、同じく改め、外は強暴職を失ふ者に連て、以てその事を致す。かくの如きは、子厚か本志とるの獲罪の來由とを顯示して、頗る彰明較著亦た以て加ふる蕪き者にあらずや。而して更に數語を下したる後、輕々筆を轉し來

二王の敗と八司馬の貶謫

り、心中の煩悩を吐き盡し、年少氣鋭、幾微を識らず、當否を知らず、但た一心に直に遂
 けむとし、果して刑法に陥る、皆自ら求め、取て之を得る、と、又た何ぞ怪まむ、宗元
 衆黨人の中に於て、罪状最も甚しく、神理罰を降し、又死に即く能はず、猶ほ人に對し
 て、言語し、食を求めて、自活し、迷て、耻を知らず、日復た一日なり、といへるか如き、輕躁
 にして、事を誤るに至りしを、自白して、少しも陰蔽する所なく、悔恨の情の切なるを
 見るに非ずや。

又、裴垣に與ふる書を見るに、曰く、僕の罪年少く、好て進むを事とし、止む能はざる
 に在り、俯輩恨怒するに、先づ官を得るを以てし、又不幸にして、早く嘗て與に游へる
 もの、權衡の地に居り、十たひ賢を薦めて、乃ち一たひ售むことを幸へとも得ざるも
 の、譎張排根す、僕出て、之れを辨すべけむや、性又倨野にして、摧折する能はず、故を
 以て、名益悪く、勢益險し、嗒かり耳ある者、相郵傳して、醜語を作すのみ、卒に何と
 いふかを知らず、中心の愆、かくの若きのみと、又た蕭翰林俛に與ふるの書に、いはす
 や、僕の幸あるや、嚮きに進て、駭軌安からざる勢に當り、平居門を閉づれども、口舌無
 敷、况んや又た久しく與に游ふ者あり、乃ち岌岌として、ろの間を操る、ろの進を求め
 て、退く者、皆棄て、仇怨となり、造作紛飾、蔓延益肆なり、的然として、昭晰自ら内に斷す

るに非ざれば、孰か能く僕を冥冥の間に了せむ、然れども、僕當時年三十三、甚だ少し
 御史裏行より、禮部員外郎を得、超えて、顯美を取る、世の進むを求むる者の、怪怒、媚疾
 を免れ、ひと欲するも、其れ得へけむや、凡そ人皆自ら達せむと欲し、僕先づ顯處を得
 たり、才は同列に、除ゆる能はず、名は當世を壓する能はず、世の僕を怒るや、宜なり、罪
 人と交はるよと十年、官又之を以て進み、辱は附會にあり、聖朝弘大、貶黜甚た薄く、衆
 人の怒を塞く能はず、謗語轉た侈て、器器嗷嗷たり、漸くして、怪民智を飾り仕を求む
 る者、更に僕を督り、以て、讐人の心を悦ばしむるを成し、日に新奇を爲し、務めて相喜
 可し、自ら以て、援引の路を速ねく、而して、僕登坐ら、困辱を益して、萬罪横生るの端を
 知らず、伏して、自ら思念せば、過大の恩甚しく、乃ち以て、此を致せりと、疾痛慘怛の趣
 を、曲盡して、餘す所なく、ろの志や、潔ろの行や、廉、而かも、料らずして、身を誤り、かくか
 如くなれるもの、噫、亦た窮せりといふべきのみ。

又、楊誨之に與へし第二書には、備さに自己の經歷を述べ、終に百尺竿頭の一步を進
 めて、曰く、御史郎官たるに、及び、自ら以て、朝廷に上り、利害益大、愈よ、恐懼して、色を人
 に失はざらむことを思欲し、戒彌加す切なりと、雖も、卒に連類の爲に、廢逐せらるゝ
 を免れず、猶ほ前時の狂疎輕薄の號、既に人に聞かるゝに、遭ふて、恭謙をなす、未だ治

ねからざるを以て、故に罪至て之を明かにするなしと、嗟呼、男兒苟くも強頂の骨ある者、奚ぞ善く俗吏の間に老ゆるを得む。禍是に於て來りしのみ。

以上の諸篇に因て考ふるに、子厚何ぞ罪ありとなすを得む。唯だ國運日に振はす、廟堂政を執る者、器宇偏狹、猜疑構陷、是れ事となる濁世に際して、偶々其身を殃じたりしのみ。余はこの場合に於て、愈よ子厚の人と爲りの儔、傑廉悍を見すむはあらず。今夫れ、小人の務めて、人を擠陥せむとせるもの、ろの疵、微瑕の荷くも指摘するに足る者あれば、從て之を大にし、紛然として世に傳唱、弘布し、唯だ人の聞かさらむを懼る。即ち疵瑕なき者に至りては、百計之を陥れ之をして、完人と爲るを得さらしむ。故に子厚の過たるや、本と甚た大となすべからざる者たるを以て、乃ち之を指して、黨人となし、以て仇讐の言を實にせしのみ。唐末の亂世に際して、士の仕進を爲す者、舛沈常ならず、豈に獨り子厚のみならずや。單に其跡を見て、其事を實にするは、未だ善く當時の事况を知る者に非ざるなり。同時の韓退之の如き、古今推して粹然疵瑕なき者と爲す、しかも猶ほ時に讒謗を免れず、釋言の一篇を見て、予の一斑を知るに足らむ。曰く、愈御史となり、罪を徳宗の朝に得たり、同じく南に遷さるもの三人、獨り愈先つ收用せらるゝを爲す、相國の賜大なり。百官の相國に進見するや、或は立な

ら語り以て退く、而かも愈は辱く坐を賜ふて語る、相國の禮過ぎたり。四海九州の人、百官より已下、その業を以て相國の左右に徹せむと欲する者多し、皆憚りて之を敢てする莫し。獨り愈、辱く先つ索めらる、相國の知至れり。賜の大禮の過、知の至、是の三者は、敵以下に於て之を受くるも、宜しく何を以て報ゆべき。况んや天子の宰に在るをや、人自ら知らざる莫し、凡る用に適へば之を才と謂ひ、その事に堪ふれば之を力といふ。愈二者に於て、日に勉むと雖も、而かも近かず。東帶笏を執て、士大夫の行に立つ、却けらるゝに、不肖を以てせされは、幸なり。其れ何ぞ言に、赦せむや。夫れ、赦は凶徳と雖も、必ず恃むありて、敢て行ふ。愈の族親、鮮少にして、板聯の勢、今になく、人に交ることを善くせず、相先し相死するの友、朝になく、宿資蓄貨の以て、聲勢を釣るなく、才に弱くして、力に腐つ、奔走機に乗し、機に抵て、以て權利を要する能はず。夫れ何を待てか、赦せむ。若し夫れ狂惑心を喪へる人、河に陥り、火に入り、妄言して罵詈する者は、之をあらむ。而かも愈、大人の是疾なきを知れり。讒者百人ありと雖も、相國將た之を信せず。愈何を懼れて、慎まむと。又、原毀に謂はすや、事修て、謗興り、徳高くして、毀來る。嗚呼、士の此世に、處り名譽の光、道德の行を望むこと、難きのみと。世間の事、古今を通し、かくの如きのみ。而して、余か私かに、子厚の爲に、惜む者は、その小心細意の極、貶謫

の。福。を。悲。傷。す。る。こ。と。頗。る。切。自。ら。其。身。を。誤。り。た。る。を。悔。恨。し。て。止。ま。ず。他。に。對。し。て。百。方。分。疏。是。れ。を。惟。た。勉。め。天。下。後。世。を。し。て。轉。た。小。人。讒。構。の。言。便。ち。却。て。真。な。り。と。疑。は。し。む。る。に。至。ら。む。か。に。在。る。な。り。

時。の。不。祥。は。わ。が。壯。年。の。俊。才。を。し。て。霜。蹄。一。蹶。再。び。起。つ。能。は。さ。る。に。至。ら。し。め。宿。昔。青。雲。の。志。今。や。挫。折。し。匡。時。帝。王。の。略。之。を。抒。ふ。る。に。由。な。し。然。れ。ど。も。時。世。が。子。厚。の。才。を。出。せ。し。は。之。を。し。て。一。時。に。將。相。た。ら。し。め。む。が。爲。に。非。ず。し。て。深。く。文。章。千。古。の。事。業。に。嚆。望。せ。し。に。あ。ら。む。の。み。今。夫。れ。天。の。將。に。大。任。を。斯。人。に。降。さ。む。と。す。る。や。必。ず。先。づ。ろ。の。心。志。を。苦。し。め。そ。の。筋。骨。を。勞。し。ろ。の。體。膚。を。餓。し。其。身。を。空。乏。に。し。行。く。く。ろ。の。爲。す。所。を。拂。亂。す。と。い。は。す。や。天。南。萬。里。瘴。癘。自。ら。深。く。海。濶。天。長。羈。客。の。感。固。よ。り。堪。へ。ず。雲。搖。雨。散。獨。り。親。朋。一。字。な。さ。の。恨。に。泣。く。べ。か。ら。む。然。れ。ど。も。山。水。毎。ね。に。窮。人。の。爲。に。妍。な。る。あり。况。ん。や。得。意。の。文。辭。は。頻。り。に。之。を。失。意。の。際。に。得。べ。し。と。い。ふ。に。於。て。を。や。嗟。乎。情。な。き。如。く。し。て。而。か。も。心。あ。る。者。は。天。に。非。ず。や。天。は。子。厚。の。文。を。昌。な。ら。し。め。む。と。し。て。故。ら。に。遠。く。之。を。永。州。の。地。に。送。り。下。せ。り。

第五 永州の司馬

永貞八年九月子厚二王の爲に坐し邵州刺史に貶せられしが未だ至らずの十月又永州司馬に貶せられしこと前に述べたるか如し嗚呼才子一たひ去て湘江の畔に漂泊す京華の秋いたつらに寂寥たり依依として銅樓を下り風颺を辭し柴車蹇蹇忽忙程を趁ふも南山拱揖渭水彎環皆人を留むるの意あり上苑の樹色己に宮鴉を換へ疎林美を傲さず風緊にして北雁來り碧雲の天黃花の地鞍馬遲々として行を爲し難く短長の亭驛迢々として離人の涙正に急なりけむを。

南行千里湘水を渡るに及て屈原を吊ふ文ありその辭大に磊落頗る騷體に近く流竄の恨昔人を追思するに於て更に切なりむかしは賈生任に長沙に赴くに際し此地を過き初めて賦を爲りて原を吊ひぬ而して後揚雄あり亦た文を爲り頗る其辭を反し嶠山より諸を江に投し聊か潭底の冤鬼を祀りぬ蓋し賈生は原か忠にして時も不祥に逢ひしを愍み以て鸞鳳周鼎の竄弄せられしに比し雄は義を以て原を責め何る必ずしも身を沈めむやといふ二人の者同しからざるは各その志に従ひしのみ今子厚か貶謫に至りては痛恨哭泣の自ら禁する能はざる之を原に比して相及はすといはす然らば其辭の善くかくの如き毫も怪むに足らず之を讀む者誰か慘怛樂まざる者あらむや而かもこの一篇の文辭は兼ねて子厚か古賦を善く

す。才。ありし。を。證。する。者。なり。

柳 宗 元

後先生蓋千祀兮余再逐而浮湘求先生之汨羅兮寧蘅若以薦芳願荒忽之顧懷兮
陳辭而有光先生之不從世兮惟道是就支離搶攘而遭世孔疚華蟲薦壤兮進御羔袖
叱雞嘲咳兮孤雄束味哇咬嶽觀兮蒙耳大呂重喙以為羞兮焚弁稷黍犴獄之不知避
兮宮庭之不處陷塗藉穢兮榮若繡繡折火烈兮娛娛笑舞詭巧之嘔嘔兮惑以為咸池
便媚鞠忽兮美途西施謂謨言之怪誕號反寘瑱而遠違匿重痼以諱避兮進愈後之不
可為何先生之凜々遠兮屬鍼石而說之但仲尼之去魯曰吾行之遲々柳下惠之直道其
又焉往而可旋今夫世議夫子曰胡隱忽而懷斯惟達人之卓軌其固僻隨之所疑委故都
以從利兮吾知先生之不忍立而視其覆墮尊又非先生之所志窮與達固不渝兮夫唯
服道以下守義先生之佃幅兮滔大故而不貳沈瓊瑤兮執幽而不光筌蕙蔽匿兮胡
久而不芳先生之貌不可得兮猶髣髴其文章託遺編而歎嗒兮渙余涕之盈眶呵星辰
而驅詭怪兮夫孰救於崩亡何揮霍夫雷電兮易為是之荒茫耀姘辭之曠朗兮世果以
是之為狂哀余衷之坎坎兮獨蘊憤而增傷諒先生之不言兮後之人又何望忠誠之人
既內淑兮抑銜忍而不長萃為屈之幾何兮胡獨焚其中膺吾哀今之為仕兮庸有虛時
之否滅食君之祿畏不厚兮悼將位之不昌退而自服以默默兮曰吾言之不行既險風

永 州 の 司 馬

之。下。去。懷。先。生。之。可。忘。

かくの如くして子厚は永州の人となりぬ。その初めて居りし所は龍興寺の西軒に
在り。寺は州中に於て最も高しとなす。其西は大江の流に當り。江の外は山谷林麓甚
た衆し。西廂を鑿て戸となし。戸の外に軒を作れば。以て群木の抄に臨み。曠さるゝ所
なく。席を徒さす。几を運せず。以て大觀を得べし。蓋し子厚は少年家居。其足未だ一歩
を長安郭外に踏出せず。料らすも。貶謫の中に。江山の眼福を領するを得。その筆漸く
靈風と月と。將に價なからむとするに至り。子厚が不朽の文章は。この間に於て。構思
されしなりき。

子厚壯年、已に其妻を亡ひ、未だ其續絃を得ず。世に不幸なる者の一として、數へられ
しが、風樹の悲嘆は、端なくも、此寂寥の境に於て、發せられ、北堂の萱草、今や端なくも
枯れはてぬ。永州に來りし翌歲、元和元年五月、太夫人盧氏が零陵佛寺の客寓に歿せ
しと是なり。壽六十八と云ふ。盧氏は賢夫人なり。七歳にして、毛詩及び劉氏列女傳に
通じ、天性能く内則を講し、其兒に誨へて、頗る見るべき者ありしは、已に前に述べし
が如し。子厚の永州に謫せらるゝや、老羈相隨て俱に在り、常に子厚に謂て曰く、汝、た
ゝ憲度を恭うせず、既に戻を獲たり、今や將に大に後を倣て、以て前惡を蓋はむと、な

七十四

らば敬懼せむのみ苟くも能くかくならば吾何ぞ恨みむと蓋し明者は往事を悼ま
 ずこの母何ぞ其れ賢なるやうの逝いて反らざるや子厚悲痛して措く能はず爲に
 歸附誌を撰み其中に記して曰く窮微に竄せられて人に疾殃多く炎暑熯蒸うの下
 卑濕養ふ所以に非ず診視問ふ所なく藥石求むる所なく禱祀資する所なし蒼黃叫
 呼して終に大爵に遭ふ天か神か其れ是を忍ひむや而して獨り生くる者は誰や
 禍を爲し逆を爲し又頑狼にして死するを得ず月を逾え時を逾え以て今に至る靈
 車遠く去り身獨り止り玄堂暫く開て目見えず孤囚窮執魂逝き心壞る蒼天蒼天か
 くの如きあるかかくの如きあるか而して猶は言ひ猶は食ふ者何如なる人うや已
 みなむ已みなむ天下の聲を窮むるも以て其哀を舒ふること無からむ天下の辭を
 盡すもその酷を傳ふるなしとその自から咎を引いて貶竄養を失ひしを叙すると
 ころ萬斛の血涙あり字々一として哭泣の音ならざるなく眞に人をして百死贖ふ
 莫きの感に堪へざらしむ嗚呼この文を誦して流涕せざるものは彼の李密か陳情
 表を讀て然るものと同じく亦た是れ不孝の人ならむのみかくの如きは之を豺虎
 に投げ呼へて遂に受けざるべきなり不幸は不幸を重ねて子厚は之に次いてなほ
 十歳の庶女子を失へりき

子厚今は全く孤苦零丁の人と爲り了せり是に於てか他の嗜好快事なく公餘間に
 居り事なき時に方りては益す自から刻苦し肥覽を務め詞章を作り汎濫停蓄涯涘
 なきに至り遠く先秦の文に溯りて毫も苟くもする所なかりき今夫れ人窮すれハ
 其辭達す愉逸の趣の巧なり難く困厄の境の妙に臻る一にこの故のみかの錦繡の
 辭句金玉の文字を列ねて自ら悦ぶもの未だ必ずしも到り且つ盡せるものに非ず
 苟くも文學といふその外形は内容を相待たざるべからず然らざる者紙花に非ず
 ひは架語のみ更ならず野ならず文質彬彬として始めて能く之を後世に傳ふべき
 なり子厚の前に禮部に在りしときやその作る所稱道すべきもの固より多からず
 而して今や既に竄逐に罹り繼瘴を涉履し崎嶇厄騷人の鬱悼を蘊む故に情を寫
 し事を叙する動けば必ず文を以てす子厚の文は全くこゝに完成されたるなりき
 その爲るところ贈答序啓の外に騷文十數篇あり一としてその胸中悲悼の語に非
 さるなく人をして悽惻堪ふる能はざらしむ懲咎賦の如き便ち其一なり唐書にこ
 の賦を載せ且つ附記して曰く宗元召さる事を得ず内に悵悼し往咎を悔念し賦を
 作りて自ら警しむと是れ當に然るべし而して蔣之翹は説をなして曰く子厚が才
 たるや實に高し依文が政を擅にするの際に處じうの上たる者は以て術を操り忠

を致すべく所謂君心の非を格すもの固より小臣の事にあらざれば吾も亦た敢て
その人に望まず但た或は血を漉して延諫し或は石を抱いて河に沈むも爲すことあ
るに足らむるの次は時の爲すべからざるを知り飄然として引き去り自ら草野の
間に全うする亦た不可なる者なし而るを乃ち面目を覩せしめ身を奸邪の小人に
失ひ竟に貶謫に座せられて此に至る文を作て自ら懲らさずと雖も尙ほ天地否隔進
退歸なきを以て辭となす甚しいかなその人を欺くやどかくの如きは後世の拘儒
輩が動もすれば子厚に加ふる所痛罵激切の言なり人誰か過ならむ悔は事の終な
り余はすでに子厚の過の深く罪するに足らざるを辨しぬ而して子厚が然かく自
ら責むるに急なるもの其となりや寧ろ眞弊に過きたり故を以て跼天躡地自ら
身を處するに苦しむに至る唯た當さに憐むへきのみこの辭豈に敢て人を欺くも
のならむや之を疑ふ者に至りては其情寧ろ冷酷に過ぐることも無きかろの賦に曰
く

懲咎愆以本始兮孰非余之心所求處書汚以閔世兮固前志之爲尤始余學而觀古兮
怪今昔之異謀惟聰明爲可致兮追駿步而遐遊潔賦之既信直兮仁友藹而萃之日施
陳以繁靡兮邀堯舜與之爲師上睢肝而混茫兮下駁詭而懷私羅列以交貫兮求大中

之所宜曰道有象兮而無其形推變乘時兮志相迎不及則殆兮過失則貞謹守而中兮與
時偕行萬類芸芸兮率由以寧剛柔弛張兮出入綸經登能抑枉兮白黑濁清蹈乎大方兮
物莫能嬰奉許謨以植內兮欣余志之有獲再信乎策書兮謂惘然而不惑愚者果於自用
兮惟懼夫誠之不一不顧慮以周圖兮專此茲道以爲誹譏妬構而不戒兮猶斷斷於所
執哀吾黨之不淑兮遭任遇之卒迫勢危疑而多詐兮逢天地之否隔欲圖退而保己兮
悼乖期乎曩昔欲操術以致忠兮衆呀然而互赫進與退吾無歸兮甘脂潤乎鼎鑊幸臯
鑿之明宥兮纒郡印而南適惟罪大而寵厚兮宜夫里仍乎禍譴既明懼乎天討兮又幽
慄乎鬼責惶惶乎夜寤而晝咳兮類麀鹿之不息凌洞庭之洋洋兮沂湘流之云云飄風
以揚波兮舟摧抑而廻遑日竊噫以味幽兮黜雲涌而上屯暮屑窳以淫雨兮聽敖敖之
哀猿衆鳥萃而啾號兮拂洲渚以連山漂遙遂其距止兮逝莫屬余之形魂橫轡奔以紆
委兮束洵湧之崩濤畔尺進而尋退洄澗洄汨乎淪澌際窮冬而止居兮羈纒夢以縈纏
哀吾生之孔艱兮循凱風之悲詩罪通天而降酷兮不殛死而生爲逾再歲之寒暑兮猶質
質而自持將沈淵而隕命兮詎蔽罪以塞禍惟滅身而無後兮顧前志猶未可進路呀以
劃絕兮退伏匿又不果爲孤囚以終世兮長拘繫而輾軻懸余志之脩蹇遠兮今何爲此
戾也夫豈貪食而盜名兮不混同於世也將顯身以直遂兮衆之所宜蔽也不擇言以危

肆兮固群禍之際也。御長轅之無撓兮。行九折之峩峩。却驚棹以橫江兮。沂凌天之騰波。幸余死之已緩兮。完形軀之既多。荷余齒之有德兮。蹈前烈而不頗。死蠻夷固吾所兮。而雖顯寵其焉加。配大中以為偶兮。諒天命之謂何。

七十八

他に閔生賦あり、その起首にいふ、閔吾生之險阨兮。紛喪志以逢尤。氣沈鬱以杳渺兮。滯浪浪而管流。又、四山賦あり、その意は、便ち謂へらく、身南海に得せられ、久しく山を厭へども得て出づべからず、朝市を懷へども得て復すべからず、丘壑草木の愛すべき者は皆陷穽なりと。着意明かに淮南小山の招隱士、王孫兮歸來、山中不可以久留といふより出づ。他に夢歸賦あり、郷閩を懷思して作れるなり、他の文辭の如きは、一々列舉せず、之を概評するに、管にその文の楚語に反かざるのみならず、その意象の趨向頗る相似たる者あり、余は朱晦菴か之を采りて、その楚辭後語の卷を壓したるの具眼となすべきを信するものなり。

永の州たるや、楚地の南にして、諸越に接し、風土大に中國と同一からず、古より稱す洞庭を過ぎ、湘江を上る、罪ありて左遷せられしものに非ざれば、至ること罕なりと。その地、海を極めて、玄冥の統へさるところ、炎昏にして、疾多し、子厚かつて書を蕭翰林宛に贈りて云はく、蠻夷の中に居ること久しく、炎毒に慣習せり、昏眩重腿、意以て

常となす、忽にして北風晨に起り、薄寒體に中れるに、遇へば、肌革慘惻、毛髮蕭條たり、巖然として注視し、怵惕以て異候となす、意緒中國の人に非ず、楚越の間、聲音特に異なり、鳩舌啗、今之を聽いて、怡然怪まず、已に與に類となりぬ、家生の小童皆自然に曉々として、晝夜耳に滿つ、北人の言を聞くときは、暗呼して走り墜れ、病夫と雖も、亦怛然として之れに眩く、門を出て州閩市井に適く者を見るに、其十に八九は杖して後に興つ者あり、自ら料るに、此に居ること尙は復た幾何をや、豈に戸の止まるを知らずして、長短を言説し、重ねて一世の爲に非笑せらるべげむやと、叙し來りて、痛絶を極むといふべし。

こゝに子厚か、身生を考ふるに、零丁萬里、僅に生を保つに過ぎず、異郷の風土は、弱質の耐ふる所に非ずして、恩赦京に還る日、豫め期し難し、已に結髮の妻を失ひ、家に兒子の祀を承けしむべきものあらず、故土の先塋、拂はさること幾年、その情の深きを以てして、自ら顧み、殆んど堪へざるに至る、その許孟容に與ふる書中、備さにこの事を述べ、初めに祀の絶へむを悲て、曰く、姓を得しより、このかた二千五百年代に、冢嗣たり、今又非常の罪を抱いて、夷獠の郷に居り、卑濕昏霧、一日溝壑に填委して、先緒を曠墜せむことをおろる、是を以て坦然痛恨、心腸沸熱す、筆筆として孤立し、未だ子息

七十九

柳 柳 宗 元

あらず。荒陬の中、士人の女子、少く、眞に婚を爲すなし。世も亦た肯て罪人と親昵せず。此、嗣續の重きを以て、絶えざる。縷の如し。春秋の時、饗に當る毎に、子立捧奠、願明するに、後の繼く者なく、惴惴然として、秋、獻、懼、惕、し。此事の便ち已まむを恐れ、心を描き、骨を傷めて、鋒刃を受くるか如し。而して更に先人の遺物の墜棄して、收むべからざるに至りしを傷み、更に語を續ていへらく、先墓城南に在り、異子弟の士たるなく、獨り村鄰に託す。龍逐せられてより、此かた、消息存亡、一たびも郷閭に至らず。主守の者、固に以て益す、怠らむ。晝夜哀憤して、便ち松柏を毀傷し、芻牧禁せず。以て大戾を成さむを懼る。近世の禮、拜掃を重んず。今已に闕くる者、四年、寒食に遇ふ毎に、北に向て、長號し、首を以て地に頓す。想ふに、田野、道路、士女、遍滿。卓隸、傭丐、たも皆、父母の丘墓に上るを得。馬醫、夏畦の鬼も、子孫の追養を受けざるもの無けむ。然して、此れ已に望を息む。又何を以てか。云はむや。城西に數頃、の田あり、樹果數百樹、多くは先人手自ら封植せし者。今や已に荒穢し、恐らくは便ち斬伐して復た愛惜する無からむ。家に賜書三千卷あり、尙は善和里の舊宅に在り。宅、今三度主を易ふ。書の存亡知るへからず。皆付受の重きと、常に心腑に繫くと、語漸く悲咽して、卒讀に堪へず。乃ち急に筆を轉して曰く、身を立つると、一たび敗れて、萬事瓦裂、身殘はれ、家破れ、世の大變など

永 州 の 司 馬

る。復た何ぞ敢て更に大君子か、撫慰、收恤、尙は人類中に置くを望まむや。是を以て、食に當ては、辛酸の節、適を知らず。洗沐盥漱、動もすれば、歳時を逾え、一たび皮膚を搔けば、塵垢爪に滿つ。賊に憂、恐、悲、傷、告げ、懇ふる所なくして、以て、此に至れるなり。と、悲愴、嗚咽の旨、此に極れりといふへくろの辭氣の、瓊、詭、跌宕、なる之を、譬ふれば、胡笳空に、驟り塞曲耳に到るが如く、人をして腸断たしめざるは、あらざるなり。

子厚は是に於てか、必ずしも汚名を洗除して、高官に登るとを望まず。唯だ一日も、堪ふる能はざる今の境地を脱せむを願ふに過ぎず。その志や、憐むべし。乃ち曰く、古より賢人、才士、志に乗り、分に違ひ、謗議を破り、自ら明にする能はざるもの、僅に百を以て、數ふ。故に兄なくして、嫂を盗むといはれ、孤女を娶て、婦翁を搦つと云はれしものあり。然れども、當世の豪傑に頼り、分明辨別して、卒に史籍に光れり。管仲は盜に遇ひ、舛けて功臣たらしめ、匡章は不孝の名を被て、孟子其を禮しぬ。今や已に古人の實なくして、其語あり。世人の己を明にせむを欲望するも、得べからざるなり。直不疑は金を買つて、以つて同舍に償ひ、劉寛は車を下て牛を郷人に歸したり。これ、誠に疑似の辯すべからず。口舌の能く勝つ所にあらざるを、知ればなり。鄭詹は晋に束縛せられ、終に以つて死することなく、鐘儀は南音にして、卒に國に反るを獲たり。叔向は、囚虜

にして自ら必ず免れむを期し、范座は危に騎し生を以て死に易へ、蒯通は鼎耳に據て齊の上客となり、張蒼韓信は斧鑕に伏して終に將相を取り、鄒陽は獄中書を以て自ら活き、賈生は斥逐せられて復た宣室に召され、倪寛は撲死せられむとし後に御史大夫に至り、董仲舒劉向は獄に下され、陳に當て漢の儒宗となりぬ、これ皆瑣偉博辯奇壯の士能く自ら解脫せり、今や惟怯漢、滔下才未伎を以て又恐懼痼病に嬰る、慷慨臂を擡けて自ら昔人に同じからむとするは、愈よ疎濶なりと、而してろの許孟容に與ふる書の終に、敢て歸て壁城を掃ひ返て先人の塵に託し、以て餘齡を盡さむことを望ますと、雖も始らく少しく北するを遂げ、益す瘴癘を軽くし、婚娶を就し、胤嗣を求め、付託すべきあらば、即ち冥然とじて長く辭するも、甘寝を得るか、如く復た恨む無からむといひしか如き、又楊憑に與へて、天若し先君の徳を拜てすむは、世嗣あらしめよ、或は猶ほ望むらくは、壽命を延へて、以て大宥に及ひ、鄉閭に歸て家室を立つるを得ば、子たる道は畢らむ、是を過さて、猶ほ寵利に競は、天之を厭て、天之を厭て、むといひしか如き、將た蕭儷に囑するに、汲引の惠を以てし、一たひ廢錮を釋して、數縣の地に移らば、世必ず罪や、解けたりと、曰は、ひ然る、後魂魄を収召し、土一塵を買ひ、耕畝を爲し、朝夕歌謡して、文章を成さしめば、庶幾くは木鐸たむら者、採取し

柳 宗 元

永 州 の 司 馬

て之を法宮に獻じ、聖唐大雅の什を増さむ位を得すと、雖も亦た虚しく、太平の人と爲らず、といひしが如き、其望むところ大ならざるを知るべく、遂に故舊の憐むものおらず、憐むべし、才人の身生頓挫し盡し、年未だ四十に及ばずして、其人己に老いたり、是に於てか、轉た子厚が、宗元衆黨人中に於て、罪狀最も甚しと、自道せるものをし、て、真ならしめむとす、故に假令ひ、賀者對に見えしか如く、その心を儻蕩にし、その形を猖佻にし、茫乎として、高に昇りて、以て望むが如く、潢乎として、海に乘して、往く所なきが如くならしめ、以てその貌をして、泔々然らしむるも、亦た唯た、嘻笑の怒は、晉を裂くより甚しく、長歌の哀は、慟哭より過ぐる者、に外ならず、その作る所、字句盡く、血涙を黥し、人をして、破涕せしむる者、亦た宜なり、而かも、後年再たひ、京華の地を踏むを得たるは、窮荒の中、死を萬一に、僥倖せしか爲に、然る者、亦た幸となすべかりしのみ、蓋し、天は子厚の文の成るを、待ちて、未だ直ちに、玉樓の選に、上はさしりしなり。

子厚己に身を窮賈に没し、出身己に誤り、當代に用なきを自覺したりきと、雖も、その才の敏は依然として、消衰せず、却て、竊に百代の名を期せむと欲せし者ありしか、如し、その賢者志を、今に得ざれば、必ず、貴を後世に取る、古の書を著はすもの、皆是なり。

宗元近ころ此を務めむと欲すと自白せしが如き明かに以て證となすべきなり。今夫れ人は安逸に惰り危苦に勤め志は寡欲に立ちて多念に廢す故に困厄は常に知命の端をなすべく不遇は長く發憤の地とならむのみ尋常行路の人猶ほ且つ或は然る者あり况んや篤傑俊異子厚の才の學ある者に於てや。彼は今や正にその天職を悟れり。その人に與へて自己の才の爲すに足らざるを傷み或は力薄く才劣り異なる能解なく筆を乗て觀樓すと雖も神志荒耗し前後を遺忘して終に章を成すこと能はず。往時書を讀むや自ら以へらく抵滯に至らずと。今皆頑然として復た省餘なる無し。古人の一傳を讀む毎に數紙以後には再三伸卷して復た姓氏を觀旋て又廢失す。例令ひ萬一刑部の囚籍を除いて復た士列となるも亦た當世の用に堪へずといひ或は宗元の若き者は才力缺敗して遠颯高厲諸生と九霄を摩し四海を撫し後の人に夸耀する能はず。何となれば凡そ文を爲るは神志を以て主と爲す。蒲婦に遭ひしより繼くに大故を以てし荒亂耗竭又常に憂恐を積て神志少く讀む所の書隨て又遺忘す。一二年來痞氣尤も甚しく衆疾を以てし動作能くせず。眊々然として騷擾し内は竊霧を生し填擁慘怛文章を窮むるに意ありと雖も而かも病その志を奪ふといひしか如きあれども要するに唯た謙辭のみ。子厚の文當時已に全く成

柳 宗 元

れり。さといふも不可なきのみ。

然れども子厚の文は永州山水の靈に由りて初めて成りし者なり。若し夫れ永州諸寺の眺矚に至りては皆記する所ありと雖も要するにその境地たるや必ずしも餘裕たる者に非ず。永州の幽境にして子厚の初めて得たる者を愚溪となす。文に愚溪詩序あり。愚溪對あり。今左に愚溪詩序を載せ何故にしか名つけしかを尋ね兼ねてこの風物の一斑を傾知するに便せむ。

灑水之陽有溪焉。東流入瀟水。于或曰再氏嘗居。故姓是溪爲再溪。或曰可以染也。名之以其能。故謂之染溪。余以愚觸罪。瀟水上愛是溪。入二三里。得其尤絕家焉。古有愚公谷。今予家是溪。而名莫定。士之居者猶斷斷然。不可以不更也。故更之爲愚溪。愚溪之上買小丘爲愚丘。自愚丘東北行六十步。得泉。又買居之爲愚泉。愚泉凡六穴。皆出山下平地。蓋上出也。合流屈曲而南爲愚溝。遂負土累石。塞其溢。爲愚池。愚池之東爲堂。其南爲愚亭。池之中愚島。嘉木異石錯置。皆山水之奇者。以余故。咸以愚辱焉。夫水智者樂也。今日溪獨見辱於愚。何哉。蓋其流甚下。不可以溉灌。又峻急多抵石。大舟不可入也。幽邃澗狹。蛟龍不居。不能興靈雨。無以利世。適類於余。然則雖辱而愚之可也。暨武子邦無道。則愚智而爲者也。顏子修身不遠如愚。睿而爲愚者也。皆不將爲真愚。今余遭有道而違於

永 州 の 司 馬

理特於是故凡爲者莫我若也夫然則天下莫能爭是溪余得專而名焉溪雖莫利於世而善鑿萬類清瑩秀澈鑿鳴金石能使愚者喜笑眷慕樂而不能去余雖不合俗亦頗以文墨自慰漱漱萬物牢飛百態而無所避之以愚辭歌愚溪則茫然而不違昏然而自時

愚溪對は溪神夢に入り是を辱しめしを怒るに對へしなりその思や深その調や逸筆致瀟洒但し篇幅長きを以て載せず又詩あり

少時陳力希公侯許國不復爲身謀風流一跌逝萬里壯心瓦解空縲囚縲囚終老無餘事願卜湘西再溪地却學壽張樂敬侯種漆南園待成器

ひかし後漢の樊重かつて器物を作らむと欲し先づ梓漆を植ゑ時人之を嗤ふ然れども積むに歲月を以てし皆その用を得たり愚溪の亭榭は實に子厚の身を容れて時に終老の計を爲さしむむと爲したるをかの吾不智にして罪に觸れ榭の間に構せらるゝこと六年室を築き草を剥き園を湘の西に爲り池を穿て以て瀟すべく黍を種ゑて以て酒とすべく終に永州の民たるを甘んずといへるに合せ考へ以てその然るを推知すべし而して愚溪の勝地は高人の寄傲を許せしこと十年にして其跡荒廢し終に尋ねべからざるに至りき劉禹錫の詩之を明かにす今便を

以てこゝに附記せむか詩凡と三首その序に曰く故人柳子厚の永州に謫せらるゝや勝地を得たり茅を結び露を樹ゑ沼沚を爲り臺榭を爲り目して愚溪といふ柳子没して三年僧あり零陵に遊び余に告げて曰く愚溪復た曩時なしと一たひ僧の言を聞て悲自ら勝ゆる能はず遂に聞くところを以て七言と爲り以て恨を寄すと其詩は乃ち曰く

溪水悠悠春自來草堂無主燕飛回隔簾惟見庭中草一樹山榴依舊開
草聖幾行留壞壁木奴子樹隣家唯見里門通德勝殘陽寂寞出樵車
柳門竹巷依々在野草青苔日々多縱在隣人解吹笛山陽舊侶更誰過

この詩専ら荒蕪の状を寫するものなりと雖も余は猶ほ之に依りてその境地の大概を髣髴の裡に冥想せしむはあらず而して永州の山水は愚溪を門戸として幽深清寥の景に乏からず子厚は杖履善く之を跋涉し盡せしが如し

永州州治の在るところは即ち古の零陵なり四境を環らすに群山を以てし延くは林麓を以てし游觀の佳麗殆んど言ふべからず而して殊に佳なるは主として西境に在り湘江を過ぎ再溪に縁て正西に向ひ登陟一路便ち西山の頂に達し下に瀟江を見る瀟湘二水は實にこの山の兩側を流れ後に湘口館にいたりて會流す西山の

八十八
 冠頂眺觀軒曠子厚自から遊是に於てか始まるといふ猶西すれば鉅錫潭あり再溪の源南より來りて曲折逆旋する所たり又小丘あり小石潭ありこの一條路の間に勝地四處子厚元和四年を以て此に遊ひ皆記あり今其二を録す。

始得西山宴遊記

自余爲僇人居是州恒惴惴其慄也則旋施而行漫漫而遊日與其徒上高山入深林窮迴溪幽泉怪石無遠不到到則披艸而座傾壺而醉醉更相枕以臥而夢意有所極夢亦同趣覺而起起而歸以爲凡是州之山水有異態者皆我有也而未始知西山之怪特今年九月廿八日因座法華西亭望西山始指異之遂命僕人過湘江緣冉溪斫榛莽焚茅窮山之高而上攀援而登箕踞而遊則凡數州之土壤皆在衽席之下其高下之勢既然窪然若垤若穴尺寸千里攢蹙累積莫得遯隱縈青繚白外與天際四望如一然後知是山之特出與培塿爲類悠悠乎與灑氣俱而莫得其涯洋洋乎與造物者遊而不知其所窮引觴滿酌頽然就醉不知日之入蒼然暮色自遠而至至無所見而猶不欲歸心凝形釋與萬化冥合然後知吾嚮之未始游游於是乎始故爲之文以志是歲元和四年也

至小丘西小石潭記

從小丘西行百二十步隔篁竹開水聲如鳴佩環心樂之伐竹取道下見小潭水尤清冽

全石以爲底近岸卷石底以出爲坻爲嶼爲巖青樹翠蔓絡繹緜緜參差披拂潭中魚可百許頭皆若空遊無所依日光下澈影布石上怡然不動俶爾遠逝往來翕忽似與遊者相樂潭西南而望斗折蛇行明滅可見其岸勢犬牙差互不可知其源坐潭上四面竹樹環合寂寥無人凄神寒骨悄愴幽邃以其境過清不可久居乃記之而去同遊吳武陵驥古余弟宗玄隸而從者崔氏二小童曰恕己曰奉壹

西山の後面瀟江の漣に朝陽巖あり巖に洞洞あり出流して湘江に入る又香流洞磬石あり大曆元年隱士元結偶ま來り舟を巖下に維き其高くして東に向ふを以て遂に朝陽と名つけきといふ朝陽巖の東南より水行すれば袁家渴にいたり渴より百歩ならずして石渠を得石渠すでに窮て石澗となる一路三勝之を探るに元和七年十月を以てす前游に後ること三年境は永中の幽麗を極めしもの石澗の如きはしばしば優遊して放懷消憂せし地なるに似たりこの間三記ありなほ他に小石城山あり殘山剩水見るに足らずといはず左に其文二首を抄す。

袁家渴記

由冉溪西南水行十里山水之可取者五莫若鉅錫潭由溪口而西陸行而可取者八九莫若西山由朝陽巖東南水行至瀟江可取袁三莫若者家渴皆永中幽麗其處也楚越

之間方言謂水之反流者爲渴音若衣襦之襦渴上與南館高緯合下與百家澗合其中
重洲小溪淡潭淺澗則曲折平者深黑峻者沙白舟行若翽忽又無際有小山出水
山皆美石上生青蕨冬夏常蔚然其傍多巖洞其下多白礫樹多楓栝石楠檉樟柚草
則陶然又有異卉類合歡而莖生櫻韮水石每風自四山而下振動大木掩其衆草紛紅
駭綠翳勃香氣衝濤旋潮退貯溪谷搖颺葳蕤與時推移其大都如此余無以窮其狀永
之人未嘗遊焉余得之不敢專也出而傳於世其地世主袁氏故以名

小石城山記

自西山道口徑北踰黃茅嶺而下有二道其一西出尋之無所得其一少北而東不過四
十丈上斷而川分有積石橫當其根其上爲睥睨梁榭之形其旁出堡塢有若門焉窺之
正黑投以小石洞然有水聲其響之激越良久乃已環之可望甚遠無土壤而生嘉樹
美箭益奇而堅其疏數偃仰類智者所施設也噫吾疑造物者之有無久矣及是念以爲
賊有又怪其不爲之於中州而列是夷狄更千百年不得一售其伎是固勞而無用神者
儻不宜如是則其果無乎或曰以慰夫賢而辱於此者或曰其氣之靈不爲偉人而獨爲
是物故楚之南少人而多石是二者余未信之

西邊の山水、觀るべきもの探尋殆んど餘す所なし而して東境の勝に至りては唯た

一の黃溪あるのみ山水夾合聊か賞するに足るものありと稱せらる思ふに泉流巖
脈、じしる疎大にして幽邃の趣を欠き以て然かく少きに非ざるか子厚は元和八年
を以て此に遊ひ乃ち亦た記あり

北之晋西適幽東極吳至楚越之交其間名山水而州者以百數永最善環永之治百里
北至于浯溪西至于湘之源南至于瀧泉東至黃溪東屯其間名山水而村者以百數黃
溪最善黃溪距州治七十里由東屯南行六百步至黃神祠祠之上兩山牆立丹碧之華
葉駢植與山舛降其缺者爲崖峭巖窟水之中皆小石平布黃神之上揭水八十步至初
潭最奇麗殆不可狀其略若剖大瓿側立千尺溪水積焉黛蓄膏滄來若白虹沈沈無聲
有魚數尾方來會石下南去又行百步至第二潭石皆巍然臨峻流若頰頰斷其下大
石雜列可坐飲食有鳥赤首鳥翼大如鵠方東嚮立自是又南數里地皆一狀樹益壯石
益瘦水鳴皆鏘然又南一里至大冥之川山舒水緩有土田始黃神爲人時居其地傳者
曰黃神王姓華之世也葬既死更號黃氏逃來擇其深峭者潛焉始葬嘗曰余黃虞之後
也故號其女曰黃皇室主黃與王聲相邇而又有本其所以傳言者益顯神既居是民咸
安焉以爲有道死乃俎豆之爲立祠後稍徙近乎民今祠在山陰溪水上元和八年五月
十六日既歸爲記以啓後之好遊者

永州九記の文は、かくの如くして成りぬ。

柳 宗 元

茅鹿門曰く予、按ずるに子厚が謫せられし所、永州柳州、大較五嶺より以南は、名山削壁、清泉怪石多し、而して子厚適ま文章の雋傑を以て、茲土に客たる者、之に久し、愚竊かに謂へらく、公と山川と、雨つなから相遭ふなりと、子厚が困且つ久じきに非されば、以て巖穴の奇を搜る能はず、巖穴の怪且つ幽なるに非されば、亦以て子厚の文を發するなからむ。予、問ころ、粵中を過ぎ、情を山水の間に恣にし、始めて子厚の手を欺かざるを信す、而して且つ恨む、永柳以外、他の勝概猶は多く、永柳に於て相顔面し、且つ之に過ぎたる者あり、而して卒に傳ふるなし、抑も見つへし、天地の内、特に才を遺して、試むるを得ざるのみならず、當に併せて、名山絶壑にして、自ら其奇を騷人墨客の文に炫するを得ざるものあること、蓋しこゝには、永柳二州を並舉すれども、子厚が柳州の景致を叙せしは、唯た一二文あるのみなれば、是は専ら永州の爲に發せしものと見て可なるへく、以て永州九記の總贊に充つべきなり、猶はこの九記の文學的價值に至りては、後章細述するところあるべきなり。

かくの如くして、子厚は専ら山水間に放浪せしと雖も、實はその孤懷窮愁を散せむが爲に然りしのみ、但し風物の悲涼、飾物の遷改に遭へば、忽然として我に反り、宛どして、風雨陰寒の夕、創痕の痛みて、眠り能はざるに似たる者ありしや、必せり、是に於て、か、黄溪の秋月皓々たる夜、猿啼の苦なるを聽けば、坐るに、巴峽三聲の恨なき能はず。

永 州 の 司 馬

溪路千里、曲哀猿、何處、孤臣、淚已盡、虛作斷腸聲。
南、洞、秋、深、日、明、靚、なる、佳、景、に、對、して、吟、哦、す、れ、ば、乍、ち、中、間、に、於、て、去、國、魂、已、遠、懷、人、淚、空、垂、孤、生、易、爲、感、失、路、少、所、宜、索、寞、竟、何、事、徘徊、自、知、の、數、句、を、着、け、竟、に、李、翰、林、建、に、與、ふる、書、中、に、は、永、州、は、楚、に、於、て、最、南、たり、狀、越、と、相、類、せ、り、侯、悶、す、れ、ば、即、ち、出、で、い、游、ぶ、游、ぶ、と、き、復、た、悲、多、し、野、を、涉、れ、ば、峻、岵、大、峰、あり、空、を、仰、き、地、を、視、て、寸、步、勞、倦、水、に、近、け、ば、即、ち、朕、工、沙、蟲、を、畏、れ、含、怒、竊、か、に、人、の、形、影、に、中、て、動、も、す、れ、ば、瘡、痛、を、成、す、時、に、幽、樹、好、石、に、到、て、暫、く、一、笑、を、得、る、も、已、に、復、た、樂、ま、ず、何、と、な、れ、ば、醫、ふ、る、に、圖、士、に、囚、拘、せ、ら、れ、一、た、ひ、和、景、に、遭、ひ、牆、を、負、ふ、て、搔、摩、し、支、體、を、伸、展、す、る、か、如、き、な、り、こ、の、時、に、當、て、は、亦、た、以、て、適、と、な、す、然、れ、ど、も、地、を、顧、み、天、を、窺、ふ、こ、と、尋、尺、に、過、さ、す、して、終、に、出、づ、る、を、得、ず、豈、に、復、た、能、く、久、し、く、舒、暢、す、る、を、爲、さ、む、や、と、い、ふ、に、至、る、讀、者、そ、の、言、の、同、し、か、ら、さ、る、を、怪、し、む、勿、れ、凡、そ、飾、物、風、光、の、美、能、く、人、を、慰、籍、す、と、雖、も、窮、人、に、在、り、て、は、却、て、爲、に、恨、を、増、す、こ、と、な、さ、に、非、ず、愉、和、の、春、景、に、對、す、と、雖、も、却、て

柳

自己の境遇と相反するの甚しきに驚けば、その悲痛却て慘憺の秋光に接する時に比して、勝るものあらむとす。嗟呼、悲は遂に之を消遣する所なし。永州の山水固より子厚をして浮世を忘れしむるに及ばざりしとはいへ、その子厚の文氣を助けしに至りては余輩も疑を其間に挟むことを爲さざるなり。

然れども、この間に於て善く子厚の心を慰めし者は、故人の來訪のみ、就中吳武陵は子厚か賤賤に後るゝこと四年にして、均しくこの永州に竄せられたり。武陵は子厚と與に交善かりしもの、同病相憐むの情是に於てか切元んや、萬重の客途に邂逅せしかや。子厚に初秋夜坐、吳武陵に贈る詩あり。

稍稍雨侵竹、翻翻鷓鴣聲。美人隔湘浦、一夕生秋風。積霧香難極、滄波浩無窮。相思豈云遠、即席莫與同。若人抱奇音、朱絃絕枯桐。清商激西瀨、泛鮑凌長空。自得本無作、天成諒非功。希聲闕大璞、雙俗何由聰。

日夕追隨せし者、頃ろ來り相見え、思遠に非ざるも、感何ぞ堪へむ。今夫れ秋風孤月を吹いて、露華砌草に滋き、夜米絃を一彈するも、岷山、洋水、の知音なきを、奈何む友を懷ふ窮處に於て、始めて真情を見ると謂ふべきのみ。

元和七年夏より以來、永州の地、火災多く、日夜數十發、少きも尙ほ五六發、概ね三月に

元 宗

永 州

至りぬ。八年の夏にいたりて、又かくの如く、人咸な安處なく、老弱燔死し、晨に興せず、夜燭せず、皆列座して左右に視罷れても、休むことを得ず。蓋し畢方の災を爲せしものといふ。是に於てか、子厚畢方を追ふ文あり、災乃ち罷みぬ。繼いて同年八月廿八日、湘源二妃の廟に災あり、司功、椽守、劉和剛、主簿、衛之武、州の中刺史、中丞、崔能に告げ之を再建し、子厚爲に廟碑を作りぬ。

又、段太尉逸事狀一篇を作り、之を史官韓愈に送致したり。かの人口に噂炙する史官を論する書も、亦た殆んど同時の作たるか如し。蓋し韓愈は、先に陽山令に貶せられしが、永貞八年、江陵法曹參軍に改められ、元和の初、國子博士に權知して、東都に分司となり、三歳にして、眞となりぬ。後、都官員外郎に改められ、河南令に拜せられしか、職方員外郎に遷り、幾もなくして、華陽令、柳綱の事に坐して、復た博士となり、子厚に比して更に浮沈定なき官途の閱歴を爲したりき。而して偶々進學解を作りて、自ら論せしが、執政武元衡等の奇とする所となり、比部郎中、史館編撰に改められぬ。仍て順宗實錄の撰あり、子厚か與へし書は、史官の本職を論し、愈か迷信的妄想到によりて、禍を恐るゝの愚を責めし者なり。而して順宗實錄の撰たるや、實際に於て見るべき者少く、繁簡當らず、事を叙して取捨に拙く、遂にその平生の手筆に似ざるの感あり。余は

島 司 の

なほ後章に論ずべき他の例證よりして所謂史學の一點に於ては子厚が退之に比して寧ろ勝る所あるを斷言して憚らざるなり。

子厚が永州に於ける十年謫居の期は今や將に其終を告げむとす其間に作る所の文辭之を概括すれば唯だ離愁の二字のみひかし三閩の大夫が放逐せられて澤畔に行吟するや顔色憔悴形容枯槁猶ほ且つ傷思妙想を荒幻幽冥の域に馳せ靈修美人に托し有戎の佚女を求め洛濱の宓妃を問ひ離騷の文字仍ほ一段逼らざるの餘地を性情の裏に存すと稱す而かも班孟堅はるの怨悱傷亂を病とし揚才露已の過ぐるを刺りし言あり今子厚が永州作る所の文を觀るに愛憤自ら抑遏する能はず意も餘裕を其間に見るなくして暗血流涕の痕千古濕ふて乾かず是に於てか魯寬夫は言をなして曰く子厚の貶せらるゝやその愛愁憔悴の歎詩に發するもの特に酸楚なり已を閔れみ志を傷むは固より君子の免れざる所なれども亦た何ぞ是に至らむや卒に憤を以て死する如きは未だ理に達せりとなさいるなりと寬夫はこの言の子厚を是非する能はざるは猶ほ孟堅の論を以て靈均を増損する能はざると一般凡る事を論する偏すべからず倚すべからず必ずや其正面を詳審すると同時に亦たその裏心を裏面に忖度せざるべからず故に孟堅の論識に由りて靈均

の性情愈顯はるゝと同じく寬夫の一言に由りて子厚が永州の悲況益見るべし子厚が理に達すといはるゝは即ち情に深きが故のみ嗟乎人情をして深きに過さしむる勿れ千古の牢愁唯だ涙痕の多きに堪へざらむのみ。

第六 京師の例召及劉禹錫との關係

元和十年子厚歳四十三例し召されて詠州より京師にいたる正に是れ江海茫茫として韶光將に過ねかむとする候天書遠く此滄浪の孤客を徵して來る其喜や知るべきなり春風得意四馬馳々として紅三百里一鞭の花雨桃杏の路徑を馳す十餘年間の謫居に半は睡したる兩鬢は再び緑を染めしものなかりきとせむや發するに臨み朗州の刺史竇常劉禹錫の詩を寄せて行騎を促す子厚乃ち之に酬ゆる詩あり

投荒垂一紀新詔下荆扉疑此莊周夢情如蘇武歸賜環留逸轡五馬助征驂不羨衡陽雁春來前後飛

諸公相送りて驛に至り離觴に醉はず永州の山水之を遺し去るに忍びざるに由るか將た留任多年却て故郷の想を爲して然るか何ぞろの感懷の切にして而かも料るべからざるや

無限居人送獨醒。可憐寂寞到長亭。荆州不遇高陽侶。一夜春寒滿下廳。
長沙の南畔。汨羅の江上。偶々風に遇ふ。然れども之を昔日流滴の恨に。湘水に哭したるに比すれば。昨は非にして。今は是なり。願母變を起し。馮夷暴を作すも。亦た何ぞ懼るゝに足らむ。

南來不作楚臣悲。重入修門有自期。爲報春風汨羅道。莫將波浪在明時。
途上廻て零陵の親故に寄せて曰く、

每憶鱗鱗遊尺澤。翻愁弱羽上丹霄。岸傍古塚應無數。次第行看別路遙。
衡山を過ぎて。新花の開くを見る。夷獠の風物に慣れたる眼を。一新し。帝里の春光漸く。關ならむとすを思ふ。

故國名園久別離。今朝楚樹發南枝。晴天歸路好相逐。正是峯前迴雁時。

路鄂州に入り。漢陽の北原に登り。時を臨川驛に題して。へらく、

驅車方向闕。迴首一臨川。多壘非余耻。無謀終自憐。亂松知野寺。餘雪記山田。惆悵樵漁事。今還又茫然。

界園巖の水簾を觀て。五言短古一篇あり。

界園酒湘曲。青壁環澄流。懸泉聚成窟。羅注無時休。韻響叩凝碧。綉鏘徹巖幽。丹霞冠其

巖想像。凌虛遊。靈境不可狀。鬼工諒難求。忽如朝玉皇。天冕垂前旒。楚臣昔南逐。有意仍舟丘。今我始北旋。新詔釋縲囚。采真誠眷戀。許國無淹留。再來寄幽夢。遺貯催行舟。
この行。劉錫と偕にし。善護驛にいたりて。淳于髡の墓に醉す。錫先づ吟あり。
生爲齊贅婿。死作楚先賢。應以客卿葬。故臨官道邊。寓居本多興。放意能合權。我有一石酒。置君墳樹前。

子厚之和して曰く、

水上鷓已去。亭中鳥又鳴。辭因使楚重。名爲救齊成。荒隴遠千古。羽觴難再傾。劉伶今日意。異代是同聲。

爾汝相許。甲酬乙和。興を爲せしこと。想ふべきのみ。その將に都に入らむとするや。湖亭の上に至りて。一絶あり。

十一年前南渡客。四千里外北歸人。詔書許遂陽。和至驛。路開花處處。新

烟柳二月皇都。都に滿ちて。上林の宮花。錦に似たり。絶代の才人。賤議と赦されて。五色の風。詔丹墀に下るを待つ。この種の詩ある固より。怪しむに足らず。この間誰か。又春風相待たず。望徒らに欺き。事遂に我に好からず。再び炎微の地に。放蹄せらるゝを期せむや。

るも劉柳一輩所謂永貞の黨人の罪を赦して召還されし者元と宰相其才を憐むものありしに由る子厚たるもの此に至りて宜しく清官を得て再び廟廊の上に翺翔すべかりしなり而して事の全く相反するに至りしは禹錫の一詩禍を爲せしに因る余はこゝに禹錫の略傳を並記するを得む。

劉禹錫字は夢得彭城の人なり祖雲父渝州縣の令佐に歴仕し世々儒術を以て稱せらる禹錫貞元九年を以て進士の第に擢てられ又宏辭科に登れり禹錫古文に精しく五言の詩を善くし今體の文章復た才麗多し初め淮南節度使杜佑の幕典記室に従事し尤も禮異を加へられしが佑に従て入朝し監察御史となり吏部郎中章執誼と相善かりき貞元の末王叔文の事を用ふるに方り禹錫尤も叔文の知獎を受け宰相の器を以て遇せられ其圖議する所用ひられざるはなく屯田員外判度支鹽鐵案に轉し崇陵使判官を兼ね頗る威權を估みて端士を中傷せしと傳へらる侍御史竇群奏して禹錫邪を狭み政を亂り宜しく朝に在るべからすといふ是に於てか群は即日官を罷りられきその權ありしことかくの如し而して叔文の敗るゝに方りてや坐して連州刺史に貶られしが道に在りて朗州引馬に貶せられぬ朗州の地たるや西南夷の境に近く土風僻陋舉目殊俗與に言ふべきな者し禹錫こゝに在りしと

柳 宗 元

京師の例及劉禹錫の關係

十年唯だ文章吟咏を以て情性を陶冶したりその作るところ竹枝詞の如き武陵溪河の間に傳誦せられきといふ禹錫と子厚と略は其閱歷を同くし共に文章の才ありと雖も其性は頗る相反して禹錫の倨傲自ら高くせしは遂に子厚に於て見るを得ざりし所なり初め劉柳等八人の衆怒を犯すや憲宗亦た怒り故に再貶されしなりき制に逢恩不原の令あり而して執政其才を惜て痕累を洗滌し漸序して之を用ひむと欲し八司馬の一人たりし程昇か復た轉運を掌るに會し詔あり韓泰及禹錫等をして遠郡の刺史たらしめ武元衡に屬して中書にあらしめむとせしが諫官十餘人が列官復た用ふべからざるを論するに由りて止みぬ禹錫積歲湘澄の間にあり鬱悒いよく怡はずかつて張九齡の文集を讀むに因り乃ち其意を叙して曰く世に稱す曲江相となり建言して放臣は善地に宜しからず多く五溪不毛の郷に徙らしむと今ろの文章を讀むに内職收始めて安きより瘴癘の歎あり自ら退いて刑州を守るや拘囚の思あり諷を禽鳥に託し辭を草樹に寄せ鬱然として騷人と風を同うす嗟夫れ身遐陬より出て一たひ意を失ふも堪ふる能はず矧んや華人士族にして必ず醜地に致し然る後に快意せむや議者曲江を以て良臣となし胡雛か反相あるを譏り凡器と列を同うするを羞ち密啓廷諫古哲人と雖も及はずといふ而

を爲すを免れず、奈何と、後數日ならずして播州刺史となり、子厚も亦た爲に累せられて柳州刺史となり、八司馬の存する者他に三人、韓泰は漳州刺史となり、韓暉は汀州刺史となり、陳謙は封州刺史となりぬ。

玄都の一絶詩累をなして、禹錫が怒を執政に買ひし者、かくの如し、而して子厚が之が爲に連引して窮地に放たれしは、何の故ぞ、唐史に、その間の消息を傳へざれば、殆んど知るべからずと、雖も前後の關係よりして揣摩すれば、憲宗は叔文に坐貶したる司馬輩を長く斥けて用ひざらむと、時人は又子厚等の才の高きに畏れ、復た進ひに懲りて爲に力を用ふる無かりしに由らすんは、あらず、况んや劉と柳とは、殆んど同心一體の看あり、かつて叔文專權の時に際し、朝廷の秘策を議するに方りては、二人實に與かり聞かざるは、無かりきと傳へられしに於て、おや。

子厚はすでに兩度までも坐廢され、今や世に於て終に一の望みなきなり、一の望なくして、情の深きもの益々願はる、その友の爲に累せられ、毫も怨みす、却てその禍に代らむとしたるが如き、友誼の眞なる千載尙彫炳して、人心を興起せしむるに足るものあり、子厚は他に文章千古の事業なしとするも、た、之あるが爲に、亦た一個の

して、燕翼無似終に、骸鬼となる。豈に、伎心失恕せむや、陰譎最も、大二美と雖も、臆ふ莫からむ。然らずむば、何ぞ、袁公の一言楚獄を明にして、鐘社の四葉、是を以て、相較ふや。と、不平無聊の状、想見すべきなり。故に、その召を厭みて、武陵より京に赴くや、殆んど秋隼翻を撃て、青雲に連るの概あり。都亭に宿しては、續來諸君子を懐ふの詩を賦して、さへらく、

雲雨江湖起、臥龍武陵樵客、臨仙蹤、十年楚水楓林下、今夜初聞長樂鐘。

浩浩たる意氣、天を欺き、分明臥龍を以て、自任す、強頂の性、自ら然るのみ、かくて禹錫は、將に南省郎に補せられむと、したるなりき、而して、至り見れば、滿廷の朝士、悉く新進の後輩にして、曾て乳臭見視したる者、便ち、牛後の嘆あり、心稍平ならず、特に、長安の玄都觀に、一道士あり、手植の仙桃觀に、滿ち盛なること、紅霞の如し、禹錫乃ち詩を賦し、一時の事を記し、花に託し、他を嘲りて、いへらく、

紫陌紅塵拂面來、無人不道看花回、玄都觀裡桃千樹、盡是郎劉去後栽。

この詩一たひ出て、都下に傳ふ、朝士中も、禹錫の名を嫉む者あり、好機逸すべからずと爲し、執政に白して、その怨憤あるを羅織す、執政憚らず、禹錫又略は之を知る、その他日、時宰と與に坐し、慰問甚た厚きに及び、既に辭して曰く、近こる新詩、未だ累

初め禹錫の播州を得るや、子厚慨然泣いて曰く、播州は人の居るべき所に非ず、而して夢得の親堂にあり、吾れ其窮して辭以て大人に白するなきに忍ひず。又如し、往かずんば、便ち母子の永訣たらむのみ、即ち具奏して、柳州を以て夢得に授け、自ら播州に往かむとを請ひ、爲に重ねて罪を得死すと雖も、恨みずといふ。何ぞの氣概と、亮節とに富めるや、時に御史中丞裴度も亦た禹錫の爲に天子に奏して曰く、播は極遠の地、猿狖の宅する所、禹錫か母は八十餘にして、往くと能はず、當に其子と永訣すべく、恐らくは天子の孝を傷けむと、仍てその稍内に遷されむとを請ひぬ。憲宗曰く、人の子たるものは宜しく事を懼み、親に愛を貽さるべし。禹錫の如きは他人と異にして、最も救すべからずと、度對ふる能はず、既にして帝改容して曰く、朕が言ふ處は人の子の事を責むるのみ、終にその親を傷るを欲せずと、乃ち連州に改貶せらるゝに至りき。とも禹錫の改貶は一に裴度の力にして、子厚か奏疏は實際さほどの効果なかりし者の如しといへ、事の成否は其志と相關せず、余はとこまでも子厚か衷情の誠を諒し、韓愈が墓誌銘中に特記せし、絶妙の言辭を三復せむ。曰く、嗚呼士窮すれば、乃ち節義を見る、今夫れ平居里巷、相慕悦し、酒食游戲相徵逐し、翺翺として強いて笑語し、以て相取り下り、手を握り、肺腑を出して相示し、天日を目指し、涕泣生死を誓ひ、相背負せ

すといふ。眞に信すべきが如し、一旦小利害、僅に毛髮の比の如きに、臨むども、反眼して相譲らざるもの、如く、陷穽に落つるも、一たび手を引いて救はず、反て之を擠し、又石を下すもの、皆是なり。これ宜しく禽獸夷狄の爲すに忍ひざるべき所に、其人自ら視て、以て計を得たりと爲す。子厚の風を聞かば、亦た以て少しく愧つべきなり。嗟乎、余は是を以て、子厚の情の篤きを見たりき。

子厚が京を出てしは、同年三月のこととして、都門春將に盡き、驛路の流鶯聲急ならむとする頃なりき。おもふ夕雨霏々として、征衫を濕すの時、涙痕の紅は片々たる落花よりも繁く、思を故園に繫き、遅々として鞭徐かに下りしとありけむ。而して斯行又禹錫と相伴ひ、衡陽に至り、岐に隨て袂を分たむとするや、彼此贈答の什あり。禹錫先づ唱へて曰く、

去國十年同赴石、湘江千里又分岐、重臨事異、實亟相三、馳名慚柳士、師歸目併隨、回雁盡愁腸、正過斷猿移、桂江東過連山下、相望長吟有所思。

一讀乃ち見る、偏強の一漢子、文字奇禍を買ひ、纒に召されて、輒ち物議を招きたるも、秋毫愛愁を以て、其意に掛けざるを、而して子厚が和章は便ちいはく、

十年憔悴到秦京、誰料翻爲嶺外行、伏波故道風煙在、翁仲遺墟草木平、直以疎慵招物

柳 宗 元

離休將文字占時名。今朝不用離河別。垂淚千行便濯纒。
 嗚呼文字。以時名。占。休。是。子。厚。人。生。之。悟。徹。言。に。あ。ら。す。や。
 而。して。この。悟。徹。や。乃。ち。失。意。不。遇。の。極。よ。り。來。り。ぬ。遍。體。の。至。情。中。心。獨。り。自。ら。苦。な。り。
 讀。者。を。して。痛。涙。漲。き。來。て。霞。の。如。く。遂。に。爲。に。放。聲。一。哭。せ。し。め。む。と。す。る。者。亦。た。唯。だ。
 其。才。の。敏。と。其。情。の。深。き。を。藉。る。か。故。な。ら。ず。ひ。ば。あ。ら。ず。禹。錫。の。集。中。重。ね。て。衡。陽。に。至。
 り。て。柳。儀。曹。を。傷。む。時。あり。其。引。に。曰。く。元。和。乙。未。の。歲。故。人。柳。子。厚。と。湘。水。に。臨。て。別。を。
 爲。す。柳。は。舟。を。浮。べ。て。柳。州。に。適。き。余。は。陸。に。登。て。連。州。に。赴。く。後。五。年。余。故。道。よ。り。桂。嶺。
 に。出。て。前。別。の。處。に。いた。る。而。して。君。南。中。に。歿。す。因。て。詩。を。賦。して。投。吊。す。と。詩。は。後。年。
 の。作。に。係。る。と。雖。も。この。時。愈。別。の。情。况。を。見。る。べ。き。を。以。て。左。に。引。抄。せ。む。
 憶。昨。與。故。人。湘。江。岸。頭。別。我。馬。映。林。嘶。君。帆。轉。山。滅。馬。嘶。循。古。道。帆。滅。如。流。電。千。里。江。臨。
 春。故。人。今。不。見。

二人手を分て、延佇低徊、去る能はざりし狀、寫して神に入れりといふべし。なほ子厚
 がこの時に作りしと思はる、詩數首あり。
 二十年來萬事同。今朝岐路忽西東。皇恩若許歸田去。晚歲當爲鄰舍翁。
 信書成自誤。經事漸知非。今日臨岐別。何年待汝歸。

京師の劉錫禹及劉錫禹の關係

舟湘江を下るや、又詩あり。
 好在湘江水。今朝又上來。不知從此去。更遣幾年迴。
 長沙の南樓。奮を感じ、故人の見るべからざるを嗟し、風に臨て、涕泣自ら止まず。
 海鶴一爲別。存亡三十秋。今來數行淚。獨上驛南樓。
 而して族弟宗一に別る、一律に至りては、推して、この行得し所の歴巻となすべし。
 零落殘魂倍黯然。雙垂別淚越江邊。一身去國六千里。萬死投荒十二年。桂嶺瘴來雲似
 覆。洞庭春盡水如天。欲知此後相思夢。長在荆門郢樹煙。
 再び界隈巖水窟を觀て、遂に巖下に宿し、孤囀一夜、乃ち清吟を發して曰く、
 發春念長遠。中夏欣再覩。是時植物秀。杳若臨玄圃。敲陽野垂水。白日驚雷雨。笙簧潭際
 起。鶴鶴雲間舞。古苔凝青枝。陰章濕翠羽。蔽空素彩列。激浪寒光聚。的皪沈珠淵。鏘鳴捐
 珮浦。幽巖畫屏倚。新月玉鉤吐。夜涼星滿川。忽疑眠洞府。
 行いて高山に至る。路に臨て、孤松あり、往來研て明となす、好事者之を辨み、竹を編し
 て、援となし、うの生植を遂けしむ。子厚感して止まず、又賦する所あり。
 孤松停翠蓋。託根臨廣路。不以險自防。遂爲明所誤。幸逢仁惠意。重此藩籬護。猶有半心
 存。時將承雨露。

終身之か援を爲す者なく空しく明の誤るところとなる嗟乎人にして寧ろ松に若
かす偽情想ふべきのみ。

柳の州たるや永に比して更に遠隔古の諸越の地に属す子厚征行三月に亘りその
歳六月二十七日を以て初めて柳州の任地に達しぬ先づ城樓に上り眸を放て曠望
す感懐愴然愁中より來り天海に搖曳して断絶すべからず乃ち一律を賦し飛簡千
里之を津汀封連四州の刺史に分ち寄せぬ。

城上高樓接大荒海天愁思正茫茫驚風亂颭芙蓉水密雨斜侵薛荔牆嶺樹重遮千里
目江流曲似九迴腸共來百粵文身地猶自音書滯一鄉。

あゝ官をいへば請官なり地をいへば殊方なり絶代の聰明を以て空しく餘生を個
中に葬送せむとすその悲て自ら傷ふるに至るも亦た情の憐れむべき者なくひば
あらず之を東坡が貶謫に處し落々自蒙嶺南に向ひては日曠荔枝三百顆不妨長作
嶺南人といひ海を航しては九死南荒吾不恨茲遊奇絕冠平生といひしに比して暗
笑相異なるの甚しき殆んど語を著くる所なからむとす然れども是れ天稟の異と
先天の數とに由るのみ若し尙ほ蔡寬夫を爲ねて之を詆笑するものありとせば即
ち人生涙あるを解せるの痴愚子吾れ豈に再び言を爲すに堪へむや。

第七 柳州の刺史

古より才人の不遇固より窮ならず而かも子厚の如き者亦少しといふべし子厚の
柳州に至るや萬里の殊域王化未だ遍からず山澤の間瘴癘の滿つる所となり動植
の物頗る異にして光景中原と同じからず晩年衰老の殘軀を以てこの夷獠の地に
托し終にその歸期を知らずひたすら死を待つか如く然り故にその物に觸れ懐を
動かすや懐惋殆んど堪ふる能はざる者あり之を曾て永州に在りしに比して寧ろ
過ぐることなしといふを得ず先づその洞氓の詩を爲るや太古穴居の遺俗の存す
るところ南國の異を標せしを知るべきなり。

郡庭南下接通津異服殊音不可親青箬裏鹽蹄洞客綠荷包飯趁虛人鵝毛禦臘糴山
厨雞骨占年拜水神愁向公庭問重譯欲投章甫作文身。

平居眼を慰むるに足る者あらず乃ち公館の前に於て多く樹木を植ゑ其間に吟嘯
し僅に以て鬱陶の孤懷を消遣せむとす小詩之を賦せしもの多く余輩をして轉た
少陵か浣花卜居の時を追想せしめむとす。

芳朽自爲別無心乃玄功天天日放花榮耀將安窮青松遺洞底撥詩茲庭中積雪表明

柳

宗

元

秀。寒。花。助。蕊。籠。幽。貞。夙。有。慕。持。以。延。清。風。
 無。能。常。閉。閣。偶。以。靜。見。名。奇。姿。來。遠。山。忽。似。人。家。生。勁。色。不。改。舊。芳。心。與。誰。榮。喧。卑。豈。所。
 安。任。物。非。我。情。清。韵。動。竿。瑟。譜。此。風。中。聲。(蘭。買。風。山。人。郡。內。新。親。松。與。見。贈。二。首)
 柳。州。柳。刺。史。種。柳。柳。江。邊。談。笑。爲。故。事。推。移。成。昔。年。垂。陰。當。覆。地。聳。幹。會。參。天。好。作。思。人。
 樹。漸。無。惠。化。傳。(種。柳。賦。題)
 手。種。黃。甘。二。百。株。春。來。新。葉。徧。城。隅。方。同。楚。客。憐。皇。樹。不。學。荆。州。利。木。奴。幾。歲。開。花。聞。噴。
 雪。何。人。摘。實。見。靈。珠。若。救。坐。待。成。林。日。滋。味。還。堪。羨。老。夫。(柳。州。城。西。北。隅。種。甘。樹)
 上。苑。年。年。占。物。華。飄。零。今。日。在。天。涯。祗。應。長。作。龍。城。守。剩。種。庭。前。木。樺。花。(種。木。樺。花)
 か。く。し。て。子。厚。は。姑。く。長。春。園。裡。の。小。主。人。と。なる。を。得。た。り。さ。
 時。節。夏。に。入。り。溽。暑。に。熟。眠。し。て。心。氣。昏。昏。宛。ら。醉。ひ。し。か。如。く。覺。後。に。竹。外。の。茶。臼。一。聲。
 を。聞。き。漸。く。蘇。す。る。を。得。た。り。
 南。州。溽。暑。醉。如。酒。隱。几。熟。眠。開。北。牖。日。午。獨。覺。無。餘。聲。山。童。隔。竹。敲。茶。臼。
 府。城。の。外。に。見。る。と。こ。ろ。山。嶽。起。伏。恰。も。渴。龍。の。海。を。飲。ま。ひ。と。する。が。如。く。峰。尖。空。を。刺。
 し。て。雄。偉。峻。拔。九。重。の。霄。漢。天。將。に。遠。か。ら。む。と。し。萬。轉。の。雲。山。歸。路。乃。ち。除。な。り。そ。の。京。
 華。の。親。故。に。寄。す。る。に。曰。く、

海。畔。尖。山。似。劍。鋒。愁。來。處。處。對。愁。鵬。若。爲。化。得。身。千。億。散。止。峰。頭。望。故。鄉。

又。同。題。の。一。首。あ。り、

林。邑。山。聯。瘴。海。秋。解。羽。水。向。郡。前。流。勞。君。遠。問。龍。城。地。正。北。二。千。到。錦。州。
 斗。杓。已。に。廻。り。て。時。漸。く。春。に。入。る。一。夜。雨。過。き。て。百。花。狼。籍。泥。に。妻。し。榕。葉。却。て。庭。上。に。
 策。々。た。り。其。間。靈。鷲。の。眼。睨。た。る。者。あ。り。以。て。儘。に。其。春。な。る。を。認。む。の。み。是。れ。豈。に。中。
 原。二。月。の。候。な。ら。む。や。而。し。て。此。地。の。人。間。の。至。る。べ。き。處。に。非。さ。る。を。知。了。す。べ。し。
 宦。情。羈。思。共。悽。懷。春。半。如。秋。意。轉。迷。山。城。過。雨。百。花。盡。榕。葉。滿。階。鷲。亂。啼。

節。物。風。光。の。人。を。惱。ま。す。こ。と。實。に。か。く。の。如。し。而。し。て。子。厚。は。遷。居。の。後。未。だ。數。月。な。ら。
 す。し。て。う。の。從。弟。宗。直。を。失。ひ。ぬ。異。鄉。に。所。親。と。離。る。其。感。察。す。る。に。餘。あ。り。と。い。ふ。べ。し。
 宗。直。頗。る。文。を。好。み。か。つ。て。西。漢。文。類。四。十。卷。を。選。し。子。厚。爲。に。之。に。序。し。ぬ。夙。に。進。士。を。
 業。と。せ。し。も。擧。げ。ら。れ。ず。蓋。し。子。厚。の。謗。を。朝。に。得。し。が。爲。に。累。せ。ら。れ。さ。と。い。ふ。而。し。て。
 依。る。所。な。き。を。以。て。の。故。に。病。を。興。し。て。來。り。子。厚。に。柳。州。に。從。へ。り。其。途。に。瘴。疾。を。加。へ。
 癒。え。て。未。だ。久。し。か。ら。ず。子。厚。が。雨。を。雷。塘。の。神。に。謁。ひ。し。に。從。ひ。還。て。靈。泉。の。上。に。戲。れ。
 洋。洋。と。し。て。歸。り。臥。せ。し。が。忽。然。病。劇。し。く。之。を。呼。べ。と。も。聞。く。なく。就。い。て。視。れ。ば。形。神。
 す。で。に。離。れ。ぬ。子。厚。爲。め。に。殯。を。志。し。又。之。を。祭。り。て。曰。く。炎。荒。万。里。瘴。瘴。充。塞。す。汝。す。で。

史 刺 の 州 柳

に久病此に來りて吾に伴ひ到つて未だ數日ならず自ら少しく差えたりといひ雷塘靈泉言笑故の如く一寐覺めずして古人となりぬ茫茫たる上天豈此痛を知らむやと悽情哀旨以て加ふる蔑く苟くも情を矯むる者に非ざるよりは誰か敢てかくの如く爲らすといはむ

この間子厚が心を慰めしは故人の信問にして劉禹錫と千里を隔てし心交唱酬は其最たるべき者なりしかも事は主として子厚が臨池の技に關せり因話録を按ずるに曰く柳柳州が書は後生多く師效す就中尤も童草に長し時に寶とせられ湖湘以南童子盡く其書を學び頗る能くする者ありきと禹錫の二子孟と嵩と又之を學ぶ同舍の族子に殷賢といふ者あり戯れにうの書後に題し子厚の家王右軍の手書にして紙背に安西將軍度翼の題あるものを擧げて奇なりと稱す子厚乃ち之に酬いて曰く

柳 宗 元

書成欲寄度安西紙背應勞手自題聞道近來諸子弟臨池尋已厭家雞禹錫之に對へて

日日臨池弄小雛還思寫論付官奴柳家新樣元和脚且盡莖芽歛手徒子厚重ねて二首を賦す

柳 州 の 刺 史

聞道將離向墨池劉家還有異同詞如今試遣隈牆問已道世人那得知世上悠悠不識眞莖芽盡是捧心人若遣柳家無子弟往年何事乞西賓禹錫乃ち曰く

小兒弄筆不能噴沅壁書隄且賞勸聞破夢熊猶未兆女中誰是衛夫人昔日時工記姓名遠勞辛苦寫西京近來人有臨池興爲報元和欲抗行子厚三唱して三首あり

小學新翻墨沼波羨君瓊樹散枝柯在家弄土唯嬌女空覺庭前鳥跡多事業無成耻藝成南宮起草舊連名勸君火急添功用趁取當時二妙聲行盡關山萬里餘到時圓井是荒墟附庸唯有銅魚使此後無因寄遠書

二家連作の詩妙とすべき者少しと雖も風流の佳話亦た以て後世に傳ふるに足らむ然れども臨池の小技未だ以て深く稱道するに及ばず當時子厚の文名業已に天下を風靡したりければ衡湘以南進士たらむとする者皆推して師となしその口講指畫を繼承して文詞を爲るに悉く法度の觀るべきありき蓋し子厚が人に教ゆるや頗る懇切千里書を致して問ふ者あれば一として答へざるなく集中特に此種の書牘に富む

柳 宗 元

子厚の政を爲すや、觀るべきもの亦た少からず。柳州の民、未だ井を知らず、嬰甌を以て江水を負ひ、克く井飲する者なし。崖岸峻厚、早すれば、水益す遠く、人の陟降太だ艱。雨ふれば、途多く滑にして顛す、恒に吝嗇を爲し、訛言に怨感して、終に就すこと能はず。元和十一年三月朔、命して井を城北隍上に爲らしめ、其前に祭井文あり。卅日ならずして工終り、例にして泉多く、邑人以て灌ぎ、その土墜埴、その利悠久なりと稱す。初め子厚の柳州に至るや、嘆して曰く、是れ豈に政を爲すに足らざらむや。乃ち土俗に因て、爲に教禁を設け、州人順賴しき、その俗、男女を以て錢に質し、約すらく、時に贖はず、子母相俾しきに至れば、没して奴婢となさむと。是に於てか、子厚爲に方計を案し、悉く贖ひ歸らしめ、其尤も貧にして力能はざる者は、其備を書し、相當るとき其質を歸さしむ。觀察使の法を他州に下し、一歳に及ふ比、免れて歸るもの千人ならむとす。亦た以て仁人の爲すところ、其の大小を問はず、一として濟生利民の意に出でざるなきを見るに足らむかな。

かくの如くして、子厚は夷獠の民を鄙なりとせず、動かすに禮法を以てければ、三年にして、民各自ら矜奮して曰く、茲、土京師に遠けれども、吾亦た天氓なり。今や天幸に仁侯を恵む若し、服化せざれば、人に非ずと。是に於てか、老少相教悟して、令に違ふものあらず。その郷閭に爲すあらむとするや、曰く、吾侯之を用ひて、意に可とせざることを無きか。仍て必ず子厚の意を付度して後に従事し、凡る令の期たるや、民勸めて之に趨き、後先あることなく、必ず其時を以て行ひき。是に於て、民に素經あり、公に負租なく、流通歸り來り、生を樂み、事を起し、宅に新屋あり、歩に新船あり、池園潔修して、猪牛鴨鶏は肥大、蕃息しぬ。而して子は父の詔を嚴にし、婦は夫の指に順ひ、嫁娶葬送、各條法あり、出ては互に長弟となり、入ては慈孝す。乃ち又大に孔子の廟を修め、城郭、巷道、皆治めて端正ならしめ、樹うるに樹木を以てす。柳民悦喜し、子厚を視ること父の如し。その後年にいたり、女星芒寒く、靈車都に歸りし。後廟觀、森肅、春秋饗、享せられて、千歳猶ほ止まざるもの、豈に理なしといふを得むや。

柳 州 の 刺 史

古之州治、在潯水南山石間、今徙在水北直平四十里、南北東西皆水滙、北有雙山、夾道嶄然、曰背石山、有支川東流、入于潯水、因是北而東、盡大壁下、其壁曰龍壁、其下多秀石、可視、南絕水有山無麓、廣百尋、高五丈、上下若一、曰甌山、山之南皆大山多奇、又南且西

柳 宗 元

曰。鵝。鶴。山。壯。聳。環。立。古。州。治。負。焉。有。泉。在。坎。下。常。盈。而。不。流。南。有。山。正。方。而。崇。類。屏。者。曰。屏。山。其。西。曰。四。姥。山。皆。獨。立。不。倚。北。流。澗。水。瀨。下。又。西。曰。仙。奕。之。山。山。之。西。可。上。其。上。有。穴。穴。有。屏。有。室。有。宇。其。宇。之。下。有。流。石。成。形。如。肺。肝。如。蕪。房。或。積。于。下。如。人。如。禽。如。器。物。甚。衆。東。西。九。十。尺。南。北。少。半。東。登。入。小。穴。常。有。四。尺。則。廓。然。甚。大。無。竅。正。黑。燭。之。僅。見。其。宇。皆。流。石。怪。狀。由。屏。南。室。中。入。小。穴。倍。常。而。上。始。黑。已。而。大。明。爲。上。室。由。上。室。而。上。有。穴。北。出。之。乃。臨。大。野。飛。鳥。皆。視。其。背。其。始。登。者。得。石。枰。於。上。黑。肌。而。赤。脉。十。有。八。道。有。變。故。以。云。其。山。多。檀。多。櫛。多。篔。簹。之。竹。多。藁。吾。其。鳥。多。柳。歸。石。魚。之。山。全。石。無。大。草。木。山。小。而。高。其。形。如。立。魚。在。多。柳。歸。西。有。穴。類。仙。奕。入。其。穴。東。出。其。西。北。靈。泉。在。東。趾。下。有。醜。環。之。泉。大。類。穀。雷。鳴。西。奔。二。十。尺。有。洞。在。石。澗。因。伏。無。所。見。多。綠。青。之。魚。及。石。鱖。多。儻。雷。山。兩。崖。皆。東。西。雷。水。出。焉。善。壘。中。曰。雷。塘。能。出。雲。氣。作。雷。雨。變。見。有。光。禱。用。粗。魚。豆。彘。修。形。搗。糝。酒。陰。虔。則。應。在。立。魚。南。其。間。多。美。山。無。名。而。深。峩。山。在。野。中。無。麓。戩。水。出。焉。東。流。入。于。澗。水。

是より先、かつて子厚と永州に邂逅せし吳武陵は、既に召し還され、大に裴度の器遇する所となりぬ。武陵元より子厚と交善し、故に毎に子厚の子なきをいひ、爲に度に説いて曰く、西原の蠻、未だ平けず、柳州は賊と犬牙相接す、宜しく武人を用ひ、以て宗

柳 州 の 刺 史

元、に代らしむべく、江湖に優游するを得せしむ。又書を工部侍郎孟簡に贈て曰く、古稱す、一世三十年と、子厚の斥けらるや、十二年殆んど半生なり。蹇。蹇。電。射。は。天。怒。と。雖。も。朝。夕。を。終。る。こ。と。能。は。ず。聖。人。上。に。在。り。安。ん。ど。世。を。畢。へ。て。人。臣。に。怒。る。こ。と。あ。ら。む。や。且。つ。程。劉。二。韓。は。皆。已。に。拔。拭。せ。ら。れ。或。は。大。州。別。職。に。在。り。而。し。て。獨。り。子。厚。は。猿。鳥。と。伍。を。な。す。賊。に。恐。ら。く。は。霧。縹。の。嬰。る。と。こ。ろ。柳。州。後。な。か。ら。む。と。而。し。て。度。と。簡。と。共。に。之。を。用。ふ。る。に。及。ば。ず。蓋。し。度。は。前。に。劉。禹。錫。の。州。を。易。ふ。る。に。力。を。盡。せ。し。も。の。又。固。よ。り。子。厚。と。相。知。れ。り。故。を。以。て。必。ず。や。如。上。の。言。を。聽。か。さ。り。し。に。は。非。さ。る。べ。け。れ。と。唯。だ。憲。宗。の。心。を。伺。う。て。然。り。し。な。る。べ。き。か。憐。む。べ。し。荏。苒。た。る。四。周。星。恩。詔。遂。に。下。ら。ず。子。厚。す。で。に。死。せ。り。矣。

元和十二年、淮西の寇平ぐ、初の彰義節度使吳少誠の死するや、弟少陽自ら軍府を領し、陰に亡命を養ふ。少陽死し、子元濟繼て之を領し、兵を縱て侵掠し、漸く東畿に及ばむとす。詔して十六道の兵を發して、之を討つ。平盧節度使李師道、元濟を赦さむと乞ひしも、得ず。裴度、淮西の行營を宣慰し、遠て淮西の決して取るべからざるを言ふ。時に上悉く兵を以て、同平章事武元衡に委す。師道素より刺客姦人を養ふ。客請ふていふ、密に往いて元衡を刺せば、他相は必ず争ひ、天子に勸めて兵を罷めしむるならむ。

柳 元 宗 柳

と元衡の入朝するや、賊あり、暗に之を射殺し、又度を撃て首を傷く。上大に怒り、賊を討つこと愈よ急度を以て同平章事となして曰く、吾度一人に倚て、賊を破るに足れり、と新に命して、彰義節度使を兼ねしめ、淮西宣慰招討使に充て、諸軍を督して進討す。是に於てか、唐鄆節度使李愬先づ討て、賊將丁士真、吳秀琳、李祐を擒にし、釋して之を用ひ、祐の計に従ひ、雲夜に乘し、七十里を越え、兵を引いて、蔡州城に入り、鶴鴨池を撃て、軍聲を混じ、鷄鳴に入て、元濟か外宅に據る。元濟牙城に登て拒戦せしが、已にして擒に就きぬ、便ち檻して京師に送り、之を斬り、事乃ち罷みたり。叛より誅に至るまで、兵を用ひしこと凡そ二載。この淮西の大勝は、唐末に於ける唯一の大業にして、當代の文臣、頌を上りしもの、比々相繼ぎ、子厚も亦た然りき。まかもこの勝後、上愈よ驕侈にして、用ふる所、其人に非ず。元和の政、日に非にして、遂に唐社敗亡の兆をなしぬ。唯だ子厚は之を見るに及ばず、亦た幸といふべかりしのみ。

平淮夷雅、凡そ二篇、之を進むるに表を添ふ。其中に曰く、臣伏して自ら付度するに、方剛の力あれども、戎行に備はり、死命を致すを得ず。况んや今すでに事なきに於て、れや、國恩に報いむを思ふ、獨り惟だ文章あるのみ、と、嗚呼、是れ子厚の眞志なり。之を以て子厚が媚を納れ、官を求むるに、意ありしが、爲めといふが如きは、未だ善くこの眞

柳 州 の 刺 史

擊なる、女人の、衷情を、察せざる者、の、ことのみ、奚、予、以て、取るに、足らむや。

余はこゝに愈よ子厚の窮死を記すべき時に到達しぬ。今夫れ世に治亂あり、時に否泰あり、命に通塞あり、跡に顯晦あり、是に於てか、禍福相須ち、愛喜定らず、榮枯枝を同らし、歌哭徑を同うす。子厚すでに聰明を以て、徒らに顛越に遭ひ、予の一生を誤りぬ。柳州に在ることすでに四年、忽ち病を得て、遂に起たず。吐風の才筆、なほ墨香を人間に留む。雖も魂や一朝去つてすでに天上の修文郎となり、了りぬ。嗚呼、人の世に在るや、花上の露、空中の雲、去留常なく、生滅定らず、便ちかくの如きのみ。時は元和十四年十一月八日、其壽四十七。その翌十五年七月十日を以て、輿觀京師に歸るを得て、萬年縣外先人の墓側に葬りきといふ。即ち韓愈が佛骨表を上り、潮州に左遷されし年に、して永貞の八司馬存する者すでに幾もなく、唯だ緇馬、傷の老健にして、老路、促、旅すべきが、わかしのみ。

子厚、先に妻楊氏を失ひし後、又娶らず。子あり、皆庶出なり。周六といひ、周七といふ。其季は子厚卒して後に生れしなりき。女子二人、皆幼而して、柳氏この後に聞ゆし者あらず。初め子厚の死するや、家に餘財なく、歸葬の期久しきに亘りしが、觀察使裴行立の輔助に因りて、始めて之を爲せり。行立は子厚と同しく河東の人にして、頗る節概

あり然諾を立て、早歳より子厚と交り、子厚も亦たしばし爲に盡す所ありしが、遂に其力に頼りて、後事を處理するを得、時人頗る之を義となしぬ。

柳 宗 元

永柳二州貶謫の中常に子厚に伴ひ、その孤寂を慰めし者を舅弟盧遵となす。遵は涿人性謹慎、學問して厭はず。子厚は元和四五年の間に於て、書を桂州の李中丞に上り、之を薦めしことあり。其中に曰く、内弟盧遵の行中、諸父に類して、靜專温雅、禮を好み、飾るに信あり。文墨を以て政事に達す。今閣下に聞する所以のもの、心に作ることなく、色に愧つるなし。宗元か弄逐せられ、枯槁したるを以ての故に、遠仕を求めず。顯名を務めて又その進むに難かり、竊に閣下の賢を擧げ衆を容るゝを高とす。故に願ふは、心を委せむことを、則ち澤を遵に施せば、厚く小人に賜ふに過るや、遠からむこと。次いて、遵が桂州に遊ぶを送る序あり。其中に曰く、余は南服に弄せられたるを以て、來て余に従て居ること五年、未だ嘗てその行の義に悖り言の行に異なることあるを見ず。余の弄られたるや、適まこの人を累はせしなり。余を愛しその愛思を慰するを以て、故に京師の游をなして、以て名を當世に取らず。桂の邇く、中丞の道光、大にして賢者を容るゝ多きを以て、附て趨き、その中の有を出さむとを樂む。其人となりや、觀るべきなり。然れども、その終始子厚に依りしを見れば、この行亦た太だ意を得

柳 州 の 刺 史

るに非ざりしを、知了すべし。而して子厚の死に及で、遂に去らず、遂に子厚を葬り、又その家を經紀しぬ。其人頗る終始ありと謂ふべきなり。
子厚の遺文、柳河東集あり。劉禹錫の書編成の次第を記して曰く、病且さに革らむとす。や、書を留め、その友中山の劉禹錫に抵して曰く、吾不幸卒に謫を以て死せむとす。遺草を以て故人を累はさむと、禹錫書を執て泣き、遂に編次して四十五卷となし、世に傳ふ。今の傳ふるもの、又四十五卷、便ち應さに全本たるべし。而して禹錫か追記せしところ、退之の誌若しくは祭文の在るあり。今第一通の末に附すとあるものは、脱佚して存せざるか如し。子厚他に揚子法言の注を作りしが、特に取るべきは、どの者にもあらず。又世に傳ふる龍城錄の如きに至りては、かつて喜て鬼を説きしことあるを以て、他人の作名を假りし者、斷してその手筆に非ず。蓋し一套の柳女は、全く子厚の心血を瀝盡したるものにして、亦た當さに不朽なるべき者なり。
柳子厚墓誌銘は、實に韓愈の撰ひし所。その終に子厚か一生を論して曰く、子厚をし、て臺省に在りしとき、自ら其身を持せしむる、己に能く司馬刺史の時の如くならしめば、亦た自ら斥けられず、斥けらるゝも、人ありか能く之を擧げ、且つ必ず復た用ひられて、窮せざらむとす。然れども、子厚斥けられて、久しからず、窮極らず、人に出づる

柳

宗

元

ありと雖も、その文學辭章は必ず自ら力めて、必傳を後に致すこと、今の疑なき如く、なること能はざらむ。子厚をして所願を得、一時に將相たらしむるも、彼を以て此に易ふれば、孰れか得孰れか失、必ず能く之を辨する者あらむ。蓋し子厚と退之との交情は、頗る親密、議者或は退之か作れる祭文中に所謂我れ子を知るに非ず、子實に我に命せりとあるを引きて、微意ありと爲せども、固より然るべからず。如上の言は、知己の爲に發せし者として、頗る相中れり。然る所以の者は、數ば言ひし如く、天必ず子厚に待つ所あり、之を困しめしならむのみ。若し夫れ、宋祁が新唐書の論贊にいへる者に至りては、唯だ官位閱歷の上より言を爲せしまでのことにして、遂に子厚の天職のありし所を看破せず、未だ盡く取るを得ざるなり。

子厚の柳州に在るや、かつて部將魏忠、謝寧、歐陽翼等と酒を驛亭に飲み、爾て曰く、吾時に乘てられて、此に寄するのみ。明年吾死せむとす、死せば神となり、後三年にして廟を作て之を祀れど、而して其死するや、果して期を違へず。後三年を経て、長慶三年に至り、孟秋の神、柳州府治の後堂に下る。歐陽翼等之を見て、大に驚き、覺せず地に拜跪す。その夕、翼に告げて曰く、我を羅池の上に館せよ。其月景辰、廟成て天祭す。過客に李儀といふ者あり、酒に酔ふて、堂上に慢侮しけるが、疾を得、廟門を出て、即

柳州の刻史

死せり在天の英靈、長しへに死せず、便ちかくの如きのみ。明年春にいたり、魏忠、歐陽翼、相謀り、謝寧をして京師にいたらしめ、韓愈に請ひ、其事を書せしむ。愈文を作り、兼ねて迎享送神の詩を作り、柳民に遺り、歌て以て祀らしめ、併せて之を碑に刻せしめぬ。其詞に曰く、

荔枝丹兮蕉黃雜、肴蔬兮進侯堂。侯之船兮兩放、度中流兮風泊之。待侯不來兮、不知我悲。侯乘駒兮入廟、慰我民兮不嘯。以笑鵝之山兮、柳之水桂樹園。園兮白石齒齒、侯朝出遊兮。暮來歸、春與發、吟兮秋鶴共飛。北方之人兮、爲侯是非。千秋萬歲兮、侯無我違。福我兮、壽我驅厲鬼兮、山之左。下無苦濕兮、高無乾統。稔充羨兮、蛇蛟結蟻。我民之報事兮、無怠其始。自今兮、欽于世世。

羅池の神、靈柳人飲食必す祭る。降て宋の元祐七年六月に至り、詔して、靈文の廟と稱しぬ。蓋し郡人、その雨陽祈に應ずるを言ひしか故なり。田表聖、その碑陰に書して曰く、子厚柳州に終り、精多く魄強きを以て、羅池の神となりぬ。昌黎其事を叙して、之を銘す。大意に謂へらく、子厚宏深の量、昭明の識、當に星辰となり、岳瀆となるべく、胡爲ぞ柳州の陋に在りて、神とならむや。その推尊する所以、甚だ大世公の此文を以て、怪を語るとなすは非なり。士に抱負あり、施す能はず、流落に遭ひ、死して、明神列鬼と

なり、藪藪廟食するは理ありといふべし、李衛公が海上に竄せられて死するや、その
精魄凜然、尙は能く犬鼠の餘黨をして膽を夢中に破らしむ、然らすむば、退之、豈に柳
州を矯誣して、以て異を求めむや、と、今夫れ、鬼神の事たるや、茫、茫、知、り、難、し、然、れ、ど、も
子厚の柳州に於けるは、猶は退之か、潮州に於けると、一般均しく、爲政の治績に由り
て、徳望の永く、涙ひさかりしを知らむ、而かも、世人退之の此事あるを、知りて、却て子厚
を遺すもの、何の故ぞ、余こゝに於てか、彼の贖贖たる者の、偏見を、憫笑せむとはする
なり。

第八 宗元の本領

上來の數章、わが柳子厚の生涯を叙述し盡したれば、是より進で、子厚が人間に貢獻
したる事業に就て、論ずる所あらむとす、今夫れ、文章の傳ふべきは、他に非ず、徒らに
空の空たるものに非ずして、人生と相渉ること深きが、故ならむのみ、而して、子厚の
文章の頗る、價値あるは、六朝綺靡の風を一變したるにあり、換言すれば、力を内容に
盡したるに在り、と謂ふへきなり、されば、余をして、彼が措辭の、技工的、手腕を論ずる
に先ち、その本領に就て一言せしめよ、本領の語未だ、適否を知らず、要はその思想趨

宗元の本領

向を指示する者にして、文辭を發出せしめし、心靈的根柢をいふなり、而して、余は、子
厚を以て、或程度まで、唐代一般を代表するに足る者と思惟する、か故に、や、廣きに
互りて、詳論する所あらむとす、なり。

こゝに、歴代史乘の證する所により、つらく、大勢の向ふ所を考ふるに、支那國民は、
蓋し、老いすして、蓋せし者なり、今夫れ、三代の蘊蓄は、春秋戰國の間に於て、轟然爆發
し、稀有の盛觀を極めしも、一時にして、罷み、無限の禍亂は、亂ち得しところ、一般國民
の、厭世思想を喚起せしに過ぎず、遂に、兩漢を以て、休養時代となし、物質的饒富の中
に、肉體的快樂を享受せしむるに至りき、而して、此間に於ける、迷信的傾向は、頗る甚
しき者あり、終に、高尚なる、心靈的超脱を爲すに、及ばず、炎運一たび、盛りし後は、廣漠
たる一面の大陸、忽ちに、睽離分散し、前には、吳蜀魏の三國の鼎立するあり、西晋に至
り、姑く之を合同するを得たりしも、間もなく、戎狄の蜂起に連れて、慘澹たる、暗黒時
代に遷り、饑饉肉に飽き、邑虎翼を備け、支那國民は、僅に、江南の一方に、半壁の版圖を
領して、その餘喘を續さしに過ぎざるのみ、胡人の國を建つるもの、十六朝興衰、倒後
に、南北の兩流となり、小國相敵して、紛擾擾時も、息むこと、能はず、是に於て、厭世思想
は、極端に、走り、旁逕に入り、之を上にして、清談となり、下にして、鍊丹となりぬ、人は、信

柳

宗

元

仰に渴して煩燥に堪へず。僅に心を慰むるは、美術的趣味のみ。まかも織巧輕妙の小技工を好み、沈靜典雅の大神韵を解するに及ばざりしなり。且つ夫れ、儒教は素より形式的に長く支那國民の思想を繫縛したりきと雖も、回顧退嬰に則りたる教義に過ぎざれば、人心自然の傾向と背馳し、獨斷的立言は未だ他をして心服せしむるに及ばず。之が論證を學問的に爲さざる限り、たゞ幼稚なる社會に行はるべく、特に非常不幸の境遇に沈淪したる當時の人心を満足せしむること難し。他に南方思想の變形たる道教ありと雖も、亦た頗る淺薄假りに一步を譲りて、宗教の形式を備ふるものとするも、殆んど見戲のみ。是に於てか、外教はその機會を得る毎に容易に輸達されたり。就中佛教は東漢の末よりその消息を傳へしが、この時に至りて漸く盛行に赴き、西僧の來りて布教する者多く、支那本土に於ても大德頼りに輩出し、或は巡錫弘法に勞苦し、或は遠く去て流沙の地を踏み、經典の翻譯は鳩摩羅什等を先驅とし、梁以後に於て殆んど完成に近けり。佛教が此の如く支那に行はれきといふは、その教理が善く當時の社會に適合したるが爲なりと雖も、之を概言するるとき、大なる宗教は常に殆んど根底よりして一國の思想を改め得べき者あればなり。

隋唐に至り、天下は再び統一に歸したりと雖も、この思想傾向は未だ轉換するに及

宗 元 の 本 領

はす加ふるに、争亂常に絶えざれば終に之を奈何ともするなく、外教の輸達は愈よ盛にして、波斯の拜火教は祆教の名を以て來り、耶蘇舊教の一派たるねすと、りわんは景教の名を以て行はれ、この二教と佛教とを調和したる摩尼教も亦た入り來り、回々教も亞刺比亞人の交通ありし爲に、南疆に於て多少弘布せり。さすがに佛教は傳來久しきを以て、人心に浸染すると漸く深く、特に名僧の輩出するもの多かりければ、頗る勢力あり、但し未だ之を支那化するに至らず。道教は多少國粹保存の精神を以て、之と頡頏し、時には衝突することさへありき。之を要するに、唐代の民は依然として六朝の餘風を留め、向内的思索を専らにするの素地なれば、唯た外教の思想の吸収に餘念なく、他方に於ては却て美術的好向の進歩をなし、之を一般にいふときは、懷疑の時代と爲すべきが如し。

以上は社會心理の方面より觀察したる唐代國民の状態なり。子厚や、偶まこの時代に遭遇したるもの、既に幾分の懷疑的精神を抱きしこと、自ら然らざるを得ず。而して個人としての子厚に特有なる學問と境遇とは、亦た念ふ之を助長せしものありしに似たり。

聰明警敏、子厚の如き者にありて、儒教の根本的精神に對して、多少嫌焉たらざる者

柳

宗

元

ありしは、固より疑はず。但し社會の制裁にして存する以上は、遂に之を明言するを得ざりしなりき。今夫れ、支那傳來の思想を以てすれば、絶對の大神靈は天にして、覆載間の萬物皆精靈あり。天は常に下土を監視し、人の行為に注意し、之に禍祥災異を下し、因て積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あらしむと云ふ。儒教の倫理説は即ち之を標章して極致と爲さむとするなり。而して子厚は之に對して懷疑的精神を挟み、一篇の天説を著し、天我の間にはさる相關の理なきを論じ、凡百の事物現象を以て無意識なる偶然の發現となし、因果法則の外に逸出せむとはしたりき。但し立論の方法未だ確固たらざるを以て、甚だ稱道するに足らずと雖も、明晰なる學問的精神の存在は大に嘉すべきなり。曰く彼の上にして玄なる者、世之を天といひ、下にして黄なるもの世之を地といひ、渾然として中に處るもの、世之を元氣といひ、塞にして暑きもの、世之を陰陽といふ。是れ大と雖も、果臝、癘痔、草木に異なるなきなり。たゞひ能くろの攻穴を去る者あれども、其れ能く報あらしむや、蕃して之を息する者、其れ能く怒ることあらむや、天地は大果臝なり、元氣は大癘痔なり、陰陽は大草木なり、其れ焉んぞ能く功を賞し、禍を罰せむや、功者自ら功あり、禍者自ら禍あり、その賞罰を望まむと欲するは大謬なり。呼て怨みその哀且つ仁を欲望するは愈よ大謬なり。

宗 元 の 本 領

又劉禹錫が之を駁して、天の能は人固より能くせず、人の能は天も亦た能くせず。天と人と、交も相勝つのみといへるに對へて、予の論の内底に於て、符合する所あり、必ずしも相反すと爲すべからざるを辨したるか如き、愈よ以て其然るを推知すべきなり。曰く若し以て人の爲にすとせば、吾愈よ識らざるなり。若し果して自ら生して植すと爲さば、彼自ら生して植するもの、何を以てか、夫の果臝の自ら果臝となり、癘痔の自ら癘痔となり、草木の自ら草木となり、異なるに異ならむや。是れ蟲の爲に謀るに非ざること明なり。猶ほ天の人の爲に謀らざるかごとし。彼、我に謀らす、我、何爲ぞ之に勝つを務めむや。予が所謂交も勝つなる者は、若し天恒に惡を爲し、人恒に善を爲して、人天に勝たば、善者行はれ、是れ又徳を人に過こし、罪を天に過こすなり。かつて山水の美景を觀るや、時に造物者の誠に有るを認定せしと雖も、無始無終に亘り、幽明を通して、大勢力を振ふ所の精靈の存在に對しては、疑惑實にかくの如き者ありしなり。故に予の韓愈に與へし、史を論する書中にも、鬼神の事たるや、渺茫荒惑、準すべきなく、明者の道はさるどころなりと一喝し、務めて世俗の承嗣的迷信を洗掃せむことを期しぬ。その文筆卓犖にして、峭直、太だ、氣岸を露せしものある、一に是

柳

宗

元

故のみ私かに想ふ子厚か此に至りし者亦た頗る故ありと蓋し人生不惑に達せざる間は多く懷疑の時期なり之に加ふるに子厚の才識を以て轅軻不遇に陥り其胸を鬱らす已に漁父の胸に孤き容れざる何予病まむ顔子の詞を祖とする能はず一厥して起つ能はざるに至りては天の必ずべからざるを疑はざるを得ず而して終に彼の「人衆き者は天に勝ち天定めて亦た能く人に勝つ」といへる者をも合せ棄てて顧みさりしなり然れども子厚は情に深き人にして曠達不羈の氣概に乏しく餘りに眞摯に過きて放懷消愛の工夫に乏むかかければ存亡得喪全く意に關せざるか如くなると能はず自己の運命に對しては泣哭殆んを絶えむとし自ら天を呼て怨むことの愚なるを知るも雖も却つて亦た然らむことあり是に於てか智と情と相闘ひ胸中常に十丈の波瀾あり激盪して肝腸を裂かむとすに至る憐れむべし情は遂に累を爲して一生達觀深悟するところなく彼の心神凝定し之を攪破する者なく宛ら潭水の湛碧と相似たる精神状態の實在は彼の夢視だもせざる所なり

半生の學問は徒らに懷疑を招きたるに過ぎず要するに儒家固執の言は毫も情の人に對して同情を有せず唯だ意志の強固を修養すべきのみ子厚は佩韋賦に中庸

宗 元 の 本 領

の教を守るべきを主張せしと雖ども自ら之を行ふ能はず而して道家の所論は亦た頗る奇譎子厚の才識を以てして遂に之を信する能はずかつて李睦州に與へて服氣を論したる如き明に以て證となすべきなり曰く兄の是術を爲すや凡る今の天下兄の久存を欲するものは皆懼れ兄の連去を欲するものは獨り喜ぶ兄爲して已めされば是れ親に負ひて讎に與するなり夫れ親に背いて讎に與するは中人に及はざる者も皆ろの大戾たるを知れり而して兄の安するは固より小子の懐懐たる所なり兄其れ意あらば卓然として自ら更め讎者望を失て慄れ親者欲するを得て抔たしめよ愚願くは肥牛を椎ち大豕を撃ち群羊を封り以て兄の饑となし隴西の麥を窮め江南の稻を殫し以て兄の饑をなし東海の水を鹽にし以て鹹と爲し菽倉の粟を醃し以て酸となし五味の適を極め五臓の安を致し心恬にして志逸し貌美にして身胖かに醉飽謳歌愉懽所歡聲譽を無窮に流し功烈を垂れて刊らす亦た旨からすや味を去り以て淡に即き樂を去て以て愁に即き悴焉として膚日に皴み肌日に虛しく師とする所なき術を守り傳ふべからざる書を尊び愛する所を悲しましめ憎む所を慶せしめ徒らに我能く壁を堅くし境を拒くといひ以て強大となすに孰與そやと

所論高妙を以て許すべからずと雖も、流俗の見を打破するに於ては、却て有効の者

たらずむばあらず、これ故らに言を卑くして、然るに非すとせむや。

子厚が好みし所は實に佛教なり。而かも是れ最も善く適したるものに非ざるか。

ろの吾幼より佛を好み、其道を求むる三十年を積めりといひしを見れば、壯歲より

すてに着意せしを知るべく、殊に遷貶の間に於ては、常に僧人と交り、益す其の道を

學びしか如し、余は子厚が如何なる程度まで悟入したるか、遂に之を採知するに

由なきを憾まざるを得ず、而して、琛上人の南遊を送る序を見るに曰く、佛の跡世を

去ること久し、その留て存するものは佛の言なり、言の著はれたる者を經となし、翼

て之を成す者を論となす、その流れて來りし者は、百に一なること能はず、然れども

其道は備はれり、法の至れるは般若より尙きなく、道の大なるは涅槃より極めたる

はなし、世の上士將に是に由て以て入らむと欲するに、經論を取るに非されば、悖る

しかるに、今の禪を言ふ者は、流盪舛誤、迭に相師とし、妄に空語を取て、方便を脱略し

眞實を顛倒し、以て己を陥れ、又人を陥るゝことあり、又能く體を言て用に及ばざる

者あり、二者の斯須も離るべからざるを知らざれば、なり之を離るれば、外のみ是れ

世の大に思ふる所なり、とかくの如きは、佛教の研究方針を説明したる者にして、

略

柳 宗 元

宗 元 の 本 領

は簡なれども多少、然る見地を認むべきに似たり。然れども、僧浩初を送る序の

中、兼て韓愈の駁言に對へるの佛教を信仰する理因を詳論せし一段に至りては、少

しく意を得ざるものあり、曰く、浮圖は賊に斥くべからざるものより、往々易論語と

合へり、賊に之を樂めば、その性情に於ける孔子と道を異にせず、退之儒を好むこと

未だ揚子に過ぐる能はず、揚子の書は、莊墨申韓に於て皆取るあり、浮圖なるもの、反

て莊墨申韓の怪僻險賊には及ざるか、曰く、ろの夷なるを以てなり、と果して道を信

するに夷を以てせば、將に惡來盜跖を友として、季札由余を賤しめむとするか、所謂

名を去て實を求むる者に非ず、吾の取る所るは、易論語と合へばなり、聖人復た生く

と雖も得て斥けざるなり、退之の罪する所の者は、其跡なり、曰く、髡にして、緇し、夫婦

父子なく、耕農蠶桑を爲さずして、人に活せらるゝ是の若きは、吾と雖も樂まざるな

り、退之其外を恐て、其中を遣る、是れ石を知て、玉を韞むを知らざるなり、吾が浮圖の

言を嗜む所以此を以てなり、と、今夫れ儒佛の二道ろの根本基礎に於て異なること、符

號も官ならず、而して本を忘れ、末を議し、その實際的將た倫理的方面に於て、易論語

と偶々相合ふを取らむとする者ならむには、乃ち依然として、易論語を樂しむに、若

かず、已に以て自ら足るものあれば、何ぞ必ずしも隣家の財寶を數へむ、天下の事す

柳

べ。か。く。の。如。き。の。み。然。れ。ど。も。之。を。熟。思。す。る。に。子。厚。た。る。も。の。か。い。る。淺。薄。の。理。由。を。
 以。て。佛。を。信。せ。し。に。非。さ。る。べ。け。れ。ど。も。居。然。と。し。て。社。會。の。制。裁。に。顧。慮。し。故。ら。に。辭。を。
 飾。り。言。を。巧。に。し。て。然。る。に。非。さ。る。な。き。を。得。む。や。而。し。て。之。を。韓。愈。に。比。す。る。に。確。に。一。
 段。進。歩。の。見。地。あ。る。を。知。る。べ。し。愈。は。か。つ。て。浮。屠。文。暢。を。送。る。序。中。に。揚。子。雲。か。門。牆。に。
 在。て。は。之。を。壓。き。夷。狄。に。在。り。て。は。之。を。進。む。と。い。へ。る。を。引。き。吾。取。て。以。て。法。と。な。す。と。
 稱。し。な。か。ら。原。道。に。佛。教。を。論。ず。る。や。乃。ち。粗。莽。の。言。を。爲。す。を。敢。て。し。今。其。法。に。曰。く。必。
 ず。而。の。君。臣。を。棄。て。而。の。父。子。を。去。り。而。の。相。生。相。養。の。道。を。禁。じ。以。て。そ。の。所。謂。清。淨。寂。
 滅。な。る。者。を。求。め。よ。と。嗚。呼。そ。れ。亦。た。幸。に。し。て。三。代。の。後。に。出。て。禹。湯。文。武。周。公。孔。子。
 に。黜。け。ら。れ。ず。亦。た。不。幸。に。し。て。三。代。の。前。に。出。て。禹。湯。武。文。周。公。孔。子。に。正。さ。れ。
 な。り。と。い。ひ。し。が。如。き。將。た。佛。骨。を。論。せ。し。表。中。の。語。を。見。る。も。其。佛。教。に。關。し。て。秋。毫。の。
 の。知。識。を。有。せ。ず。却。て。大。膽。に。も。其。跡。の。み。捉。ら。へ。て。嗚。呼。せ。し。を。知。る。べ。し。是。れ。明。に。自。
 家。撞。着。に。陥。り。し。も。の。學。問。的。精。神。の。欠。亡。を。證。し。て。餘。り。あ。る。に。非。ず。や。蓋。し。韓。愈。の。如。
 き。殆。ん。ど。迷。信。に。似。た。る。態。度。を。以。て。儒。に。歸。せ。し。も。の。ろ。の。孔。孟。に。對。す。る。關。係。は。之。を。
 善。く。い。ふ。と。き。羽。翼。に。し。て。之。を。惡。く。い。ふ。と。き。は。奴。隸。た。る。に。過。ぎ。ず。頑。鈍。固。僻。移。る。
 能。は。さ。る。の。狀。古。今。に。其。比。を。見。ず。子。厚。に。比。し。て。劣。る。こ。と。甚。し。と。謂。ふ。べ。き。の。み。

宗元

宗元の領本

子厚の見地は、實にかくの如し、而して遂に確然樹立するに至らざりしは、前にもい
 ひしか如く、身世沈落、五内焦亂、沈靜なる思索をなす能はざりしか爲にして、子厚は
 之を究むるに非らずして、之を樂しむ以て、丹田を治めむとしたり、獨り子厚
 のみならず、唐代一般の人心傾向、すべて然るものあり、是れ余が前に子厚を以て或
 點に於て、唐代を代表すべしといひし所以なり、而して、儒佛二教が調和せられて、明
 晰なる哲學を建設せしは、宋人に至て始めて之ありき、
 要するに、子厚は懷疑の中に、彷徨し、根底に於て、厭世的傾向あり、雖も、全く浮世を
 捨つるに及ばず、窮愁千古、殆んど自ら慰むべからざるに至らむとす、今夫れ馬を失
 ひし老は、倚伏を秋草に委し、蝶を夢みし翁は、是非を春叢に任せしに、非ずや、冥冥の
 理適もなく、莫もなく、如如の義有に非らず、空に非ず、故に知る者は、默す、語らざれば
 言ふ靡し人にして、悟徹すれば、何の辭か之あらむ、子厚の文章は、深く、人生を悟り終
 らざりしが爲に成りしのみ、
 請居の間に於ける子厚の研學は、全く文章修辭の爲にせし者の如し、而してその讀
 書鑑裁の精を見るべきは、諸子の辨にあり、列子を稱して、虛洞寥濶、亂世に居り利に
 遠さかり、禍身に遠ふを得ず、其心窮らず、易の世を遁れて、悶するなしといふ者、るれ

是に近きか。余故に取る。うの文辭、莊子に類して、尤も質厚爲作少し、文を好むもの、廢すべけむやといへる如き、文子を呼て、駁書となしたるか如き、共に一雙の眼孔を具ふる者といふべく、論語を以て、孔子の弟子、その言を雜記し、卒に曾子の徒に成るといへるは、實に千古の確論にして、移易すべからず。又鬼谷子を論して、怪謬異なること甚しく、攷校すべからず。其言益す奇にして、道益す陋。人をして、狙狂守を失ひ、陷墜し易からしむといひ、晏子春秋を以て、墨子より出てたりと爲し、吾疑ふ其れ墨子の徒に齊人なる者あり、之を爲るか。墨は儉を好み、晏子は儉を以て世に名あり。故に墨子の徒、その事を尊著して、己か術となせるもの。且つ、その旨たるや、同を尙ひ、愛を兼ね、樂を非り、用を節し、厚く葬り、久しく喪するを非るもの。是れ皆墨子に出てたり。又孔子を非り、好て鬼事をいふ、儒を非り、鬼を明にすること。又墨子に出てたり。その聚を問ひ、及び古治子等を言ふこと。尤も怪誕。又往々墨子その道を聞て、之を稱すといふ。此れ甚だ明瞭なりといひしが、如き、鶡冠子を論して、余、京師に往來し、鶡冠子を求むるに見る所なく、長沙に至て始めて、其書を得たり。之を讀むに、盡く鄙淺の言なり。唯だ、龍か引用するところ、美なれども、餘は可なる者なし。吾意ふに、事を好む者、僞て其書を爲り、反て、鵬賦を用ひて、以て之を文飾せしのみ。龍か之を取るに、非ざること決

柳

宗

元

宗 元 の 文

せりといひしか如き、優に比較、研究の精神を見るべく、特に之を大體より觀て、正鵠に中り、敢て瑣碎なる近代考證學派の爲す所に似ざるに至りては、以て多とすべしなり。凡そ古書の批判に關する言は、其人讀書の方法を見るに足るべく、又その學識の程度を察知し得べきものにして、頗る後人に益あり、是れ余が特にこゝに抄記せし所以、讀者必ずしも委棄すべからざるなり。なほ歴史の研鑽は、一篇の封建論となり、社會進化の理由を探究する所、頗る稱すべきものあり、他に非國語の如き多少、視るに足るものなしとせず、その才識想ふべきなり。

すでに此才あり、此識あり、敢て明訓を先賢に問ひ、以て幽致を萬古に鑑み、ひとす宜なり。その文章、千古之を世に傳へて、涙ひさるや。

第九 宗元の文

凡そ事の易きを見て、難きを見ざるものは、善く成ると少きのみ。古今文章を號して、難きとなす、而して子厚は最も善く之を知れり。是れ其功を成せし所以の根抵に非ざるか。曰く、孔子より以來、茲道大に開け、家ことに修めむことに勵み、精を刑り、慮を竭すもの、幾千年、その間、簡札を耗費し、心神を役思するもの、其れ數ふべけむや。文章

柳

宗

元

の録に登り、彼の後代に及べるは、こゝに數十人に過ぎざるのみ、その餘誰か争ふて、綺縠を裂き、互に日月を攀ち、高く萬物の中に視て、雄に百代の下に峙つを欲せらむや、率ね皆繼與するも、克たず、躑躅するも進まず、力盛し、勢窮り、志を吞て没す、故に曰く、之を得ること難し、と。而して、子厚は更に文章の根源あるべきを論し、歴代に於ける變遷を概観して曰く、文に二道のり、辭令褒貶は著述に本づく者なり、導揚諷諭は比興に本づく者なり、著述者の流は、蓋し昔の謨訓、易の象繫、春秋の筆削に、出づ。其要は高壯廣厚、詞正しく、理備はるに在り、宜しく簡冊に藏すべきをいふなり。比興者の流は、蓋し虞夏の詠歌、殷周の風雅に、出づ。其要は麗則清越、言暢にして、意美なるに在り、宜しく謠誦に流ふべきを謂ふなり。茲の二者は、その旨義を攷ふるに乖離して、合はず。故に筆を乘る士、恒に偏に勝ち、獨り得て、兼ぬるある者、罕なり。厥れ能にして、美を專にするある者、之を命じて、齷成るといふ。古しへ、文雅の盛なりし世と雖も、肩を並べて生ずる能はず。唐興て以來、是選に稱ふて、忤ちざるは、梓潼の陳拾遺のみ。その後、燕文貞著述の餘を以て、比興を攷めしむ、能く極むる莫し。張曲江、比興の隙を以て、著述を窮れども、備ふる尠はず。その餘、各一隅を探り、相與に道に背馳する者、ろの去ること彌よ遠く、文の兼ね難きや、斯れ亦た甚し、と。今夫れ著述、比興の語たるや、

宗 元 の 文

甚だ明断ならざるかの感なきに非されども、一は理をいふ者にして、一は情をいふ者の如し、而して、子厚が前言を反覆熟思するに、文章は内容外形の並行調諧を以て、その理想となせしや、明けし、是に於てか、その規獲する所、遠く六朝を過ぎ、西漢以上に在らざるを得ず。故に曰く、古より文士の多き、今の如きは莫し。今の後世、屈馬を希ふもの、數人を得べく、王褒劉向の徒を希ふもの、又十人を得べく、陸機潘岳の比に至りては、累累相望あり、若し皆之を爲して、已まされば、文章の大に盛なること、古しへ未た有らざるなり。後代乃ち之を知るべく、今の俗事庸目、信を取所なし、傑然特異なる者、乃ち此を見むのみ。と。隱約の中、自己の抱負を述べしを見るべく、所謂傑然特異なる者、夫子自ら道ふに非ざるなきを得むや、而して其趨向するところ、嘗に西漢以上といふのみならず、更に一步を進めて、屈馬以上に在りきと謂ふを得べきに似たり。すでに才識あり、その持奉する所をして、善くかくの如く、高きに至らしむ。彼の五彩發越、終古に耿耿たる者、何ぞ怪しむに足らむや。

さきに子厚が禮部に在りし時の著作を見るに、なほ六朝の餘習を脱せず、その高き者にして、僅に西漢のみ、而して一旦翻然として、大に頓悟をなせしは、全く古文研鑽の効果に出でしと雖も、その敘述する所、常に遷謫窮愁の中、悲喜百變の感にして、固

柳

より、檢束ある形式に規々たる能はざるか爲に出てし者亦た無しといふを得むや
是れ駢儷の體を棄て、自由なる古文を取りし所以余か前に天子厚の文を昌なら
しめむが爲に遠く之を永州の地に送れりといひしも亦た此に外ならざるなり而
して韓愈か表面上同一方向に進みしは却て大に異なる者あり、こは却て理を解か
むとして然りしなりき。

宗

余は次に韓柳二氏の比較を試みむとす。余が私見を以てし之を一言すれば、柳と韓
と均しく北方に生れしと雖も二人の性情境遇頗る異なる者あり、柳はむしろ南人的
にして、韓は依然北人的なり。二氏工力相敵しまた故らに相角せしことありと雖も
之を概括するに柳の文は常に詩的趣味を加ふと雖も、韓は詩にいたるまでも散文
的なり。その然る所以の者、柳は専ら情に出てしと雖も、韓は理を言ふに過ぎされは
なり。而して之を支那流の思想を以て評すれば知らず、苟くも純粹文學の上よりい
へば、柳は却つて韓に勝る者あるに似たり。

元

さはいへ、唐代の文章、韓柳にいたりて正に其盛を極めぬ。その間に於て、強て軒輊を
加へむとするは、蚍蜉大樹を撼かすに似さらむや、二人すでに性情境遇と、その記述
の對象とを異にせり。故に學ぶどころ大に同じからず、洪邁の論する所、乃ち取るべ

宗

きなり。曰く、韓退之自らいふ文章を作爲するや、上は姚姁、盤詰、春秋、易、詩、春秋、莊、騷、太
史子雲、相如に規し、其中を闕にして、其外を肆にす。と、柳子厚は自らいふ文章を爲る
毎に之を書、詩、禮、春秋、易に本つぎ、之を穀梁氏に參へて、以て其氣を厲まし、之を孟荀
に參へて、以て其支を暢へ、之を老莊に參へて、其端を肆にし、之を國語に參して、其趣
を博くし、之を離騷に參して、以て其幽を致し、之を太史に參して、以て其深を著はす。
と、皆韓柳文を爲るの旨、要學者之を思ふべしと、この言たるや、頗る宏博にして、包括
せざる所なく、截然分別し難く、兩者符合する所ありと雖も、之を要するに、韓は議論
を著けむか爲にし、柳は叙記を爲さむか爲にせしに非ざるか。

の

文

之を本領よりいふとき、柳の精神は懷疑にして、韓の主義は保守なり。故に支那固有
の思想を以てして、その内容の教義と相關するに重を置くに方りては、柳は固より
韓に若かすと謂はれしこと無きに非らず。故に李朴は曰く、子厚の文辭、淳正なるこ
と、は退之に及はずと、而して朱文公は更に之を詳説して曰く、韓文は議論正しく規
摸大なり、然れども柳子厚のや、精密なるに及はず、韓は平易の處あれば極めて平
易、險奇の處あれば極めて險奇なり、且つや他の潮州に在るや、能く止住し得ること
一年ならず、柳子厚は却て永州の力を得たり、柳文議論高古、但し醇正ならずと、この

柳 宗 元

評語頗る肯綮に中りしものあり、その柳文を以て精密といひ、又議論高古といへば、學問的精神の存在を意味するに非ざるか、而してその之を醇正に非すとて却くるに至りては、全く儒教の見地に立つものにして、儒教が世界に普遍なる教義に非ざる限りは、少くとも今日余輩の眼を以てして、毫も累となすに足らざるなり、而かもその精密といふ者は、之を子厚が愈肥の上にも適用し得べき者なり、是に於てか、黃震の言先づ見るべし、曰く、柳は文を以て韓と並び稱せらる、韓の文は事を論じて理を説き、一一明白透徹指釋すべきなく、所謂貫道の器たる者に非ざらむや、柳の上聽に達する者は、皆諛辭公卿大臣に致す者は、皆罪誦後、羞縮無聊の語のみ、碑碣等の作、亦た老筆俳語と相半す、間々經旨義理に及へば、多く聖人に謬ふ、凡べて皆道に根つかざるか、故なり、惟た人物を紀志して、以てその嘲罵を寄せ、山水を摸して、その抑鬱を舒ふるときは、峻深精緻にして、明珠夜光の如く、見れば、輒ち目を奪ふ、これ蓋し子厚放浪の久しき、自ら胸臆を寫して、諛を事とせず、哀を求めず、經義に關せず、又皆晩年の作、所謂其力を文章に肆にしたる者あるがためのみ、故に、愚は韓文に於て、擇ふなきも、柳に於ては、擇ふなき能はずと、王世貞又曰く、柳子厚は、才韓より秀て、氣は及ばず、金石の文、亦た峭麗、韓と長を争ふ、而して大篇は、後に墮たり、封建論の

宗 元 の 文

原道に勝れるは、文の勝れるに非ずして、事を論する長し易く、理を論する短なり易きか、故のみ、其他駁辯の類、尤も更に的を破る、永州諸記は、峭拔繁潔、予れ小語の冠か、獨り行ふところ、諸書讀、愈述は、艱苦酸鼻の詞、楚に勝ぬるに似、尾を搖かす状は、屈に勝えざるに似たり、他篇に至りては、培塿に非されば、夸毘、復た斐然たりと雖も、終に大雅に乖けり、此に似たる氣質、羅池の死終に神趣を墮す所以、吾かつて謂へらく、柳の蚤歳、多く其日を六季の學に弄つ、而して、晩に幽僻遠地を得て、以て深く造するに足れり、韓は合下に便ち六季を超えて、晩に富貴功名の分つ所となり、且つや酬應多し、蓋し損害に於て各中半すべきのみと、次に、兩氏の文辭、風神姿趣に就き、巧妙なる譬諭を以て説明したる者の言を舉げ、前に記せし體制上の、詳論を相待て、發明する所あらしめむか、廋道南は曰く、世唐の大家を稱するものは、必ず韓柳を推す、余を以て之を觀れば、高山大川、雄峙奔洶、その震虜、溼塞を見すと雖も、而かもその秀挺、廻紆、盡く藏すべからざるは、韓の文なり、魏巖絶、滯峭、奇環、曲人をし、遐眺、留睨、せしめ、而かも其靈氣、怪氣、固より克く籠罩するは、柳の文なり、又平原曠野、大將指麾、し天衝、地衝、自ら紀律あるは、其れ韓の變にして、間道斜谷、驚懸、掣電、方物すべからざる者は、其れ柳の變ならむかど、又楊慎の言に曰く、李

柳

宗

元

善卿文を評していはく韓は海の如く柳は泉の如く歐は瀾の如く蘇は潮の如しと、余謂へらく柳は泉の如しといふは未だ允ならず泉に易ふるに江を以てせば可ならむと而して羅大經は曰く韓は美玉の如く柳は精金の如く韓は静女の如く柳は名姝の如く韓は德驥の如く柳は天馬の如しと、以上古賢の評語之を概括して断論を爲さば略は下の如くなるを得む曰く柳は事を記するを以て史中より來り韓は理を論するを以て經中より出づ柳は其意を説破せず讀者をして會する所あらしめむとし時に奇を爲すの跡あり韓は之を説き盡くし宛ら麻姑を情ふて撥を搔くか如くならしめむとす故に柳は變化あり韓は縦横あり蓋し柳は高き者にして韓は大なる者なり柳は叙述の精緻と筆致の雋潔とを以て勝り韓は議論の奔放と氣魄の雄大とを以て秀つるものなりと、余はなほこゝに韓柳二氏が互に相評したる語を引用するを得む蓋し二氏固より當代に名あり而かも相許せしこと李杜其人と似たる者あり亦た以て君子人の美を爲すの趣を知らむ子厚かつて韓を評して謂ふ司馬遷と上下し揚雄に過きて遠きこと甚しと而も退之の柳を評するや乃ちいへらく雄深雅健司馬子長に似たり崔蔡は多とするに足らずと兩者ともに司馬遷を以て標的と爲し語て未だ審なら

宗 元 の 文

さる看ありと雖も亦た以て余か前論と全く背馳する者に非ず退之の揚雄に過くといはるいは儒教の議論を事とする爲に謂ひしなるべく子厚が子長に過くといはるいは雜駁の紀述に長する爲に謂ひし者ならむのみ、韓柳二人固より相下らず所長各異にして其一を欠くべからず若し夫れ歐陽修が痛く子厚を抑へ李翱を以て之に代へむとするに至りては徒らに儒學の爲に云ふものにして文章その者と相渉らず彼土の文を論する者常にその僻見あり固より取るに足らず今夫れ古文は唐宋に涉りて初めて復興せり其間文を以て名あるもの韓柳の外に三蘇歐曾王を推すこの八家すべて各所長あり先づその文致の風神を比較したるもの茅坤あり曰く吞吐駢馳千里の駒の如く而かも赤電を走らし疾風に鞭ち常なるは山立し怪なるは懸擊するもの韓愈の文なり岷巖剛切峻壑削壁に遊て谷風凌雨四に至る如きは柳宗元の文なり道麗逸宕美人を携へて東山に宴遊し而かも風流文物江左に照耀するは歐陽修の文なりその行くべき所に行きろの止るべき所に止まり浩浩洋洋千里の河に起き之を海に注く者は蘇長公の文なり曾鞏王安石蘇洵轍は至れり登は尤も大道に折衷し其の正を失はずと爲す然れども其才或は疲弊して副ふ能はずと更に體制上より所長を識別し前言と相待つ

柳

べきは劉開の言なり。曰く、文は西漢より盛なるは莫し、而して漢の所謂文は、但だ奏對封事あり、皆君に告ぐる體のみ、昔序ありと雖も、多く見えず、昌黎に至りて始めて、工に贈送碑誌の文を作り、柳州始めて山水雜記の體を創爲し、盧陵始めて敘事に專精、眉山始めて力を策論に窮め、經を序するは、臨川を以て優となし、學を記するは、南豊を以て稱首とす。故に文の義法は、史漢に至て已に備はり、文の體製は、八家に至て乃ち全しと、以て子厚が位置を領知するに足らむ。

宗

すでに子厚の所長を以て、敘述にありといへり、人若し何者か之を代表すといは、い余は便ち永州に於ける山水游記を擧げむ、文凡そ九篇、子厚乃ち之を以て不朽たり、凡そ支那文學中に於て山水の形勢を記せし者、始めに禹貢あり、次に鄒道元の水經

元

注あり、而して子厚の此文にありては、常に詩的趣味に饒にして、饒に傑出する所あり、小景清麗、他の名を立て、語を作り、變化し得て、乃ち別その言は扶疎、その字は錯落、杳杳たり、冥冥たり、忽忽たり、悠悠たり、境固より幽峭、旁ら議論を出して、更に奇なる者あり、水石の塊、借りて以て胸中の氣を吐く、故を以て奇怪精妙、その點綴の工、宛ら明珠翠羽の如く、妙境に入る、毎に神色酣暢、人をして覺えず、衣を解き盤礴せしめ、むとす、孫饒曰く、柳か胸中丘壑に富めり、故にその亭池山水を記するや、更に奇なり。

宗

る者ありと、而して最も稱すべきは、觀察精微にして、常に其境地に近接するにあり、篇篇の中必ず警策あり、波瀾横生、變幻百出、極まらず、彼の敷張を事とし、絶えて中心絶頂なく、篇幅徒らに長きに失する者に比して、頗る逕庭なく、むばあらず、每篇佳句頻頻相接し、群玉の圃に入るか如く、一一摘取するに堪へずと雖も、試に其二三を擧

元

け、以て鼎の一擲に充てむか、小石潭記に、潭中魚可百許、皆若空游、無所依、日光下徹、影布石上、怡然不動、儼爾遠逝、往來翕忽、似與遊者相樂、といふか如き、明かに鄒道元の、澄水平潭、清潔澄深、俯見遊魚、類若乘空、といへるより來りしと雖も、猶ほ且つ大に進みし所あり、又袁家渴記に、每風自四山而下、振動大木、掩冉衆草、紛紅駭綠、翫香氣、といひ、石渠記に、風搖其巖、韻動崖谷、視之既靜、其聽始遠、といへるか如き、僅々數十字の中

文

に、複雑にして迅速なる運動の現象を寫し、而も讀者をして善く之を眼前に髣髴せしむ、精深の筆、到底摸倣し難く、古今に其儔を見ず、子厚にして始めて之ありといふべし、世に漢字の信屈粗莽なるを以て、描寫細に入らざるを病む者あり、若しこの言に、いて真なりせば、子厚の才は蓋し料り難き者と謂ふを得む、永州九記の價值實にかくの如し、而して子厚の爲に私かに惜む所の者は、更に之をして五嶽四瀆の絶勝を探り、翻山倒海の大手筆を揮はしむるの機會なし、くて罷みし一事、是れのみ。

柳

宗

元

子厚の文にして他に傳ふべきは永州謫居中、その故人に寄せし書にして特にその夷獠の風土を叙したる部分にあり、其文たるや、大較司馬遷が任少卿に答へ及び揚惲が孫宗に報せし書と相似て、而かも時に過ぎたる者あり、疎疎蕪蕪、能く氣を以て事を驅り、事氣を凝せず、沛然一揮、長篇立るに成り、洗濯を加へざるどころ、自ら精神の之を貫くあり、才氣勃湧し、骨力頗る高し、その事の詞、耿耿念ふべく、件件一として窮愁羈旅の自ら喻す能はざるを曲盡したるに非ざるは、なく、語甚た怨み、又甚た悲む、之を譬ふれば、塞鴻月に嘶き、斷猿烟に啼くが如く、人をして覺せず、破涕せしめむとす、その許孟容に與へ、楊憑に與へ、蕭俛に與へたる數書の如き、斷截して屢文中に引用せり、未だ全豹を盡くす能はずと難も、讀者はこゝに至りて必ず想起する所あるべからむ。

游記書牘中の叙景叙事に係るものは、主觀的精神の感想を述べたるものなれば、その人を動かすことの深き固より然り、而して史的事實の記述若くは客觀の文字に至りては、遂に相及ばず、さはいへ強弩の餘勢、未だ魯縞を穿つ能はざるまでに至らず、觀るに足るもの亦た多し、段太尉逸事狀の如き、昌黎の張中丞傳後的一篇と相比すべく、文高く事要にして、曲に其妙を盡せる、縝密の筆致、最も味ふべく、之を昌黎の

宗 元 の 文

かの作の俊逸なるに對して、各その所長を顯はす者といふべきなり。

その傳の見るべき者に至りては、宋清傳、郭橐駝、梓人の如きあり、宋清傳は簡潔にして、議論亦た好く、郭橐駝は専ら議論を借て事を叙し、零は痕瑕なく、兼ねて詳確明快なり、而して梓人傳に至りては、王世貞の評語あり、曰く、子厚が諸記、尙は未だ是れ西京ならず、是れ東京の濶峻にして味ある者なり、梓人傳は其れ柳の懿か、然して大に言ふべき者あり、相職簡に居り要を握り、功を収め賢を用ふ、梓人を形容する處にありて、已に妙なり、只だ一語收束して、萬鈞の力あるは可なれども、引く者を發して味なく、發する者を冗して厭ひ易からしむるに至りては、奚ぞ其れ文ならむ、奚ぞ其れ文ならむと、然れども、是れ白璧の微瑕、全體に於ては、次序、摹寫、井井として、擲に入れり、又三戒の如き、推して小品の雋妙となすべき者、しかも各韻意あり、序に稱する所を見れば、臨江の麋は、勢に依て以て類に非ざるを于すもの、黔の驢は、技を出し以て強て怒らすもの、永の某氏の鼠は、時を竊で以て暴を肆にするものを指す、蓋し世俗の常態を諷して盡せり、東坡曰く、予、柳子厚が三戒を讀て、之を愛し、常に世人か妄に怒り以て悔を招き、蓋はむと欲して彰はるゝ者を悼む、吳に游て二事を水濱の人に得たり、亦た之に似たるを以て、河豚魚、烏賊魚の二説を作りぬ、子厚に續く者に非ず、聊

柳

か以て自ら警むるのみと。是れ以て觀るべきなり。以上文の體裁に従て、子厚の子厚たる所以を擧げ、殆んど之を盡したり。若し夫れ議論の文に至りては、封建論、復讐論の數篇、最も觀るべけれども、一一之を細論せず。余は更に「非國語」に就て、數言を付し、以てこの章を終へむ。

元 宗

「非國語」著作の趣旨は之を其自序に見るべし。曰く、左氏の國語、その文深閑傑異、固より世の耽嗜して已まざる所なり。而かもその說多くは、誣淫にして、聖に契らず。余、世の學者、その文采に溺れて、是非に淪し、中庸に由て、以て堯舜の道に入らざるを懼れ、諸を理に本いて、非國語を作る。蓋し國語は、子厚が最も力を盡せし者。此作ある固より、怪しむに足らず。而かも、自ら之を堯舜の道に循從して、論すと稱すれども、子厚の本領、已に純平たる儒教主義に拘束せられざる以上、その前言の如くならざるも、亦た宜なり。故を以て、後世之を誦贊する者、少なからず。東坡が江季恭にす報する書に曰く、非國語、鄙意之を然りとせず、但だ未だ著論するに暇あらざるのみ。子厚の學大率、禮樂を以て、虚器となし、天人を以て相知らすとせず。多しと雖も、皆此類のみ。時令、斷刑、貞符に於て、皆是に非ず。學者之を知らざるべからずと。東坡の見かくの如し。故に江が非非國語を著はすに方てや、乃ち曰く、久しく此書を爲すに意あり。

宗

謂はさりき、君之を先せむとはと。而して元の眞弊に至り、又曰く、國語は誠に非るべし。而して柳說亦た非なり。是に於てか、亦た非非國語の著ありき。蓋し、非國語は、少子厚の本領を發揮したる者にして、固より味ふべく、その議論の勁拔にして、鐵人を殺すの趣あるは、最も稱すべきなり。この書、元和三四年の頃、永州謫居の中に、成る。而かも、尙は當年の面目を存し、僑傑、廉悍の氣の見ゆるは、以て子厚の人と爲りを知るべからむか。

第十宗元の詩

詩 の 元

唐の詩、宋の文といふ。是れ口頭の套語なりと雖も、未だ大に異なるもの無く。むはあらず。然る所以は、一般時世の趨向に在り。雖も、場屋人を取る之に重きを置き、むはも因るなり。唐代の詩、無名の學究といへども、猶ほ且つ傳ふに足る者。一二首なきは希なり。况んや才情雙絶、子厚の如き者に於てや。余は、聊か子厚の詩に就て觀る所なく。むはあらざるなり。

子厚の詩に於けるや、所長全く其文と相似て、精深雋妙の處に於て、常に勝を制せり。而して其趨向、師奉する所は、陶淵明、次いて、謝靈運、更に下つて、王儲にあり。前人の所

柳

論之を道破して殆んど盡きたり。韓駒曰く柳州の詩多からず亦た衆家の體を備ふ。唯た陶を學ぶはるの本性の好むところ獨り及ふべからずと朱熹又曰く柳の人を學ぶところ便ち絶えて似たり詩陶を學ぶもの便ち陶に似たり。而して蔡儵は曰く柳か詩は雄深簡澹迥かに流俗に拔く至味自ら高く直に陶謝を揖す然して武庫に入るに似て森嚴を覺ふと之を要するに柳は全く陶より出てし者なり。

宗

律て試に之を論す陶家の詩たるや光風霽月の懷を以て邱壑烟霞の眞情と妙趣とを抒寫するの宗とする處は自然に在り。天機に任せ興會を事とし筆意に従て下り一點の俗氣なく澁滯窘隘の苦を離れて自在に文字を運旋し巧を弄し奇を衒ふの

元

失なく大匠の斧斤を運らす如く細削を煩はさずして自ら規矩に合し一も間然する所なきはるの獨特の擅場なりと蓋し清遠間放淵深朴茂の趣にいたりては實に模し易からず之を爲さむには蓋し其人の高と其情の醇とを要するなり。而して柳は略は之に相當り得べき者其自然を宗する處は根抵に於て全く相均しと謂ふべし。唯だ時代降下の影響は全く之を避くる能はず柳の詩は陶家の一派なりと雖も自然に其特色を存するを見るなり。唐代の詩人にして陶を學ぶ者すべて四人王孟韋柳是なり。而して仔細に之を察すれば右丞は高古襄陽は精微左司は冲和柳州は峻

宗

つらく唐代の詩風の變遷を察するに李杜の後大曆の十才子あり之を評する者は曰く錢起は體製新奇にして理致清澹なり盧綸は三河の年少風流自ら賞する如く。吉中孚は神骨清虛にして吟詠高雅宛然たる神仙中の人耿煒は才致俊爽にして意思不群なり韓翃は興致の繁富なるは芙蓉の水を出づる如く司空曙の屬調幽閑なるは新華の日に笑ふか如し。るの餘崔夏李の四人亦た皆詞采炳然として觀るべし。然れども洪響已に滅びて續音乃ち起り遂に所謂元輕白俗となりぬ。而して猶ほ古を師とする者韓柳二人あり二人の詩に於けるなほ其文の如く時俗と相反するを主とす韓を雄奇とすれば柳は古雅なり。二人は文に於て傳ふべきと同時に亦

元

た時に於ても傳ふべかりしなり。但夫れ氣運の然らしむる所二人の力を以てするも之を挽くこと能はず。蓋し二人の詩に對するや文に於ける如くに力を注かさずしにも由るならむか。

詩

下里巴人の調は和する者多くして陽春白雪の曲は解する者幾くもあらず。子厚の詩の當時に行はれざりし者固より怪むに足らず。然れども一二具眼の士は夙にその價值を評量して頗る其妙を賞嘆せり。司空圖の如き即ち是なり。曰く金の精は清

故に其聲辨すべき也。是れ澄より清くして、鐘より渾らむや。然らば、作者の文を爲り、詩を爲るや才格亦た見るべし。豈に彼に善くして此に善かららむや。愚文人の詩を作り、詩人の文を爲るを見るに、始めは皆その尙ふところに係る。尙ふところ、既に専らなれば、搜研愈よ至り、故に能くろの工を不朽に炫す。亦た猶は力巨にして、闢ふもの、持つところの器、各異にして、皆能く勝を濟し、以て勅敵となすことなきなり。予かつて謂へらく、韓吏部の詩百篇を累ね、其の氣勢を驅駕するや、雷を掀し、電を決し、天地の根を撐抉する如く、物状ろの變を鼓舞し、ろの呼吸に徇はざるを得ざるなり。今華下に於て、方に柳集を得たり、詩味を探搜すれば、致亦た深遠なり。ろの窮を俾け、克く壽にして、精を抗し、思を極めしめなば、固より瑣瑣たる者に非ず、輕しくろの優劣を識すべしや。

そも子厚の詩たるや、深遠識り難し、故に司空圖の此語ありと雖も、前賢亦た太だ推重せず。其妙を發明せしは、實に東坡に拠る。東坡の海外に在るや、方に盛に柳州の詩を稱せり。蓋し東坡、黎子雲の家に住るや、絶えて書なく、唯だ柳文あり、日々玩味せしに出づ。今夫れ古人の文章固より輕易すべからず、須らく反覆熟讀、意を加へて思索すべし。東坡は自ら言ひしか、如く舊書不厭百回讀、熟讀深思、子自知りし者、故に其柳詩を

論すや尤も詳密、加ふる蘆きに似たり。曰く、余嘗て書を評して、以爲らく、鍾王の跡は蕭散簡遠、妙は筆畫の外に在り、唐の顔柳に至て、始めて古今の筆法を集めて、之を發し、書の變を極め、天下翕然、以て宗師となす。而して鍾王の法、益微なり。時に至ても、亦た然り。蘇李の天成、曹劉の自得、陶謝の超然、固より已に至れり。而して杜子美、李太白、英偉絶世の資を以て、百代に凌跨し、古の詩人盡く廢す。然して魏晉以來、高風絶塵、亦た少しく衰ふ。李杜の後、詩人繼出、造詣ありと雖も、而かも才意に逮はず。獨り韋應物、柳子厚は、纏體を簡古に發し、至味を淡泊に寄す。餘子の及ふ所に非ざるなり。唐末の司空圖、兵亂の間に崎嶇し、而かも詩人の高雅を得、猶は承平の遺風あり。ろの詩を論するに曰く、梅は酸に止り、蘆は鹹に止る。飲食鹽梅なかるべからず。其美常に鹹酸の外に在り。と。以て一唱して三嘆すべきなり。子厚の詩は、陶淵明の下、韋蘇州の上に在り。退之、豪放奇險は、之に過ぎたれども、温麗靖深は、及ばざるなり。枯淡に貴ふところは、外は枯にして内は膏、淡に似て實は美なるを謂ふ。淵明子厚の流、是なり。若し中邊皆枯ならば、亦た何を道ふに足らむ。佛は言ふ、譬へは密を食ふか、如し中邊皆甜ならば、人五味を食ふて、その甘苦を知るもの、皆是れなるも、能くろの中邊を分別するものは、百に一もなきなり。と。又曰く、詩は須く爲にすることありて、作るべく、事を用ふる

柳

や當に故を以て新をなし、俗を以て雅となすべし。奇を好み新を務むるは乃ち詩の病なり。子厚が晩年の詩、極めて陶淵明を知る者なり。是れ、余が前言を證する者に非ずや。而して柳詩は此言によりて大に世に行はるゝを得たりきといふ。

余は前にしばしば蔡寬夫が子厚を評して、理に達せずといひしことあるを記せしが、全く詩に就て言ひし者なれば、こゝに便を以て引用するを得むか。曰く、子厚の賤せらるゝや、その憂愁憔悴の嘆詩に發するもの、特に酸楚となす。己を関み志を傷むは固より君子の免れざる所然れども、亦た是に至り卒に憤を以て死するは未だ理に達すと爲さるゝなり。樂天の既に退くや、外物に放浪す。眞に能く軒冕を脱屣するもの、然れども榮辱得失の際、銖々校量して自ら其達に誇り、毎詩未だ嘗てこの意を着けざるはあらず。是れ豈に眞に能く忘るゝ者ならむや。亦た力之に勝つのみ。唯だ淵明は達せず、その貧子賁子、其他の作を觀るに、愛に當ては愛ひ、喜に遭へば喜び、忽然愛樂兩なから忘れ、遇ふところに隨て皆適し、未だ嘗て其間に擇ふところあらず。所謂世を超えて物を忘るゝもの、要當に是の如くして後に可なるべく三人の詩を觀意を以て志を逆へば、人豈に見るに難からむや。是を以て賢不肖を論す亦た何を欺くべけむやと。この評、稍苛酷に似たり。雖も或點に於て確に肯綮に中るものあり。

元 宗

元 宗

りげにや子厚の詩は、愛中樂あり、樂中憂あり。その愛喜定まらず、全く世を超え物を忘るゝ能はざるどころ、淵明に比して却て人に近きを見るなり。

之を體形より立論するるとき、子厚の詩の本色は五言にあり。長篇は點綴清麗にして短調は清美閑勝なり。七言は一般に流暢雋妙。すべて古體を善くして對偶に屑屑たらず。而して樂府は托興飛動之を退之に比するるとき、當さるゝ上に在るが如し。唯だ退之が實際以上に甚だ標舉さるゝは、全く格調の別遷を拓開せし爲にして、必ずしも詩的趣味に在らざるか如く、且つ猶ほ諧俗に死ねざる所あり。子厚この處古今殊絶と稱すべき者なり。

左に先づ子厚の五言古詩の取るべき者を舉げ付するに短評を以てし、讀者をして一斑以て全豹を推知するを得せしめむ。

酬婁秀才寓居開元寺早秋月夜病中見寄

客有故園愁。瀟湘生夜愁。病依居士室。夢繞羽人丘。味道憐知止。遺名得自求。壁空殘月曙。門掩候蟲秋。繆委雙金重。難徵雜佩酬。碧霄無枉路。徒此助離憂。

蔡文啓いふ、かつて張文潛と韓柳五言の警句を論ず。文潛は退之が暖風抽宿麥。清雨捲歸旗と子厚が壁空殘月曙。門掩候蟲秋とを舉ぐ。然れども予を以てすれば、その他

猶は少なからざれども、この數句の如き庶幾くは以て相當ることを得むか。誠に斯句は警絶にして、亦た善く特色を發揮せるものなり。

柳 宗 元

詩眼にいふ、余かつて人に問ふ、柳詩何れか好きと答へて曰く、大體皆好しと。又問ふ、君何處を愛すと答へて云ふ、愛せざるものなしと。便ち曉らざるを知るなり。文章を識る者は當さに禪家の悟門あるが如くなるべし。夫た法問百千の差別要は須らく一轉語より悟入すべし。古人の文章の如き直に須つ一處を悟り得て乃ち他の妙處に通すべし。向に子厚か晨詣超師院讀禪經の詩の一段を讀むに因て、至誠潔清の意、參然前に在り。

汲井漱寒齒。清心拂塵服。閒持貝葉書。步出東齋讀。眞源了無取。妄跡世所逐。遺言冀可冥。繕性何由熟。道人庭宇靜。苔色連新竹。日出霧露餘。青松如膏沐。澹然離言說。悟悅心自足。

眞妄以て佛理を論す。言ふところは、以て蕪修を盡くすにあり。この外、亦た詞なしと。而して道人庭宇靜より以下、特に日色青松の二句にいたりては、常景常語に似たりと雖も、能く造化の妙を傳ふる此の如きは少し。且つや、一結解脫を極めて玄澹蓋し云ふ指に因て、月を見經を遺して、道を得本末の意を立て、詞を遣るや、その妙を曲盡

して、毫髮遺憾なき者と謂ふべし。

南洞中題

秋氣集南洞。獨遊亭午時。迴風一蕭瑟。林影久參差。始至若有得。稍深遂忘疲。竊禽響幽谷。寒藻舞淪漪。去國魂已遠。懷人淚空垂。孤生易爲感。失路少所宜。索寞竟何事。徘徊祗自知。誰爲後來者。當與此心期。

この詩純然たる唐韵意致已に恬雅なるに似て、中は實に孤憤沈鬱これ境と神と會するもの人をして自ら遠らしむ。一時溘泊の成るべきに非ず。東坡いふ子厚南遷後の詩、清勁紆徐、大率此に類すと。余是に於てか李于鱗が柳の古詩を選して、特に此を取ししことの大に具眼と爲すべきを知るなり。

與崔策登西山

鶴鳴楚山靜。露白秋江曉。連袂度危橋。縈廻出林杪。西岑極遠目。蒙末皆可了。重疊九疑高。微茫洞庭小。迴窮兩儀際。高出萬象表。馳景泛頽波。遙風遞寒篠。謫居安所習。稍厭從紛擾。生同胥靡遺。壽等彭鏗夭。蹇連困顛踏。愚蒙怯幽眇。非令親愛疎。誰使心神悄。偶茲遺山水。得以觀魚鳥。吾子幸淹留。緩我愁腸繞。

詩を論する者、往々之を以て南洞と並稱す。而して余は特に叙景の寥曠を愛す。

宗 元 の 詩

他に子厚か五言の優なるもの十數首を抄録せむ。

獨覺

覺來胸膈空寥落雨聲曉。良游怨暹暮。未事驚紛擾。間爲經世心。古人誰盡了。

溪居

久爲簪組束。幸此南穹。謫間依農圃。隣偶似山林。客曉耕翻露。草夜傍響溪石。來往不逢人。長歌楚天碧。

首春逢耕者

南楚春候早。餘寒已滋榮。土膏釋原野。百蟄競所營。緜未及郊。種人先耦耕。園林幽鳥。嘯渚澤新泉。清農事賦素務。羈囚阻平生。故池想蕪沒。遺畝當榛荆。羸隱既有繫。圖功遂無成。聊從田父言。款曲陳此情。眷然撫耒耜。回首烟雲橫。

雨後曉行獨至愚溪北池

宿雲散州渚。曉日明村塢。高樹臨深池。風驚夜來雨。予心適無事。偶此成賓主。

中夜起望西園值月上

覺來繁露墜。開戶臨西園。寒月上東嶺。冷冷疎竹根。石泉遠瀝響。山鳥時一喧。倚檻遂至日寂。冥將何言。

湘岸移木芙蓉植龍興精舍

有美不自蔽。安能守孤根。盈盈湘西岸。秋至風露繁。麗影別寒水。微芳委前軒。菱荷諒難雜。反此生高原。

禪堂

發地結菩荊。團團抱虛白。山花落幽戶。中有忘機客。涉有本非取。照空不待析。萬籟俱綠生。皆然喧中寂。心境本同取。鳥飛無遺跡。

苦竹橋

危橋屬幽徑。線繞穿疎林。迸響分苦節。輕筠抱虛心。俯瞰涓涓流。仰聆蕭蕭吟。差池下煙日。嘲哂鳴山禽。諒無要津用。棲息有餘陰。

掩役夫張進骸

生死悠悠爾。一氣聚散之。偶來紛喜怒。奄忽已復辭。爲役孰賤辱。爲貴非神奇。一朝續息定。枯朽無妍媸。生時勤皂隸。到秣不告疲。既死給櫬積。葬之東山基。奈何值崩濇。蕩析臨路垂。儼然暴百骸。散亂不復支。從者幸告予。聽之潛然悲。猶虎獲迎祭。犬馬有蓋帷。佇立唁爾魂。豈復識此爲。春鋪戴埋瘞。溝澆護其危。我心得所安。不識爾有知。掩骼著春令。茲焉適其時。及物非吾輩。聊且願爾私。

韋道安

道安本儒士。頗擅弓劍名。二十遊太行。暮聞號哭聲。疾驅前致問。有叟垂華纓。言我故刺史。失職還西京。偶爲群盜得。毫縷無餘贏。貨財足非倍。二女皆嫂娉。蒼黃見驅逐。誰識死與生。便當此殞命。休復事晨征。一聞激高義。皆裂肝膽橫。挂弓問所往。趨捷超崢嶸。見盜塞礮陰。羅列方忿爭。一矢斃酋帥。餘黨號且驚。摩令遞東縛。纏索相柱撐。彼姝久覩魄。兩下俟誅刑。郭立不親授。諭以從父行。摺收自擔肩。轉道趨前程。發夜敲石火。山林如晝明。父子更抱持。涕血紛交零。頓首願歸貨。納女稱舅甥。長安舊衣去。義重利固輕。師婚古所病。合姓非用兵。塌來事儒術。十載所能逞。慷慨張徐州。朱邱揚前旌。投驅從所願。前馬出王城。轅門立奇士。淮水秋風生。君侯既即世。麾下相欹傾。立孤抗王命。鐘鼓四野鳴。橫潰非所壅。逆節非所嬰。舉頭自引刃。願義誰顧形。烈士不忘死。所死在忠貞。咄嗟狗彘子。禽習猶趨榮。我歌非悼死。所悼時世情。

柳

宗

元

柳詩事も叙するに傾きし者、この後者二篇の外に猶見るべき多し。呂衡州凌員外を哭する如き反覆自ら其意を明にし、筆力規模、莊周左丘明に減せずと稱せらる。是に於てか愈上、柳が文詩、全くの所長を同うしたるを知るべし。以上擧たる所は、篇幅短くして善く整美緊切を盡すと雖も、更に長きものにありて

は、幾分類然自放の弊なきに非ず。猶は文に於て、特に小品に達したると相似すといはむや。

五言短句の最も妙なるは、江雪の一絶あり。

千山鳥飛絶。萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。

東坡いふ、鄭谷が江上晚來場畫處。漁翁披得一蓑歸。は村學究の詩なり。子厚の此の如きに至りては、既に格あり、殆んど天賦及ふべからず。と沈德潛又之を評して、清峭已絶といふ。蓋し、中れり七言勁拔なるもの、漁翁の一詩にあり。東坡末二句を剛り去らば、餘情盡きすといふ、詞を以ていへば或は然るならむか。

漁翁夜傍西巖宿。曉汲清湘燃楚竹。烟消日出不見人。疑乃一聲山水綠。迴看天際下。中流岸上無心雲相逐。

流暢なるもの、聞黃鸝の一首、或は庶幾からむ。

倦聞子規朝暮聲。不意忽有黃鸝鳴。一聲夢斷楚江曲。滿眼故園春意生。目極千里無山河。麥芒際天搖青波。王綏優本少賦役。務閑酒熟饒經過。此時晴烟最深處。舍南巷北遙相語。翻日迴度昆明飛。凌風邪看細柳翳。我今誤落千萬山。身同僮人。不思遷。鄉禽何事亦來此。令我生心憶桑梓。閉聲迴翅歸務速。西林紫樾行當熟。

柳

宗

元

七律に至りては、作るところ多からず、前に引きし中の桂嶺瘴來雲似墨、洞庭春盡水如天、驚風亂颭芙蓉水、密雨斜侵牆粉、薛の如き、その雋絶を極むるもの絶句に至りては、性情流動、取るべき猶ほ多し、その主なるもの、既に挙げたれば、復た贅せず、唯だ曹待御の象縣を過ぎて寄せられしに酬ひて、

破額山前碧玉流、騷人遙駐木蘭舟、春風無限瀟湘意、欲採蘋花不自由。

といふに至りては、沈德潛か推して唐絶の壓卷となし、李益の同樂峰前、劉禹錫の山園故國杜牧の烟籠寒水、鄭谷か楊子江頭と伍せしめむとせしもの、詩格正に幽妙、微婉の域に入り、楚騷の餘風を存する者といふべし。

その樂府に至りては、短甞鏡歌よりも、むしろ他の短曲に於て取るべき者多く、楊白花の如き、蓋し最となすべし。

楊白花、風吹渡江水、坐令宮樹無顔色、搖蕩春光千萬里、茫茫曉日下長秋、哀歌未斷城、鴉起。

調と意と融會して、俱に美といふべく、言婉にして、情盡きす、太白の遺韵を得るに似て、その餘音の杳杳たるは、以て鬼神を泣かしむべし、惜む所は、當年連臂の者をして、歌はしめさりしにあり。

古東門行の如きに至りては、語語典實にして、氣亦た雄悍、自ら別調を推すべきに似たり。

漢家三十六將軍、東方雷動橫陣雲、雞鳴函谷客如霧、貌同心異不可數、赤丸夜語飛電光、微巡司隸眠如羊、當街一叱百吏走、馮敬胸中函匕首、兇徒側耳潛愜心、悍臣破膽皆杜口、魏王臥内藏兵符、子西掩袂真無辜、羌胡穀下一朝起、敵國舟中非所擬、安陵誰辨削礪功、韓國詎明深井里、絕腰斷骨那下補、萬金龍贈不如土。

他に行路難の如き、亦た悲慨激切の意あり、而して放鷓鴣詞、籠鷹詞、跋鳥詞、聚蛟謠等の如きに至りては、寄託頗る深く、古樂府の遺意を得たり、今は放鷓鴣詞一首を挙げむ。

楚越有鳥甘且腴、嘲嘲自名爲鷓鴣、狗媒得食不復慮、機械潛發罹罝罟、羽毛推折觸籠籜、烟火煽赫驚庖厨、鼎煎芍藥調五味、膳夫攘腕左右視、齊生不忍殺、棘牛筋子亦放郢、郢鳩二子得意猶念此、况我萬里爲孤囚、破籠展翅當遠去、同類相呼莫相顧。

子厚か餘事の詩百五十首に及ばず、而して其傳ふべき者の多きこと實にかくの如し、誰か之を才ならずといはむ、嗚呼才鬼今になほ窮荒に血食するならむと雖も、獨り之を興招するに由なきを奈何む、而してわが言はむと欲する所、正に盡きぬ。

宗 元 詩

柳 宗 元 完

明治三十三年五月七日印刷
明治三十三年五月十日發行

定價貳拾五錢

編輯人兼

佐藤儀助

東京神田區錦町二丁目六番地

印刷人

大野喜六

同麴町飯田町四丁目卅一番地

印刷所

成功堂印刷所



發行所

東京市神田區錦町二丁目六番地

新聲社

久保文士著述目錄

評釋叢書一編
漢詩評釋

定價二拾錢 郵稅四錢

評釋叢書二編
漢文評釋

定價二拾錢 郵稅四錢

東西文豪評傳一編
柳宗元

定價二拾五錢 郵稅四錢

中村不折意匠畫
山水美論

定價二拾五錢 郵稅四錢

馮虛姑射三君合著
白露集

定價三拾錢 郵稅四錢

漢詩評釋續篇
古詩評釋

印刷中 定價未定

山水美論續篇
山嶽退

東西文豪評傳

韓

退

論之

七月中發行
九月中發行

書叢學文年青

著君華桂藤江士學文米

法作文韻

錢二稅郵 (編五) 錢拾價定

明治文學史に特筆せざる可からざるものは、新詩の勃興也。從來の詩形の狹隘なる小範圍に拘束せらるゝが如きことなく、只調を七五にとりて縱横千萬言、自在に詩想を舒るを得、自然人事の美、一として其絃に入らざるはなし。これ實に最良の詩形として、現在及び未來に亘りて日本文學の生命たるものに非ずや。宜なる哉天下の青年の翕然これに集りて、心血を瀝き盡くすを、然りと雖も、憾らむらくは、世未だ其作法を説きたるものなし、我青年文學叢書はこゝに第五編として、韻文作法を出す所以也。

著君華桂藤江士學文米

法作文論

錢二稅郵 (編四) 錢拾價定

文章の要は筆を執つて世に立つ者のみならず、農工商都へての社會を通じて一日缺く可からず、而して論文に於いて、殊に其急なるを見る。蓋し是れ自己の意見を發表し、主張を現はすものなれば也。本書は一卷悉く論文の作法を説きたるものにして、基礎を論理學と修辭學とに置き、東西文豪の卓説を參照し、猶自家の意見を之に加へ、相融和して以て完全なる作法を案出す叙述の丁寧にして解し易きは、世の己に知る所。文辭亦例によりて簡麗、勃率無味の事を説いて而も興趣の盡きざるものあり、蓋し桂華氏一家の筆法。

書叢學文年青

著君華桂藤江士學文米

法究攻學文

錢二稅郵 錢拾價定

本書は少年歐米に留學して東西の文學に精通せる、米國文學士江藤三氏の著述せるものにして、青年文學叢書第一編として、神田錦川新聲社より發行せり。定價値に十錢の半々たる小冊子なりと雖も、網を文學の定在、文學攻究法、文學大綱、學校、攻究書籍、現時の文學の七つに分ち、丁寧の文に、初學者の爲に指針の勞を執れるは、多とすべきなり(女子の友批評)

著君華桂藤江士學文米

法作文美

錢二稅郵 錢拾價定

今日新聞に雜誌に見ざることなく文士の筆にせざるなきものは實に美文也。蓋し韻文の拘束を脱して、縱横に天地の美を調ひ、自然の美を叙する美々の如きは、今の時に最も適應せる文體なる也。本書は斯くの如き美文の作法を丁寧に説きたるの書、年少文に志す人の寶典たると論なし。

米文學士 江藤桂華君著

三編 美學大要

洋裝全一冊 定價拾錢 色彩表紙 郵稅二錢

美は美なる理想を研究するを以て目的となすもの、文學美術に志を抱ける人の一日も缺く可からざる緊要の學科たるは論なし。唯吾國に在りては、此學に關する者皆極めて少、偶々世に出づるものは、強ひて其語を險にし、其意を晦まし、故らに解し難からしむ。吾文士の美學に關する知識の貧乏なるもの偶然にあらざる也。江藤文學士深く之を慨し、屬稿此一卷を著す。所説極めて簡明、理發最も透徹、一讀よく美學の本質を明かにし、藝術の價値を知る上に於いて、文章を仰する上に於いて、得る所の大淵る可からざる可し。

評 釋 叢 書

編二 漢文評釋 久保文學士著 賣切印刷中

文學士 阪本四方太君著

俳文評釋

大判洋裝 定價貳拾錢
全壹冊 郵稅四錢

俳文は文体の簡勁なるに於ては、豪壯なる漢文と優麗なる國文とに對向すべく、觀察の奇警、着眼の清新なるに於て、洋文に當るを得じ、斯くの如き價値を有するにも關らず、唯僅かに一部分の士に知られて、未だ廣く世の玩索を受けざるは、斯壇の爲めに誠に遺憾なりと云はざるべからず、著者、坂本文學士は、夙に名聲、俳壇に騷ぐの士、從て其俳文に於ける造詣も亦甚だ大也。氏、深く俳文の趣味を世に知らしめんと欲して、特に此一卷を著はざる、深淵の學識、字句を註釋して精細周到、銳利の眼光、長短を論評して的確嚴正、而して是を述ふるに流麗、春水の如く、穩雅、梅花の如き筆を以てす。簡潔清新の原文と相對して光彩煥然、是を誦する者知らず、くの中に俳文の趣味を解して、自己が修文の上に資すると、決して尠少ならざるべきを信す。

編五 英文評釋 淺野文學士著 近刊印刷中

刊 續 釋 評 歌 和 編 六

大町桂月遠く雲州簸川のほとりに隠れて、而も一言一行常に京都の文壇を騒がし、人争うて其消息を聞かんことを希ふ。文界一代の花役者、才氣定に倫を絶つ。蓋し子は熱情眞摯今の文壇稀に看るの士、直言讜議、眼孔に映じ来るもの、快斷直に拵へて字とす。飾らず、詐らず、飽く迄大膽に、飽く迄自由に、文學の爲め、社會の爲め、常に其振興と刷新とに向つて、滿腔の精力を傾倒し盡くす。花の如き趣味多き文、こゝに於いてか、生命△あり、熱血あり、一詩人をして長く其名を忘るゝこと能はざらしむ。文士の多くは勉めて子の

大町桂月著 文學 小觀 再出版

全壹冊 定價參拾錢
郵稅四錢 本美形中冊壹全

小觀』子の文學的論文を集め盡くせるもの、半生の心血注いでこゝに在り。春暘、夏露、秋霜、冬玲、あらゆる文の妙を極め、嶄新にして精緻、奇抜にして痛快、論亦嶄として他を抜く。眞個明治文壇の大産物、則して小觀といふもの、謙辭に過ぎざる也。

●批評に省るものは、之が爲めにあらずや。天下の青年の擧げて、子の文を讀むと喜ぶは之が爲にあらずや 一卷の『文學

河東碧梧桐君著

再續
版篇

俳句評釋

正參
編版

●俳壇未曾有之寶典●

批評
一斑

新派の鶴河東碧梧桐君の撰集を並に得し得る様に丁寧な評釋を加へたるもの何れもその精神を捉へ得て、駁論を流穿索、未だ走りざるは、且つまた以て新派の立脚地を窺ふを得べく、初心者の座右の珍書とすべし。(大阪毎日) 芭蕉其他古人の有名なる俳句に就て文學的に簡明に評釋を試みたるものなり。中には首肯し難き節なきにあらざれども、初學者の爲には頗る結構なり。余輩は尚ほ此種の書續々出て人とみ望む。(萬朝報)

正編

俳句は詩形の短小なるが故に、簡譬濼麗を主として餘韻を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るか故に、古今の名句多くは解し易からず、是れ初學の士の最も憂ふる所、本書は古人の名吟を選び、丁寧懇切なる註解を加へ、其苦心經營の存する所を知らしめ、傍ら著者自家の工夫を述べて、作句上の秘訣を教ふ。一讀すれば、俳句の歴史、趣味、作法を曉得し、自由に感懷を十七字詩に洩すを得るに至る可し。

續編

『俳句評釋』の一卷を公にするや、初學の士趨走して是を求め一版二版忽ち盡きて三版を發市するに至れり。著者江湖嚙望の厚きに激し、勵精更に筆を續卷に執り、正編に洩れたる秋春の二季を評釋し、以て完璧缺くるなきものとなす。其評論の嚴正にして痛快なる、實に快刀一閃、亂麻を斷つものあり。試に讀一過せば、俳句を鑑識する上に於て、作法の妙機を知る上に於て、少からざる益を得べし。

全貳册

抽珍美本
色彩表紙

定價參拾五錢郵稅

四錢

購讀者の都合によりて
は、正續いづれにても

一册

を分ちて貴需に應ず可し
一冊定價拾八錢郵稅二錢



一月一號
毎號連り
新の月一
りせ載連

聯句評釋

著の『俳句評釋』
るれ成に筆の者

白露集

總
ス
本
洋裝
定價參拾錢
郵稅四錢

文學士 戶澤姑射君 合著
文學士 久保天隨君
文學士 菱野馬鹿君

再版

金風初めて衣を吹き、白露漸く秋に横はる。そも觸るなば碎けん白玉のうち清き涙をついみ、大地の萬象をうつすものは露にあらずや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を、あらはして剥すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繕げ。若しそれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫真銅版に刷して巻中に挿める不折爲山二子の畫は、雕心鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふるもの。



田山花袋君著 (參版)

ふる郷

全一冊 定價廿錢
洋裝美本 郵稅四錢

ふる郷は好箇の題目なり、ふる郷は人生に於ける最も清く最も美しき舞臺なり。ふる郷は人間が最後に至るまでの長き追憶なり。著者の詩的幽艶の筆を揮つて、芦花風にそよげる沼と、残涼水枯れたる古城趾と、雲影此、垂れたる平原とを有せる追憶の情深きをのなつかしきふる郷を寫す。まかも著者の之れを寫すや、半は正面より半は側面よりし、奇正縱横殆ど端睨す可からざるの概あり、正に是明治文壇有数の佳作。

小扇頭

小島水君著

定價十二錢〇郵稅四錢

本書は青年文壇に噴々の名ある小島水君か自然の美を謳ひて長虹の氣を吐ける者、收むる所の美文、皆若吟繚碌の餘に成りて、艶麗、瀟灑、豪宕の美、共に一卷のうち在り。刻成りて世に出づるや、江湖の視線一に此書に集り、初版旬日にして盡さしを以て、著者に屬するに嚴密なる校訂と、新作の増加とを以てし、再版を發售せしに、亦忽にしつゝ、今や第三版剩するところ、十數部に過ぎず、江湖の歡迎思ふ可き也。



妖堂居

士編述

文壇風聞記

全一冊 定價拾五錢
袖珍郵稅一一錢

文壇風聞記は文壇樂屋觀也。小説家、評論家、俳人詩人等百余の文士を捉へ來りて、其の冠を去り、其衣を剥ぎ赤裸々たる面目を紙上にあらはす。文學は其作物を驗して敢へて作者を知るの要なきか如しと雖も、其文を讀んで其人を想ひ、其人を想うて其風采を知り、逸話を知らんとするは人の常情、此書は實に讀書社會の喝望と満さんか爲めに出版たる也。

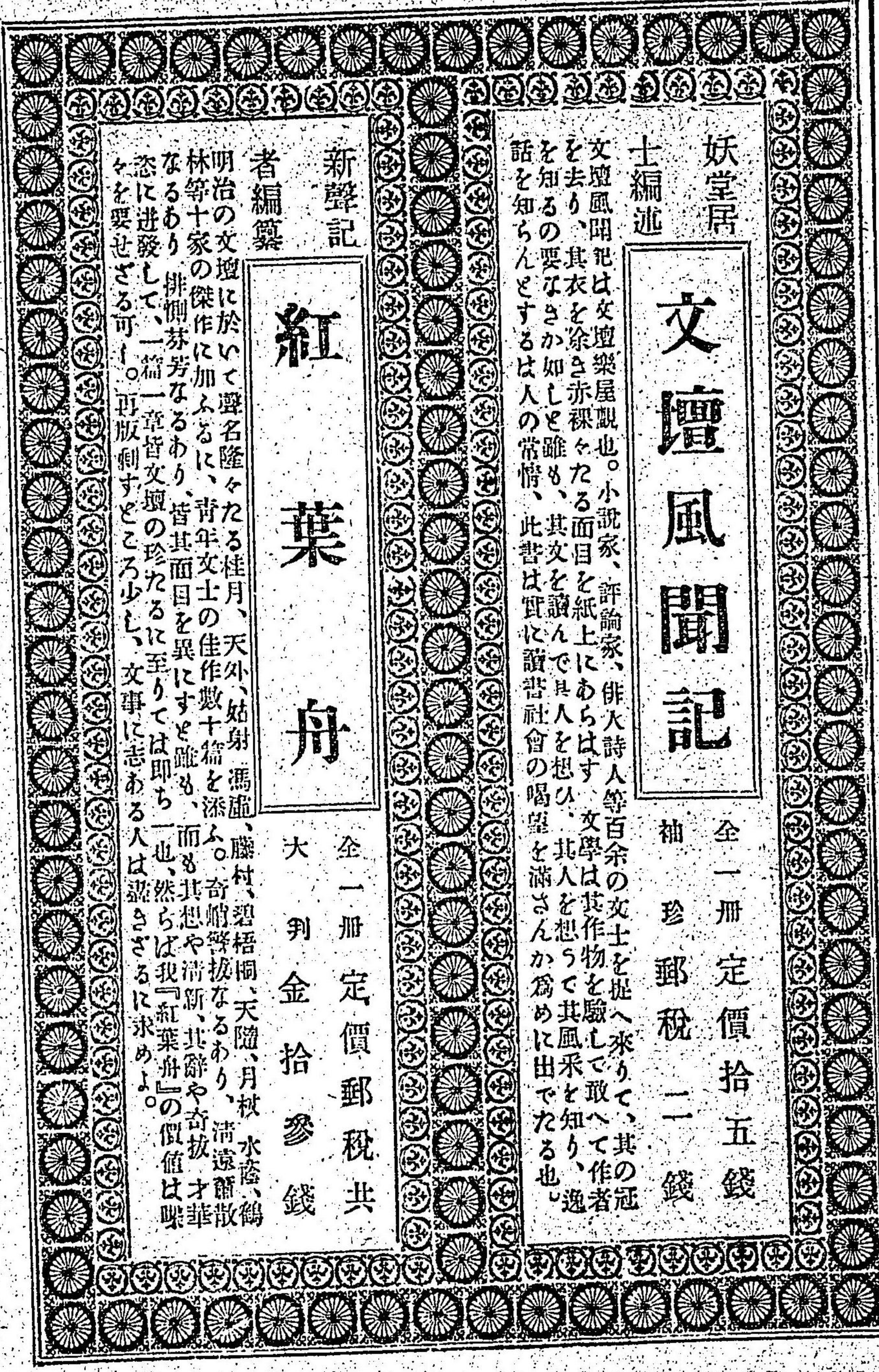
新聲記

者編纂

紅葉舟

全一冊 定價郵稅共
大判金拾參錢

明治の文壇に於いて聲名隆々たる桂月、天外、姑射、馮虛、藤村、碧梧桐、天隨、月杖、水齋、鶴林等十家の傑作に加ふるに、青年文士の佳作數十篇を添ふ。奇麗警拔なるあり、清遠蕭散なるあり、排側芬芳なるあり、皆其面目を異にす。雖も、而も其想や清新、其辭や奇拔、才華恣に迸發して、一篇一章皆文壇の珍たるに至りては即ち一也、然らば我『紅葉舟』の價値は喋々を要せざる可し。再版剩すところ少し、文事に志ある人は速に求めよ。



第二學期生徒募集



規則書申込次第進呈す

大日本文章學會

作文通信教授

本會を開いて既に一年を経あり。其間に於て作文通信教授の上にて得たる所敢へて少なしとせず。此經驗を基き、本年一月即ち第二學期よりは、全軀に大改良を加へ、新に講師を聘し學科を増し以て完全なる文章講義録たらしむるを誓ひ、短日月間に文章を練熟せしめんとを期す。目下入學に極めて便なれば、有志者は至急申込まる可し。

科目

學科

國文評釋、漢文評釋、和歌評釋、漢詩評釋、日本文典、日本文章史、審美學、修辭學、日本文人傳、漢文法一斑、名家文範、故事釋義、文章作法、美辭類纂、熟語詳解

略則

修了一ヶ年、毎月講義録二回を、大判八十頁以上を頒つ。京條三十錢、月謝廿五錢、半ヶ年一圓六十二錢、一ヶ年二圓四十錢。○文章は無料にて攝削の需に應ず

講師

大町文學士 内海文學士 十時文學士 江藤文學士 大沼鶴林氏
久保文學士 杉文學士 田岡嶺雲氏 山川芳則氏 松本道別氏

東京市神田區錦町二丁目六番地

大日本文章學會

